徳島市埋蔵文化財発掘調査概要4

1994. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要4

1994. 3

徳島市教育委員会

序　　文

万葉の時代から知られる清冽な吉野川の水と眉山の豊かな緑に恵まれた徳島市には，先人が残した悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

都市開発事業に伴う発掘調査により明らかにされる数々の埋蔵文化財には，かつて徳島の地に生活した先達の心が込められており，これらを学び受け継ぐことは，創造性を育む文化の香りの高い街づくりに通ずるものと思われます。

本市では，開発と文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査を実施しており，多大な成果を得ています。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが，生涯学習および歴史教育，さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば幸甚かと存じます。

最後になりましたが，発掘調査を実施するにあたり，多大な御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

1994年3月31日

徳島市教育委員会

教育長　小　林　　實

例　　言

1　本書は平成４，５年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した発掘調査のうち，４遺跡４件についての概要報告書である。

2　報告の対象となった遺跡名，調査原因，調査場所，調査期間，調査面積は各章の文頭に掲載した。

3　本書の作成は各調査担当者（三宅良明，勝浦康守）が執筆し目次欄に担当名を記した。なお編集は勝浦が行った。

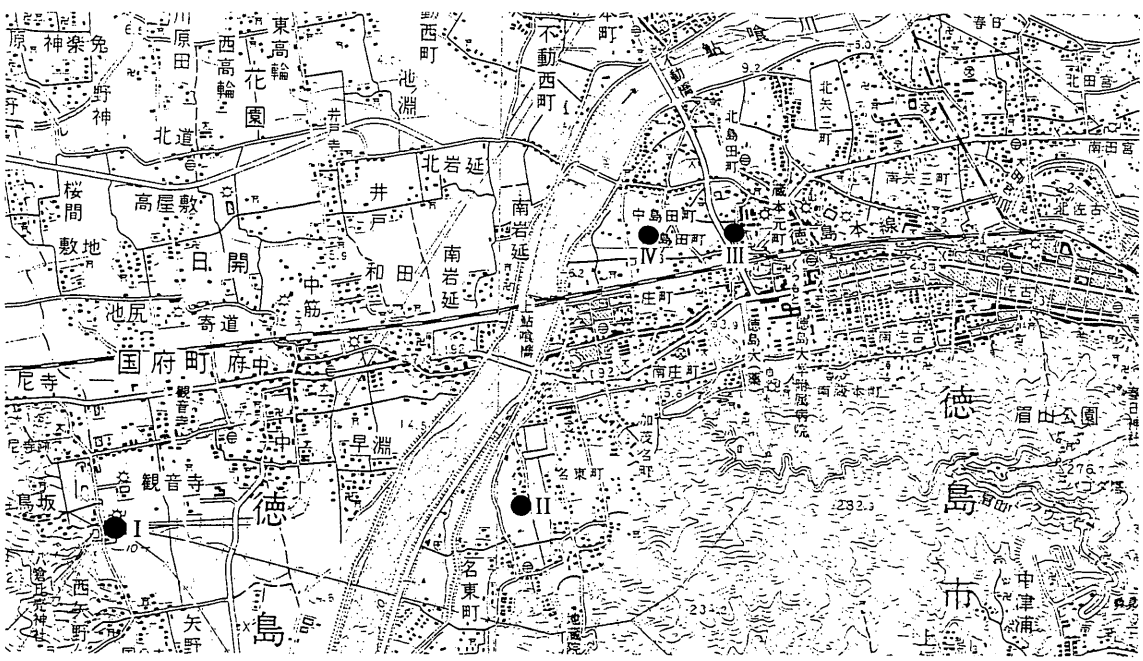
4　発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。

5　出土遺物，図面，写真の整理等報告書作成に関する作業は各担当者が行った。また資料の整理，報告書作成には下記の方々の協力を得た。

市川欣也　倉佐晃次　高木　淳　佐伯俊裕　中野勝美　青木健司　斉藤浩二
山口文子　折野絵美　伊丹理晴　宇山博之　笠井美幸　佐藤智恵

6　発掘調査に伴う日誌，写真，図面，台帳，出土遺物は徳島市教育委員会が保管する。

7　発掘調査を実施するにあたり，開発申請者ならびに多数の関係諸氏に多大な御配慮をいただいた。記して感謝の意を表する。



調査地位置図（Ⅰ　矢野遺跡　Ⅱ　名東遺跡　Ⅲ　中島田遺跡　Ⅳ　南島田遺跡）
（国土地理院発行５万分の１図幅「徳島」「川島」使用）

目　　次

序文

例言

本文目次

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要……（三宅）……1
　－変電設備増設工事に伴う発掘調査－
Ⅱ　名東遺跡発掘調査概要……（勝浦）……25
　－住宅開発工事に伴う発掘調査－
Ⅲ　中島田遺跡発掘調査概要……（勝浦）……41
　－店舗建設工事に伴う発掘調査－
Ⅳ　南島田遺跡発掘調査概要……（勝浦）……51
　－南島田ＳＣ建設工事に伴う発掘調査－

挿図図版

写真図版

挿図図版

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要

－変電設備増設工事に伴う発掘調査－

第１図　調査地点位置図

第２図　Ａ地点検出遺構図

第３図　溝SD01遺物出土状況平面図，土層図

第４図　溝SD01横断面図

第５図　土壙SK01出土紀伊型甕

第６図　溝SD01出土遺物（甕）

第７図　溝SD01出土遺物（甕）

第８図　溝SD01出土遺物（甕，底部穿孔土器，高坏）

第９図　溝SD01出土遺物（鉢）

第10図　溝SD01出土遺物（壺）

第11図　Ｂ地点検出遺構図

第12図　竪穴住居跡SA02出土勾玉，SA04出土紡錘車

第13図　竪穴住居跡SA01遺物出土状況平面図，土層図

第14図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）

第15図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）

第16図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）

第17図　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）

第18図　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢，底部穿孔土器）

第19図　竪穴住居跡SA01出土遺物（高坏）

第20図　竪穴住居跡SA01出土遺物（壺，柱状片刃石斧）

Ⅱ　名東遺跡発掘調査概要

－住宅開発工事に伴う発掘調査－

第１図　調査地概略図

第２図　遺構配置図

第３図　竪穴住居跡SA01

第４図　竪穴住居跡SA01遺物出土位置図

第５図　竪穴住居跡SA01出土遺物

第６図　竪穴住居跡SA01出土遺物

第７図　竪穴住居跡SA01出土遺物

第８図　竪穴住居跡SA02

第９図　竪穴住居跡SA02出土遺物

第10図　竪穴住居跡SA02出土遺物

第11図　溝SD01出土遺物

Ⅲ　中島田遺跡発掘調査概要

－店舗建設工事に伴う発掘調査－

第１図　中島田遺跡調査地位置図

第２図　調査地概略図

第３図　遺構配置図

第４図　Ｐ01(1)，Ｐ02(2)，Ｐ03(3)，SK01(4)，包含層（５～16）出土遺物

Ⅳ　南島田遺跡発掘調査概要

－南島田ＳＣ建設工事に伴う発掘調査－

第１図　試掘ポイント（Ｎｏ．１～30）および試掘調査位置図

第２図　試掘ポイント堆積土層模式図
第３図　出土遺物
第４図　堆積土層図

写真図版

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要

－変電設備増設工事に伴う発掘調査－

図版１　上：溝SD01遺物出土状況
下：溝SD01遺物出土状況
図版２　上：溝SD01遺物出土状況
下：溝SD01壺（54，56）ほか出土状況
図版３　上：溝SD01遺物出土状況
下：溝SD01甕(５，８)，高坏(35)，鉢(52）ほか出土状況
図版４　上：不明遺構SZ01および溝SD01
下：土壙SK01紀伊型甕(2)出土状況
図版５　溝SD01出土遺物（甕）
図版６　溝SD01出土遺物（鉢）
図版７　溝SD01出土遺物（鉢，底部穿孔土器，甕）
図版８　溝SD01出土遺物（壺）
図版９　上：竪穴住居跡SA01
下：竪穴住居跡SA01内炉跡上遺物出土状況
図版10　上：竪穴住居跡SA01甕（78，79），鉢（130）ほか出土状況
下：竪穴住居跡SA01鉢（109），高坏（140）ほか出土状況
図版11　上：竪穴住居跡SA01鉢（115，129）出土状況
下：竪穴住居跡SA01打製石包丁出土状況
図版12　上：竪穴住居跡SA02，03
下：竪穴住居跡SA02，03
図版13　上：竪穴住居跡SA02蛇紋岩製勾玉出土状況
下：竪穴住居跡SA02蛇紋岩製勾玉出土状況
図版14　上：竪穴住居跡SA02炭化材検出状況
下：竪穴住居跡SA03鉢出土状況
図版15　上：竪穴住居跡SA04
下：竪穴住居跡SA04
図版16　上：竪穴住居跡SA04甕出土状況
下：竪穴住居跡SA04土製紡錘車出土状況
図版17　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）
図版18　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕，鉢）
図版19　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）
図版20　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）
図版21　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）
図版22　竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）
図版23　竪穴住居跡SA01出土遺物（高坏）
図版24　竪穴住居跡SA01,02,04出土遺物（141,142,149,150:SA01　63～65:SA02　66～69:SA04）

II　名東遺跡発掘調査概要
－住宅開発工事に伴う発掘調査－
図版１　調査地全景
図版２　上：竪穴住居跡SA01
　　下：竪穴住居跡SA01遺物出土状況
図版３　上：竪穴住居跡SA01遺物出土状況
　　下：竪穴住居跡SA01炉跡検出状況
図版４　上：竪穴住居跡SA02
　　下：竪穴住居跡SA02
図版５　上：竪穴住居跡SA02
　　下：竪穴住居跡SA02張出部
図版６　上：竪穴住居跡SA02内SP01
　　下：溝SD01
図版７　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版８　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版９　竪穴住居跡SA01（24～28），SA02（44，45）出土遺物
図版10　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版11　竪穴住居跡SA02出土遺物
図版12　竪穴住居跡SA01（33～43），SA02（61～68）出土遺物
図版13　竪穴住居跡SA01（29），溝SD01（70～72，74～78）出土遺物

III　中島田遺跡発掘調査概要
－店舗建設工事に伴う発掘調査－
図版１　調査地Ｉ区全景
図版２　調査地Ｉ区全景
図版３　調査地II区全景
図版４　調査地II区全景
図版５　Ｐ01(1)，Ｐ02(2)，Ｐ03(3)，SK01(4)，包含層（５～16）出土遺物

Ⅳ　南島田遺跡発掘調査概要
－南島田ＳＣ建設工事に伴う発掘調査－
図版１　上：試掘調査地全景
　　下：調査地堆積状況
図版２　堆積層序
図版３　出土遺物

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要

－変電設備増設工事に伴う発掘調査－

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要

――変電設備増設工事に伴う発掘調査――

調査場所　徳島市国府町矢野550　四国電力国府変電所構内

調査期間　平成４年８月25日～９月11日，12月４日～平成５年１月14日

調査面積　92Ａ地点：約40㎡，92Ｂ地点：約60㎡

１　遺跡の立地と歴史的環境

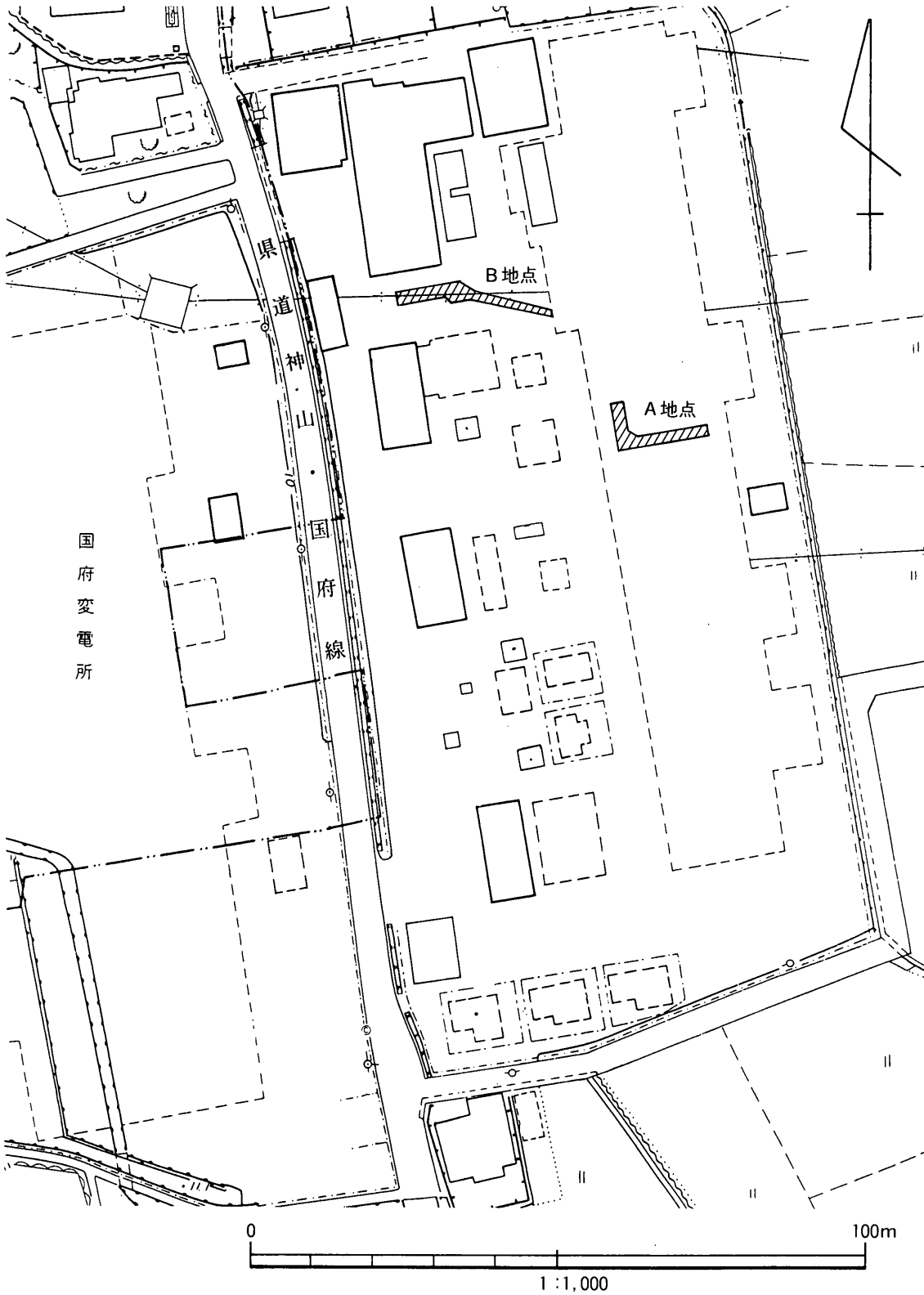
矢野遺跡は，徳島平野の北西部を北東方向に流れ吉野川に合流する鮎喰川の西岸に位置する国府町矢野，西矢野を中心に所在する。鮎喰川水系の旧河川が形成した標高Ｔ.Ｐ.＋７ｍ前後の沖積微高地に立地する弥生時代前期～中・近世に至る複合遺跡であり，ことに弥生時代の集落遺跡としては，鮎喰川東岸の名東遺跡，庄・蔵本遺跡，南庄遺跡などと共に徳島県でも屈指の遺跡として周知されている。

当遺跡のすぐ西方には，三角縁神獣鏡が出土した宮谷古墳をはじめ，奥谷１・２号墳，矢野古墳など100基前後の古墳が存在すると思われる県下でも最大級の気延山古墳群が位置し，また奈良時代以降に至っては，周辺域に国分寺や国分尼寺，国府が造営されるなど，当地は古代阿波国の要衝として発展し，「国府」の名を今日町名としてとどめている。

２　調査に至る経緯

今回概要を報告する２件の調査は，いずれも国府変電所構内におけるケーブルダクト基礎工事に先立つもので，文化財保護法第57条２第１項の規定に基づき，四国電力（株）徳島支店電力部より平成４年７月14日付（92Ａ地点）および平成４年10月28日付（92Ｂ地点）で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。いずれも届出の時点の市教委と届出者側との協議において，届出面積の全面発掘を実施することで合意に達し，徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（委員長：岩崎正夫）が，文化財保護法第57条第１項の規定に基づき発掘調査を実施するに至った。

なお，これまでに実施された矢野遺跡の調査で呼称されている調査地区（地点）名との混乱が生じる恐れもあるため，今回の調査地点を92年度の調査という意味で，それぞれ92Ａ地点，92Ｂ地点と呼称したが，ここでは単にＡ地点，Ｂ地点として報告する。



第１図　調査地点位置図

3　A地点の調査概要

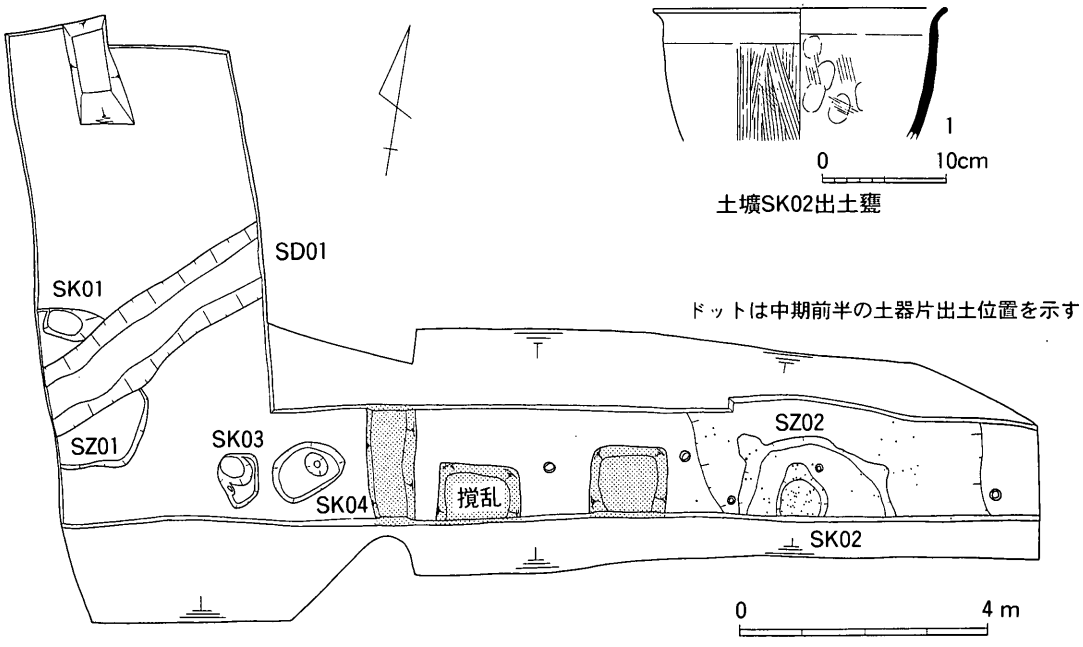
A地点の現地表面の標高は，T.P.＋約7.3mを測る。層序は，変電所造設に伴う盛土約80cmの下に層厚約5cmの旧水田土壌が存在し，暗黄褐色砂質シルト層（遺物包含層）約15cmを挟んで遺構面をなす黄褐色シルト層に達する。本層は厚さ約30cmで，その下は砂礫層となる。遺構面での標高はT.P.＋6.4m前後を測る。

当地点において検出された遺構は，溝1，土壙4，ピット5と性格不詳の遺構（住居跡？）2である（第2図）。以下主な遺構と出土遺物について概略を述べる。

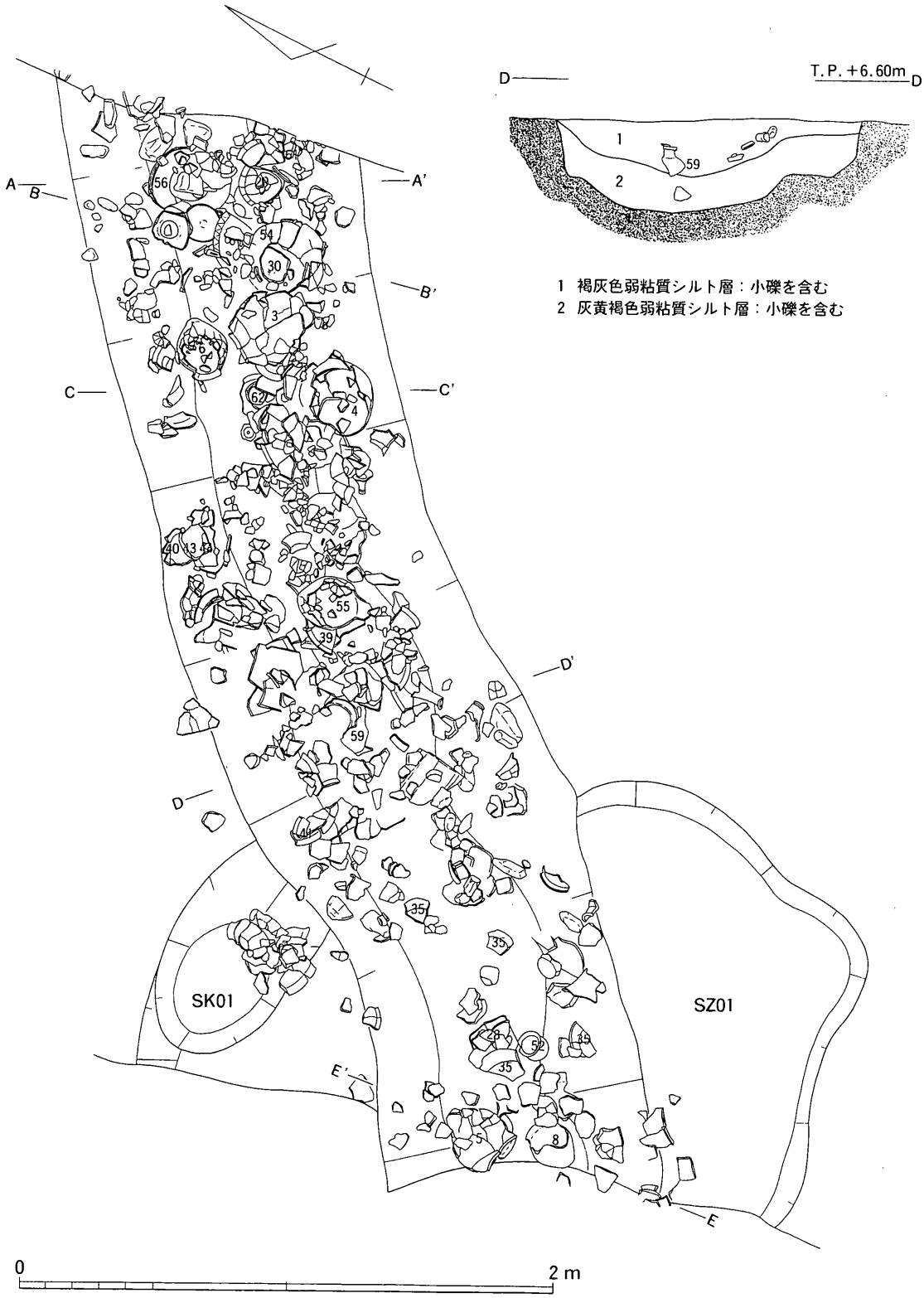
溝SD01（第3，4図，図版1～4）

南西－北東方向に走る幅1m前後，深さ30～35cmの断面がゆるやかな船底状を呈する溝で，長さ約4mにわたって検出した。溝の底部は一部が砂礫層に及んでいる。埋土は2層に大別できるが，溝底部には鉄分（マンガン）の薄い沈着層が認められる。

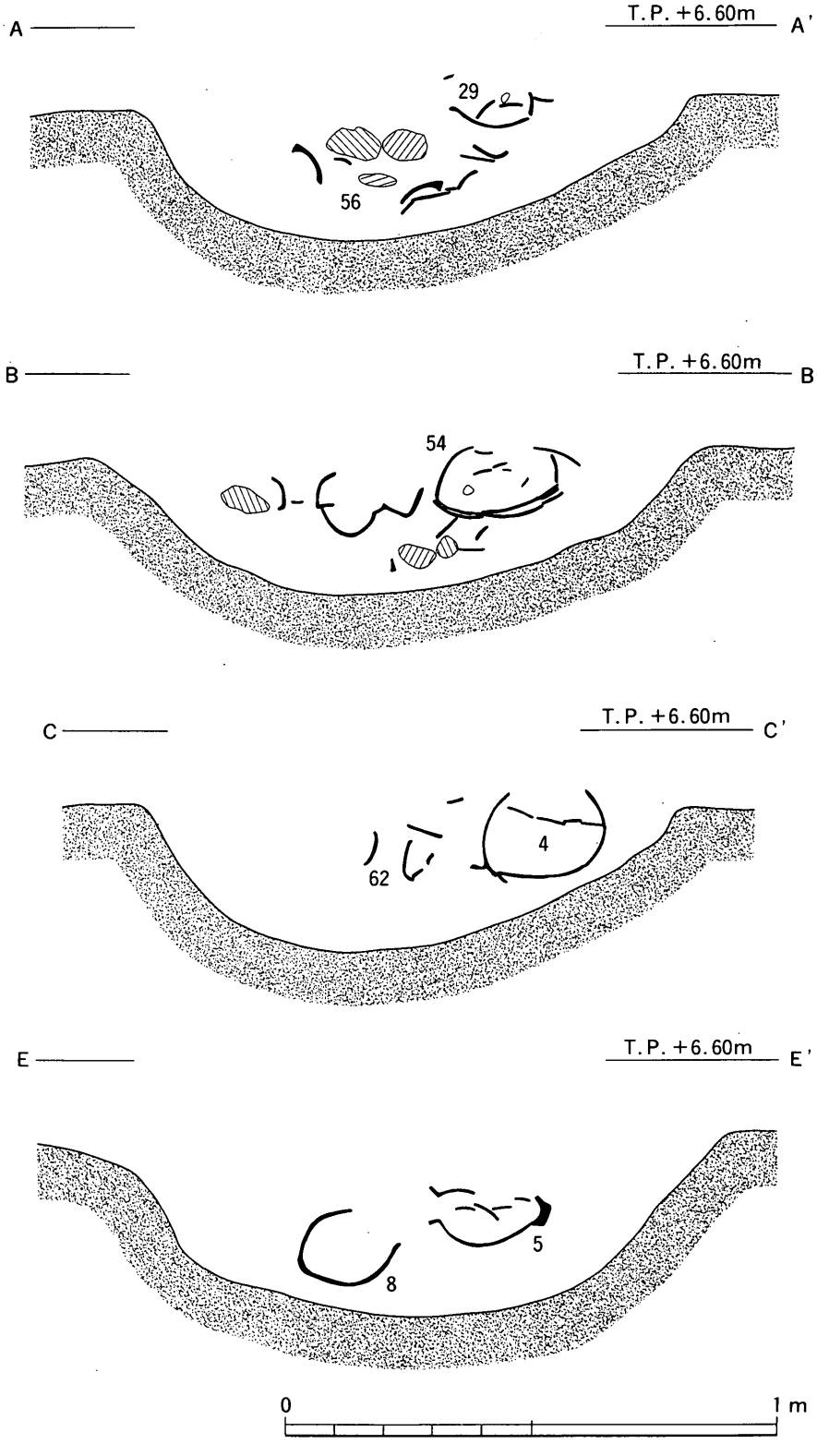
遺物は2層にわたって，甕（3～28），底部穿孔の土器（29～34），高坏（35～38），鉢（39～53），壺（54～62）が出土している（第6～10図）。甕は長胴のものが主流を占めるが，底面が広くほぼ球形の体部を持つもの(6)も存在する。甕(6)は体部に叩きの痕跡が残る。口縁部はいずれも「く」字状に外反させるが，端部を摘み上げるものあるいは上下に拡張されるもの（3～6，9～21）とそうでないもの（7，8，22～28）が存在する。



第2図　A地点検出遺構図

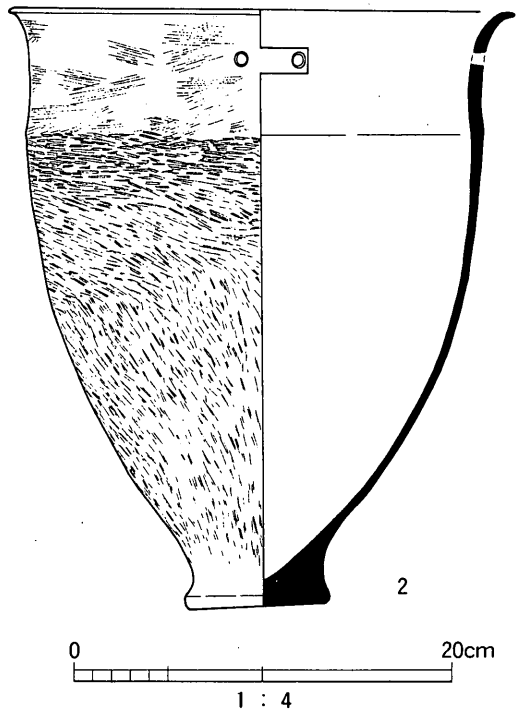


第3図　溝SD01遺物出土状況平面図，土層図



第４図　溝SD01横断面図

鉢は大小多様な形態のものが認められる。鉢(39～45)は体部が内彎して立ち上がり，口縁部が大きく外反する。鉢(52，53)は丸底で，鉢(53)は口縁部がほぼ垂直に長く立ち上がる。壺には広口壺(55，56，60～62)のほかに，無頸壺(57)や二重口縁壺(54)がある。壺(54)はやや偏平な球形の体部に僅かに平底をとどめ，口縁部外周に鋸歯文を巡らす。壺(56)は口縁端面を2条の凹線と6対の円形浮文で加飾する。壺(62)は頸部外面に線刻が認められる(図版8－62)。



第5図　土壙SK01出土紀伊型甕

不明遺構SZ01（図版4）

長径約2.7m，深さ約10cmの歪な平面形を呈する遺構で，溝SD01によって切られる。紀伊型の甕の破片を含む若干の土器片が出土している。住居跡としては特定できず性格が不詳であるため，「不明遺構」とした。

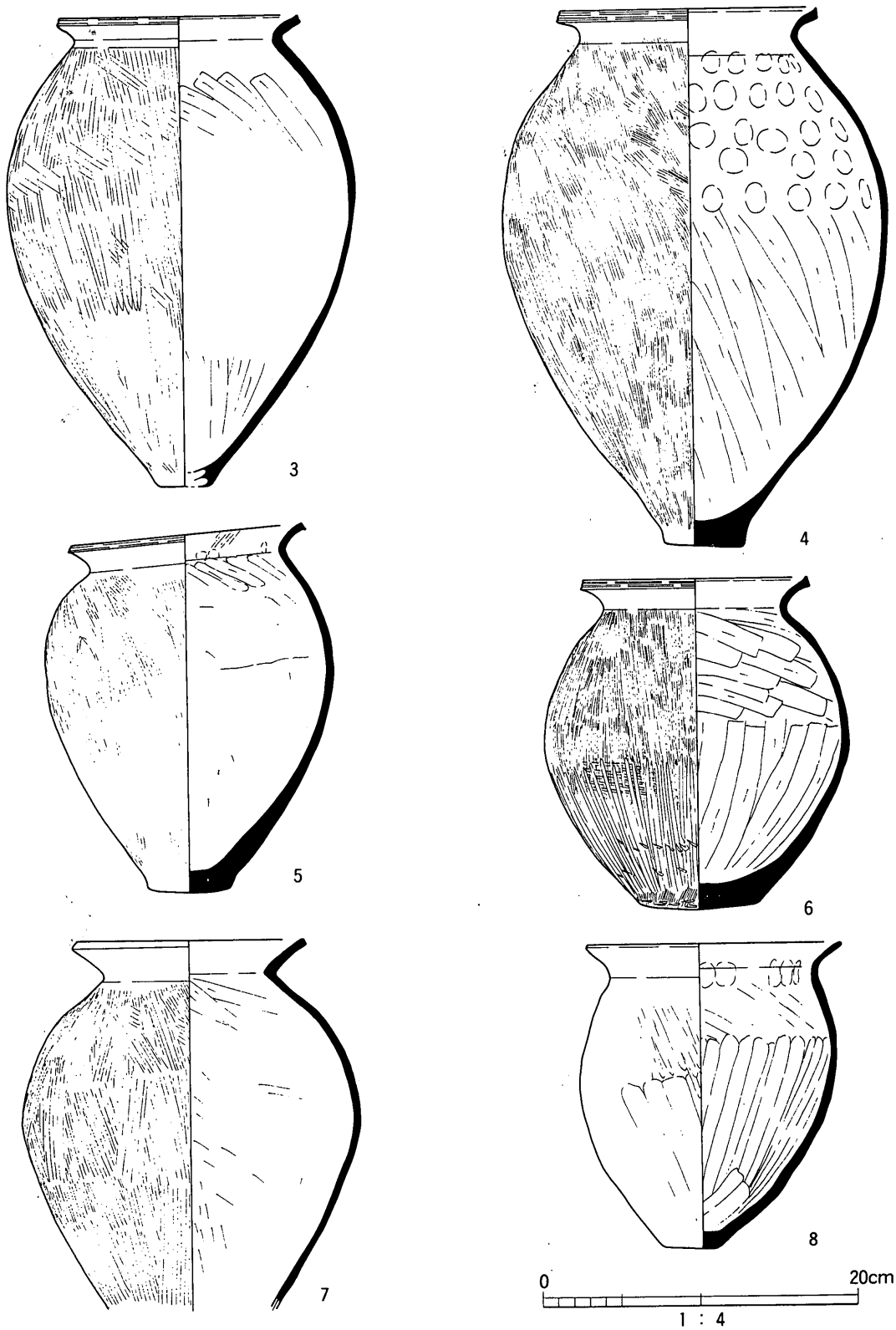
土壙SK01（図版4）

不明遺構SZ01の壁部で検出された土壙で，長径約80cm，短径約50cm，深さ約25cmを測る。埋土上面において紀伊型の甕が出土した（第5図）。甕(2)は器高31cm，口径26.8cmを測り，胎土は赤みがかった暗茶褐色を呈する。肩部は横方向，胴部は左上がりのヘラケズリを施し，肩部に稜を持つ。内面はナデ調整による。口縁下に一対の穿孔を施している。

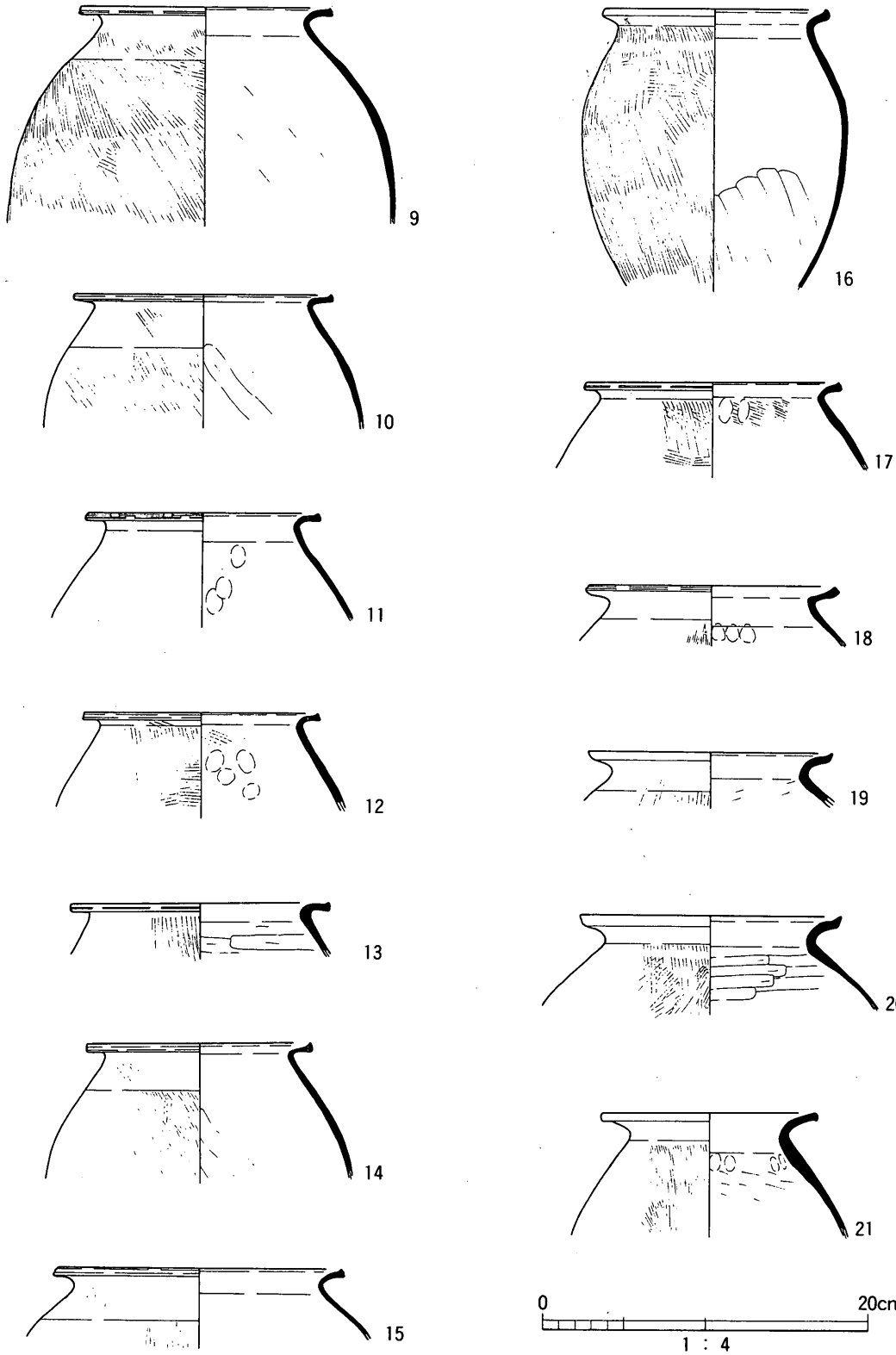
不明遺構SZ02，土壙SK02

長径約2.5m，深さ10cm前後を測り，SZ01同様歪な平面形を呈する。ほぼ中央部には径約80cm，深さ約20cmの土壙SK02が存在し，埋土には炭化物が認められた。このSK02を中心に，中期前半に比定される土器片が集中的に出土した（第2図：図中ドットが出土位置）。甕(1)は如意形の口縁を持つ。

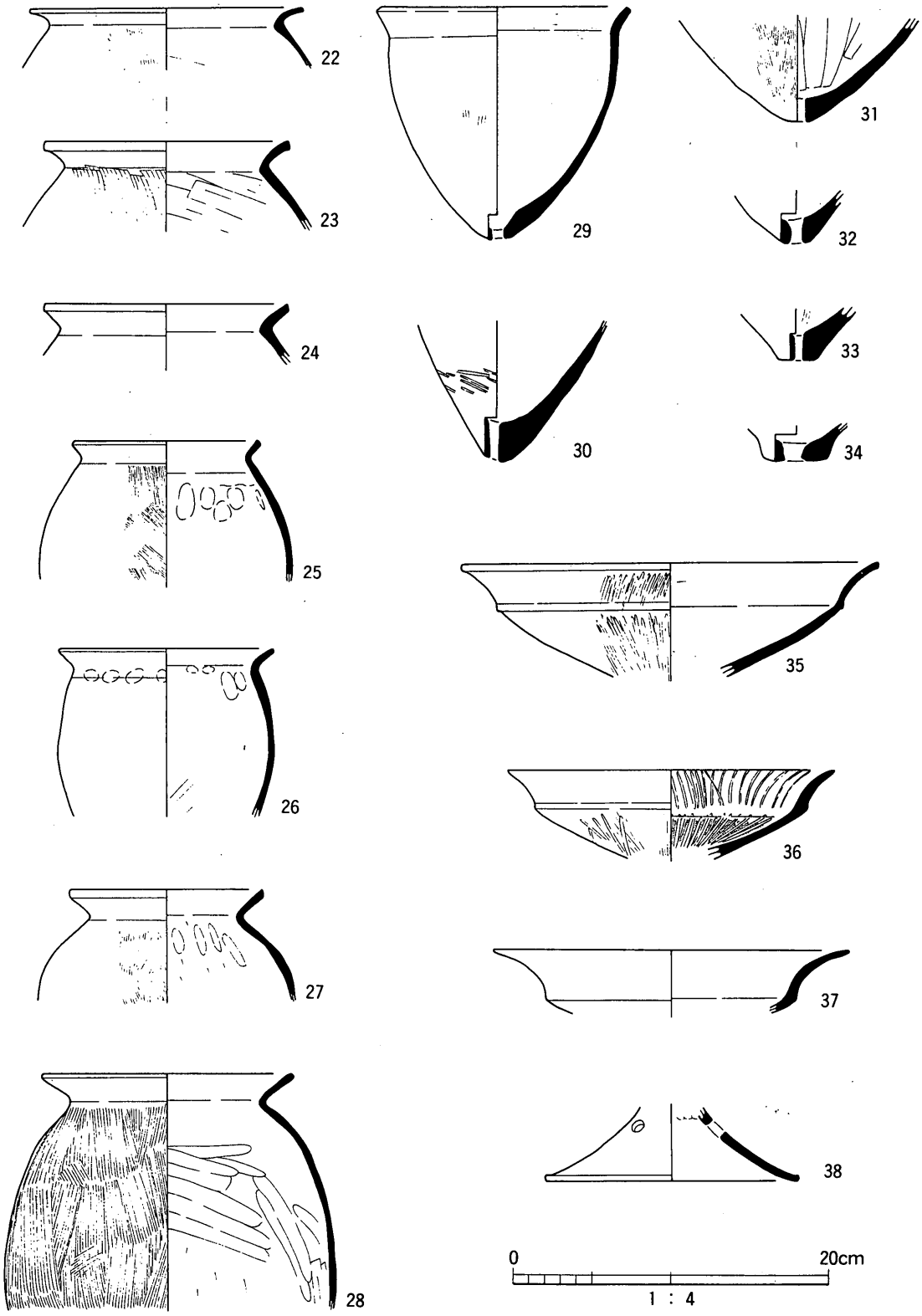
なお，SZ02を包括するかのように東西約4.5mの範囲にわたって5cm程度の浅い窪みが認められた。中期前半の土器片の分布はこの範囲内に広がりを見せ，頸部に多状の櫛描直線文帯を施す細頸壺の破片なども出土している。



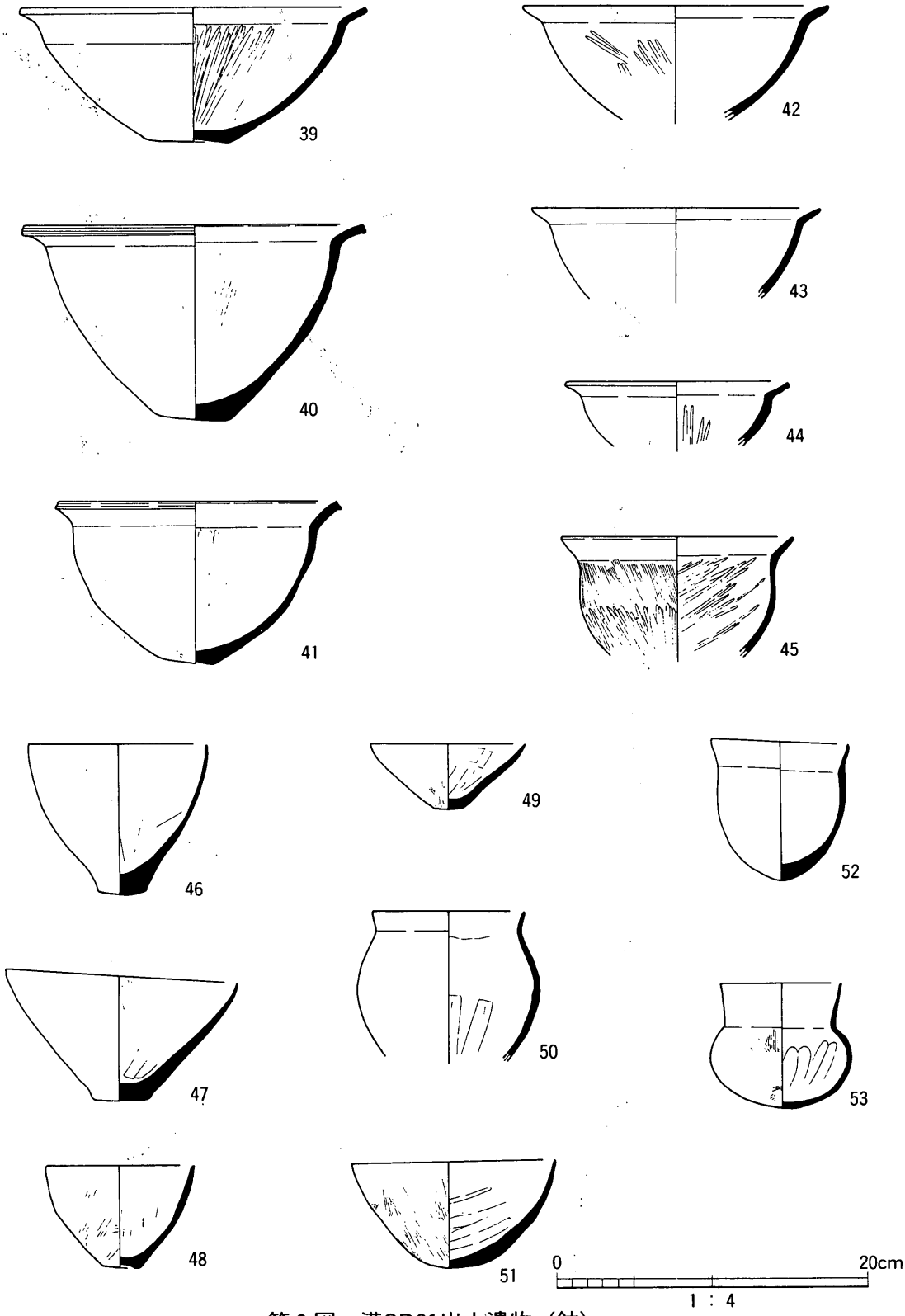
第６図　溝SD01出土遺物（甕）



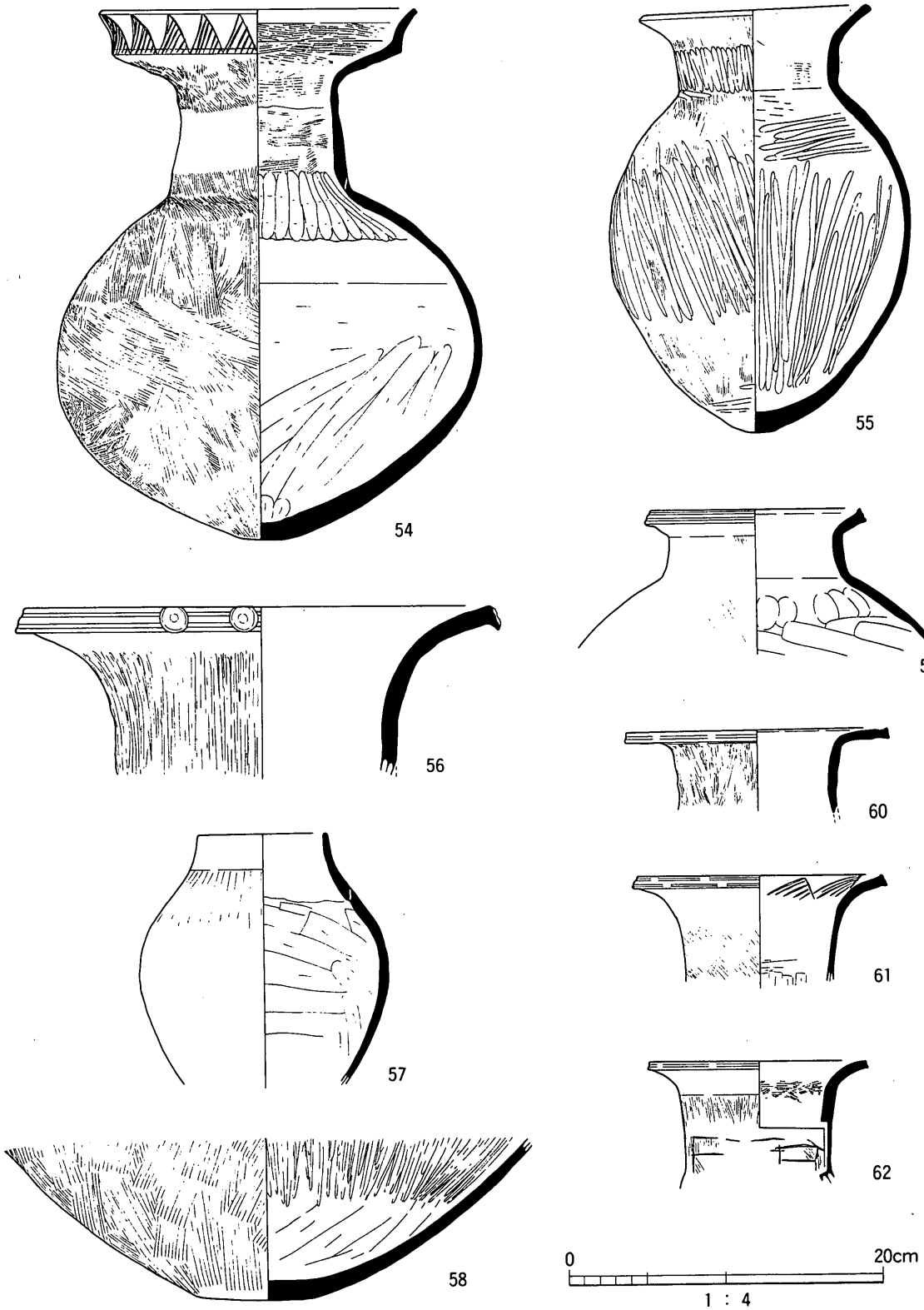
第７図　溝SD01出土遺物（甕）



第８図　溝SD01出土遺物（甕，底部穿孔土器，高坏）



第９図　溝SD01出土遺物（鉢）



第10図　溝SD01出土遺物（壺）

4　B地点の調査概要

B地点はA地点の北西約20mに位置する。層序は，旧水田土壌がA地点に比べ15cm前後厚く，その分，遺物包含層が削平され薄いことを除けば，基本的にはA地点と同一の層序をなしている。遺構検出面での標高はT.P.＋6.4～6.5mを測る。

当地点では，竪穴住居跡4，竪穴住居跡の一部と思われるもの1，土壙1，住居外ピット27を検出した（第11図）。

次に，主な遺構と出土遺物について概要を述べる。

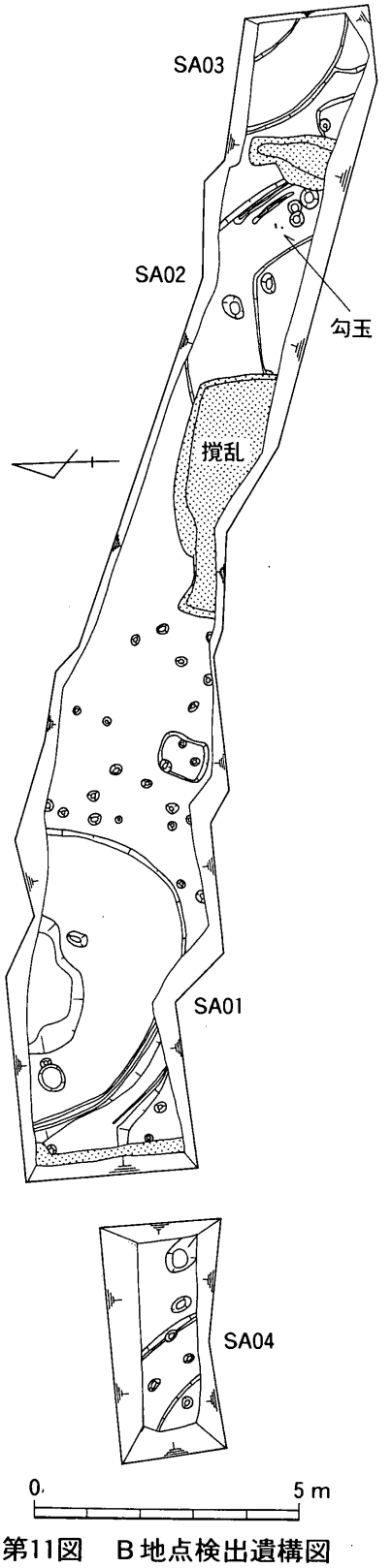
竪穴住居跡SA01（第13図，図版9～11）

調査区内において全体の半分を検出した。推定径約6.2mの不整円形住居跡で，中心部で深さ35cmを測る。

西側に高床状の張出部を持つ状況が認められ，ここから南側にかけて壁面沿いに，幅30～40cmの高床部として延びている。高床面壁沿いと高床下部沿いには周溝をとどめる。高床部は南側で途切れるが，住居跡埋土6層（第13図）は高床部の残存とも考えられ，住居内を巡っていた可能性が考えられる。

床面においては柱穴2，炉跡を検出している。柱穴は，直径・深さとも50cmのものと長径40cm，深さ60cmのもので，主柱をなすものと考えられる。炉跡は東西2.6m，深さ15cm前後の浅い掘り窪みを有し，中心部に焼土と炭化物の散在が認められた。

本住居跡からは，他の住居跡を圧倒的に凌駕する量の遺物が出土している。遺物は甕（第14～16図，図版17，18），鉢（第17，18図，図版18～22），高坏（第19図，図版23），壺（第20図，図版24）などの各種土器が主体をなすが，鉄製品の小破片も数点出土しており，また頁岩製の打製石庖丁（図版11）や藍閃石片岩製の



第11図　B地点検出遺構図

柱状片刃石斧（第20図－150）なども混在している。土器の出土は埋土各層にわたるが，特に３ａ・３ｂ層下部および４ａ層，５層（炉跡）に集中し，その出土状況から，数回にわたる廃棄が行われたことが想定される。

甕は，口縁部を「く」字状に大きく外反させる長胴のものが大多数を占め，口縁端部を大きく摘み上げるもの（70～74），上下に拡張あるいは肥厚させるもの（83～86），矩形あるいは丸くおさめるもの（87，90～101）などがある。甕（70）は体部にタタキの痕跡を微かにとどめるが，他の甕には叩き痕はほとんど認められない。甕の多くは外面がハケ調整，内面は下半部が縦方向，上半部が横方向のヘラケズリにより整形がなされている。甕（89）は暗茶褐色の肩の張る体部を持つ讃岐産の甕で，外面下半は縦方向のヘラミガキ，上半は縦方向のハケ，内面下半は斜め方向のヘラミガキ，上半は指押さえが施されている。

鉢は大型から小型まで様々な形態のものが存在し，甕に劣らぬ個体数の多さが目を引く。鉢(102)は大型のもので体部外面は叩きが施される。口縁部は「叩き出し手法」により作出され大きく外反する。内面は縦方向にハケ調整の後，ヘラミガキを行い，底部は横方向のヘラミガキを行っている。中～小型の鉢では，体部が内彎気味あるいは直線気味に先窄まりに立ち上がり，端部をそのまま丸くおさめるものが主流であり(108～122)，内面はヘラケズリかハケ調整のものが多い。鉢(106)はシャープな稜線をもって口縁部が外反気味に立ち上がる丸底の鉢で，口縁部内面に凹線を巡らす。鉢(109，110)は上げ底状の底部をもつ。また形態にバリエーションを有する小型の丸底鉢[1](壺)の出土も目立つ(125～131)。

高坏は椀形の坏部を持つもの（133～136）と，皿形の坏部から口縁部が大きく外反するもの（138～140）などに大別できる。高坏（133，134）は，短い脚部から脚台が内彎気味に低く大きく広がり，その径は坏部の径を大きく上回る。いずれも坏部は，内外面とも縦方向の精緻なヘラミガキが行われている。

壺は広口壺が大多数を占める。壺（141）は体部の張りが小さく外面は縦方向のヘラミガキ，内面は体部が横方向のヘラケズリ，頸部が横方向のヘラミガキによる。壺（144）は頸部が太く口縁部の開きが小さいものである。壺（148）は口縁端面に円形の刺突文を施す。壺（149）は体部と頸部の境に突帯を貼付け，刻目を施す。突帯を貼付けた壺は本例１点のみである。

竪穴住居跡SA02（第13図，図版12～14）

推定径約6.2m，深さ約30cmを測る方円形の住居跡である。壁面沿いに幅1.2～1.4m，高さ10cm前後の高床部を持ち，高床面の東壁沿いに幅10cm前後の２条の周溝をとどめる。

方円形を呈する床面コーナー部で長径38cm，深さ46cmの柱穴が検出され，四隅に主柱を配する住居と考えられる。高床面において炭化材の断片が検出されている（図版14）。

出土土器は小破片が僅かであるが，特記すべき遺物としては，高床面ほぼ直上から出土の蛇紋岩製の勾玉３個がある（第12図，図版24－63～65）。いずれも黒色細粒の班紋を含み淡緑灰色を呈する，いわゆる「半玦状」の勾玉で，２方向から穿孔がなされている。

竪穴住居跡SA03（第13図，図版12，14）

推定径約4.2mのやや小規模な円形住居跡で，深さ35cm前後をとどめる。壁面沿いに幅約１m，高さ15cm前後の高床部を持ち，高床外周壁面沿いに幅５～10cm，深さ５cm前後の周溝を巡らす。

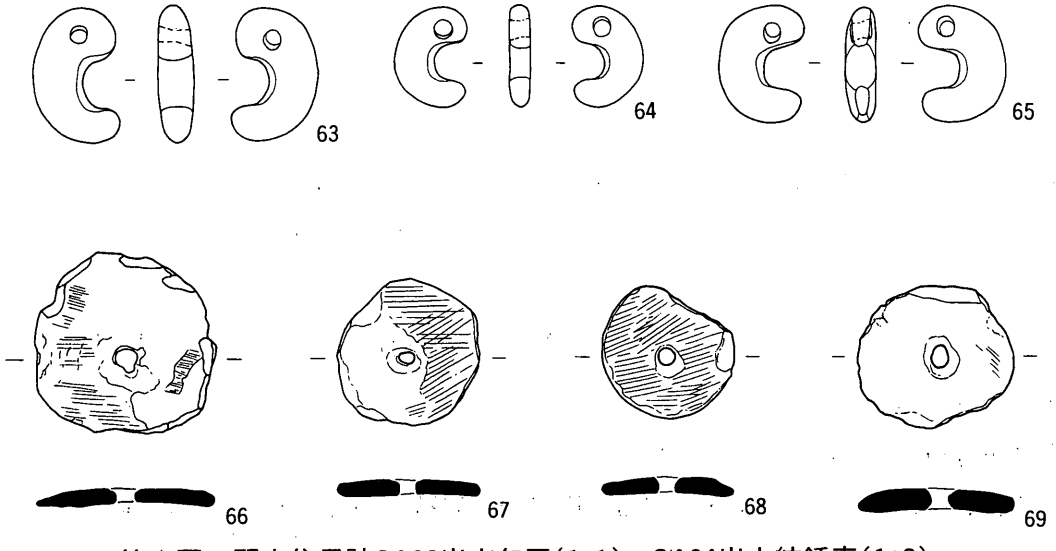
出土遺物は，小型の鉢１点以外は僅かな土器の小破片に限定される。

なお，SA02とSA03の間に，方形住居跡もしくは住居の張出部と思われるものの一部が検出されたが不詳である。南側には高床部と同レベルで張出部を付設している。

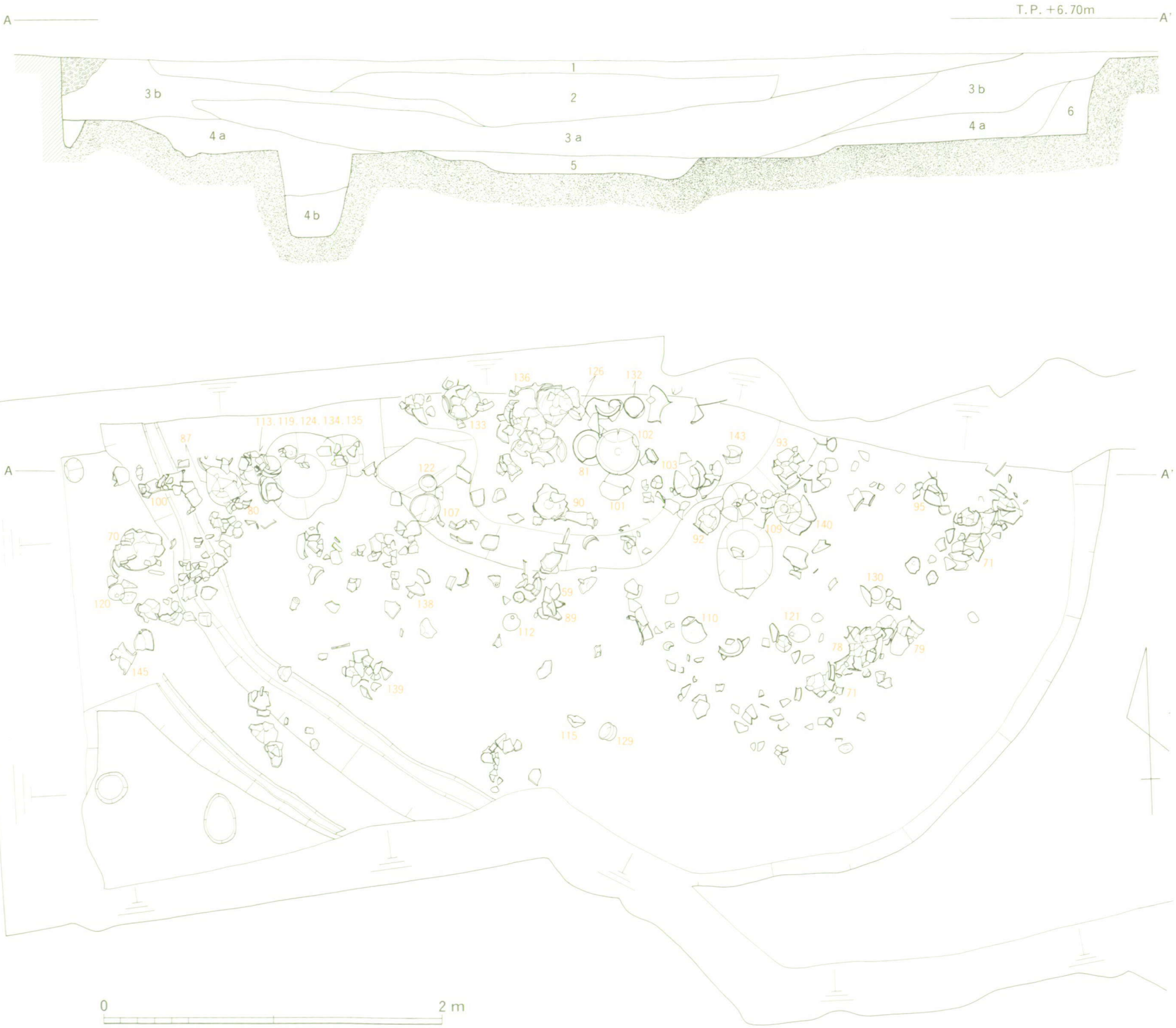
竪穴住居跡SA04（第13図，図版15，16）

調査区西端でごく一部が検出された。推定径約７mを測る円形住居跡で，深さ40cm前後をとどめる。壁面沿いに幅約１m，高さ13cm前後の高床部を持ち，高床面外周壁面沿いに幅15cm，深さ５cm前後の周溝を巡らす。

遺物は，床部埋土中より土器片を利用した紡錘車５（うち４点は第12図と図版24－66～69）と高床部より甕が出土している。

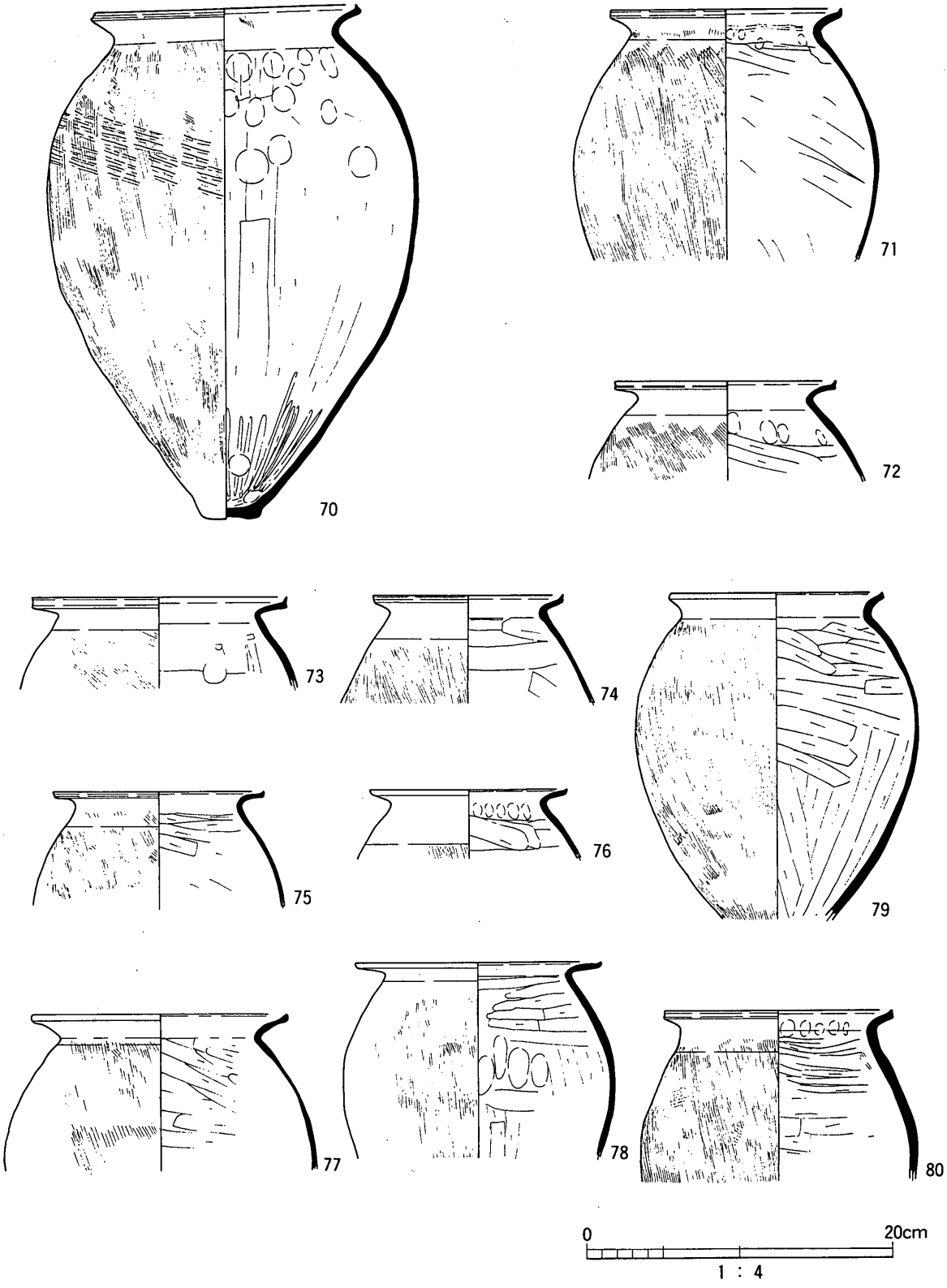


第12図　竪穴住居跡SA02出土勾玉(1:1)，SA04出土紡錘車(1:2)

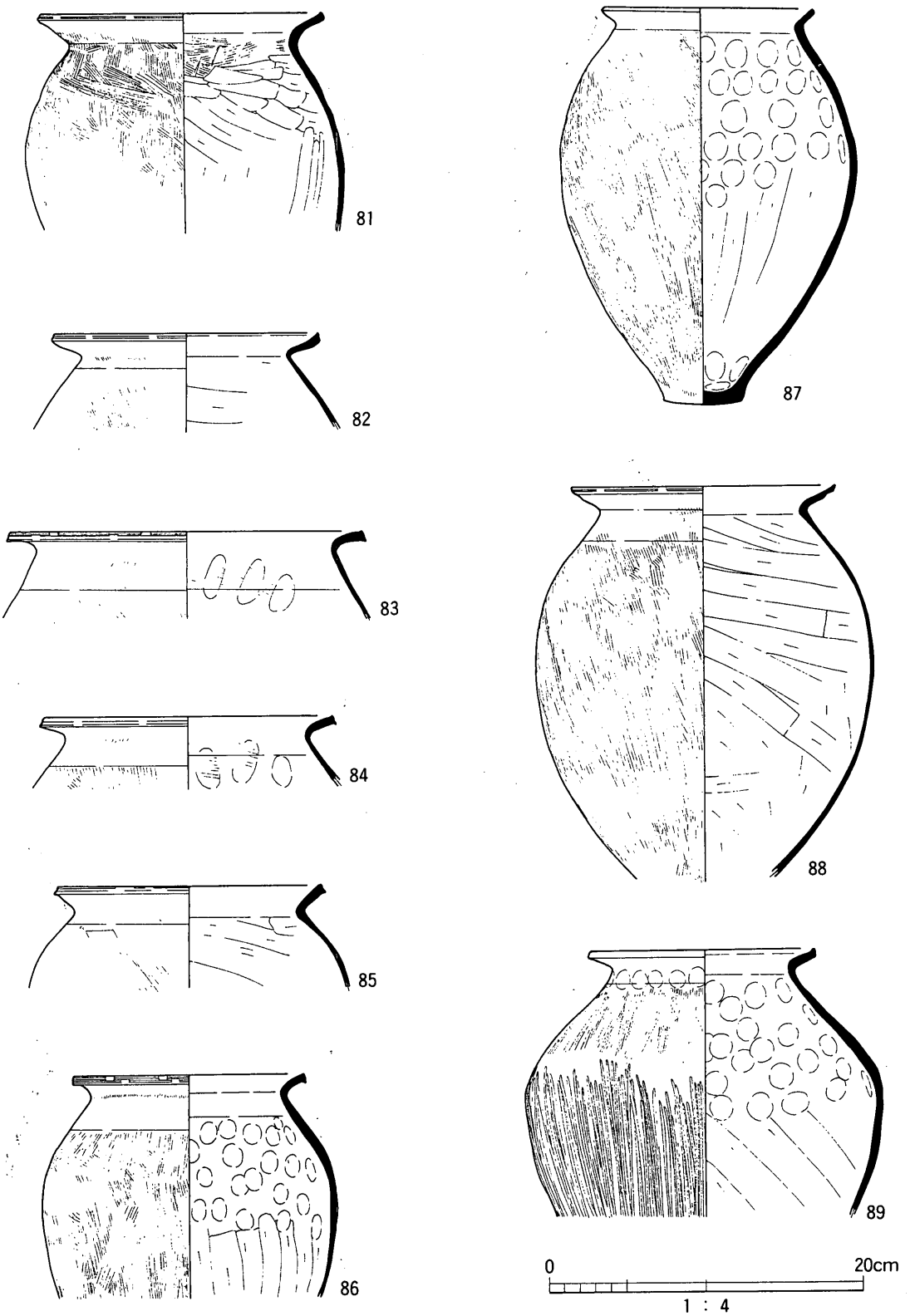


1　暗茶褐色弱粘質シルト層
2　黒色弱粘質砂礫層
3a，3b　小礫混在暗褐色弱粘質シルト層
4a 小礫混在暗黄褐色粘質シルト層
4b 小礫混在暗褐色粘質シルト層
5　小礫混在暗褐色粘質シルト層：炭化物多量に含む
6　小礫混在暗黄褐色粘質シルト層

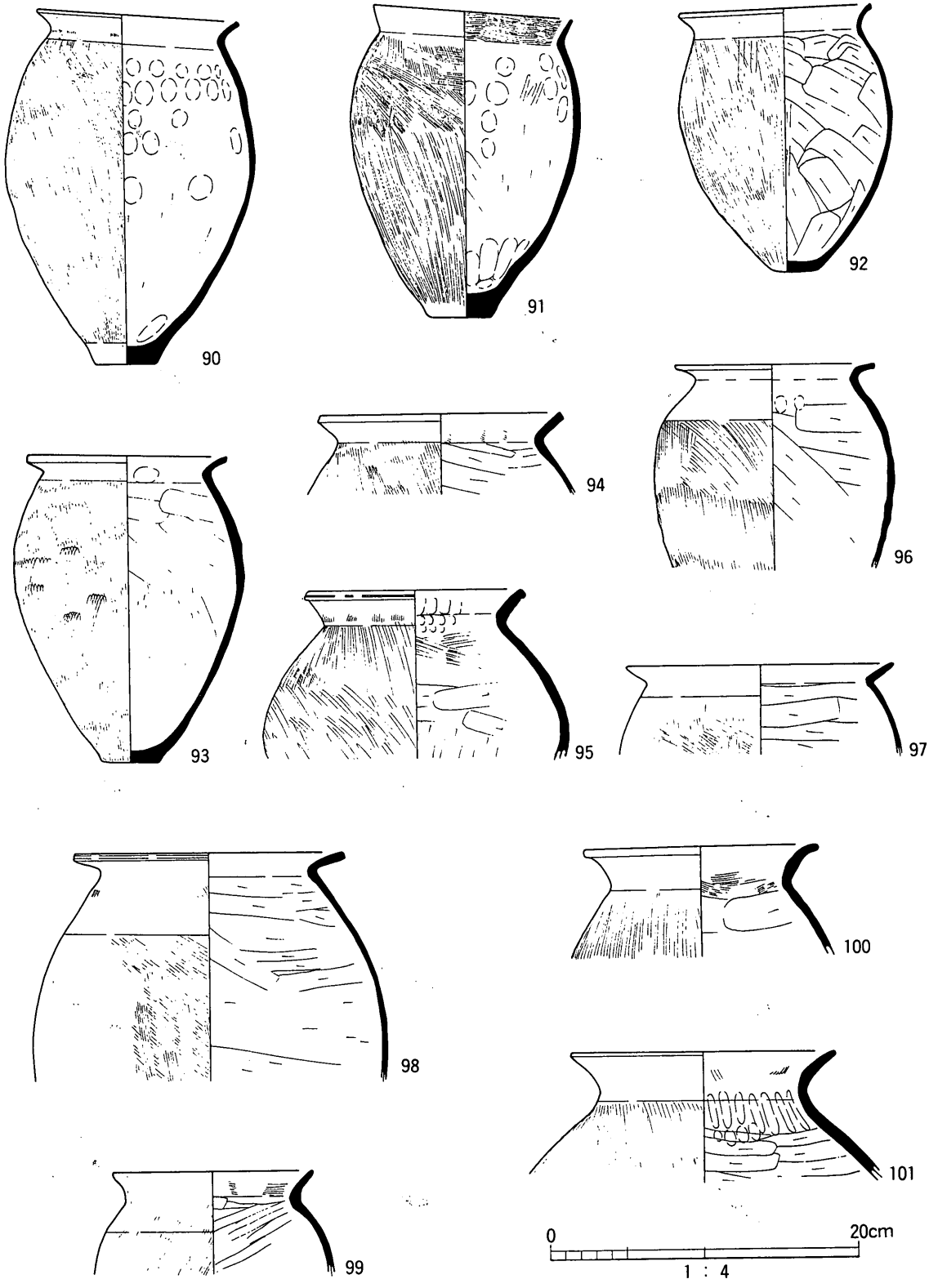
第13図　竪穴住居跡SA01遺物出土状況平面図，土層図



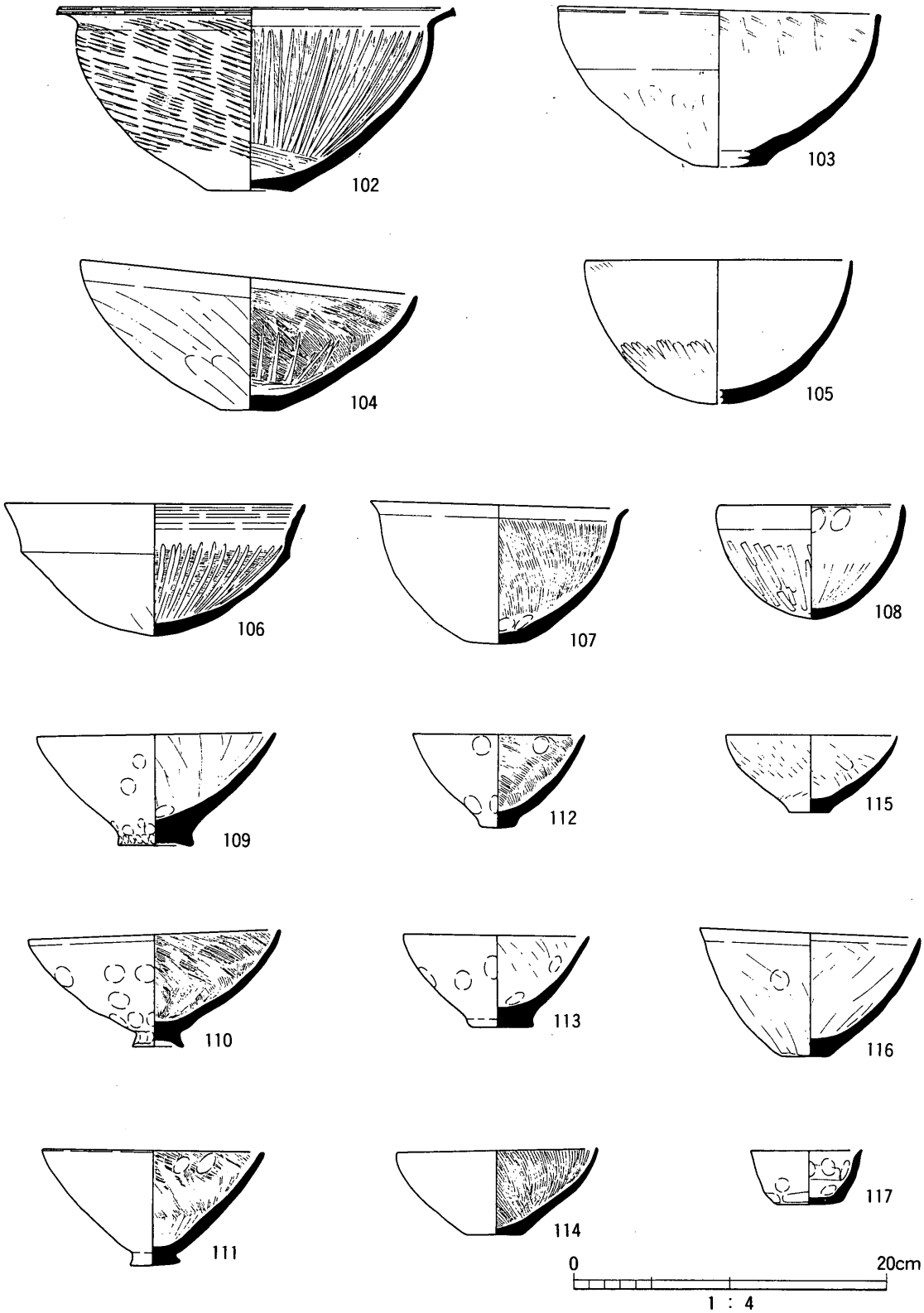
第14図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）



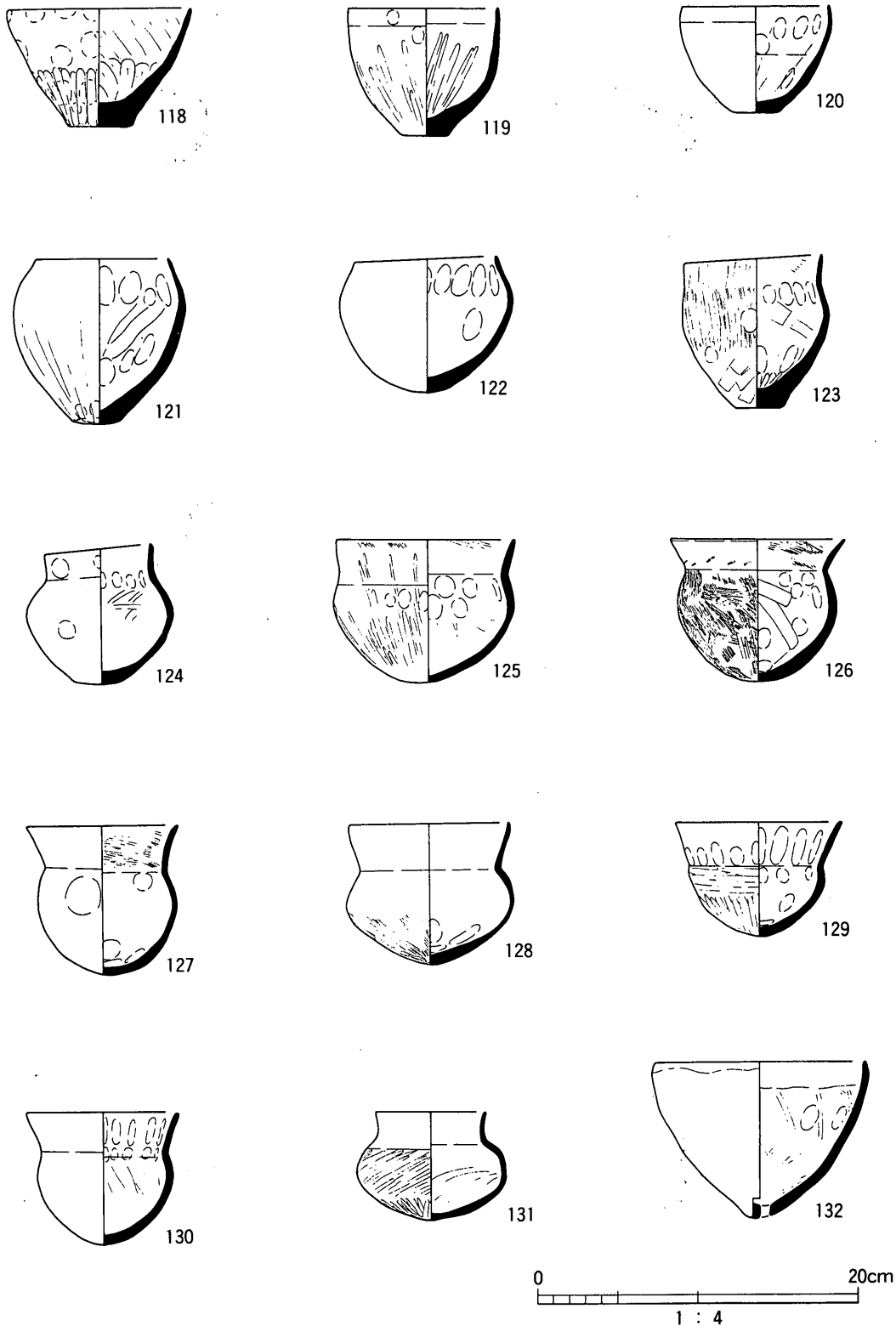
第15図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）



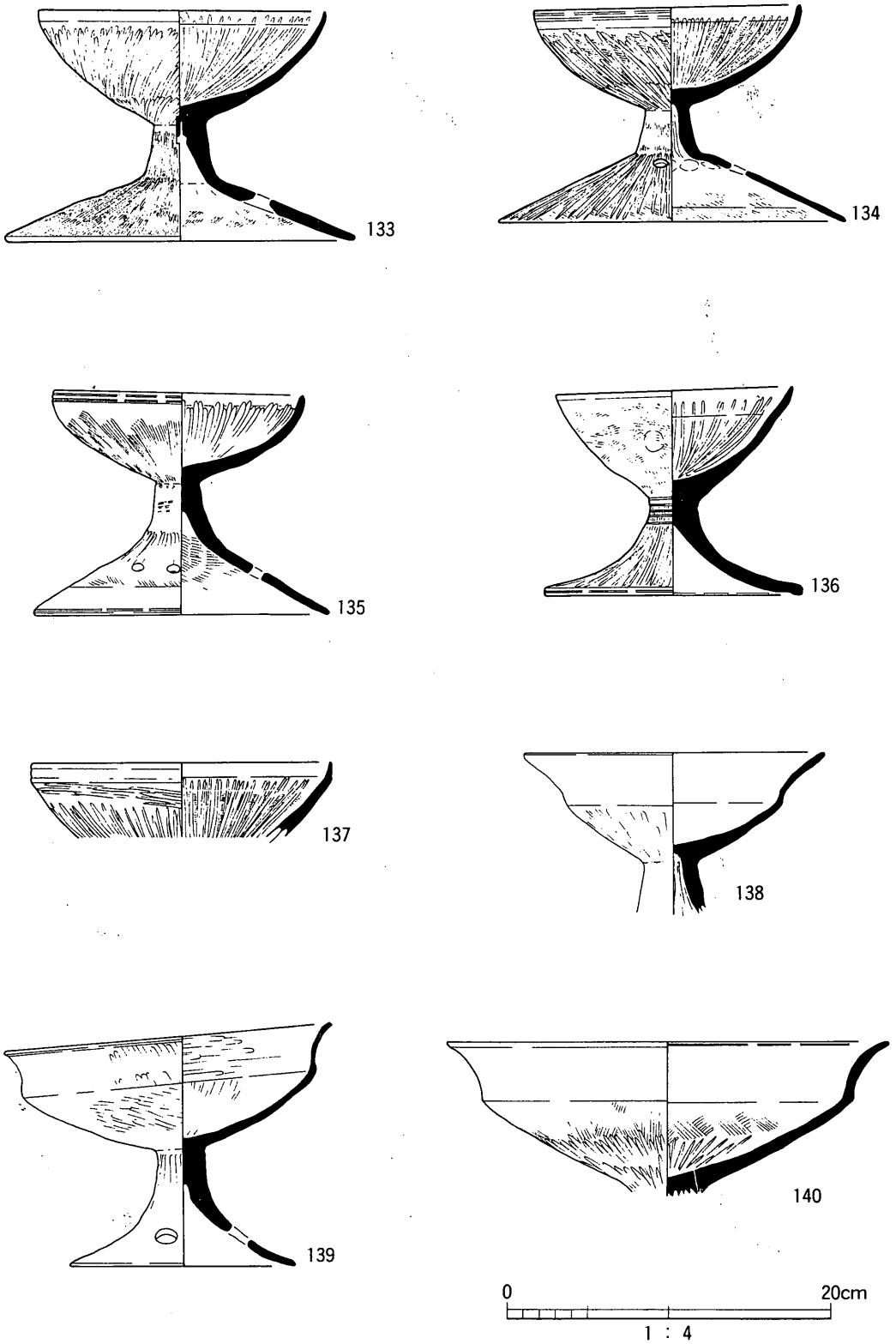
第16図　竪穴住居跡SA01出土遺物（甕）



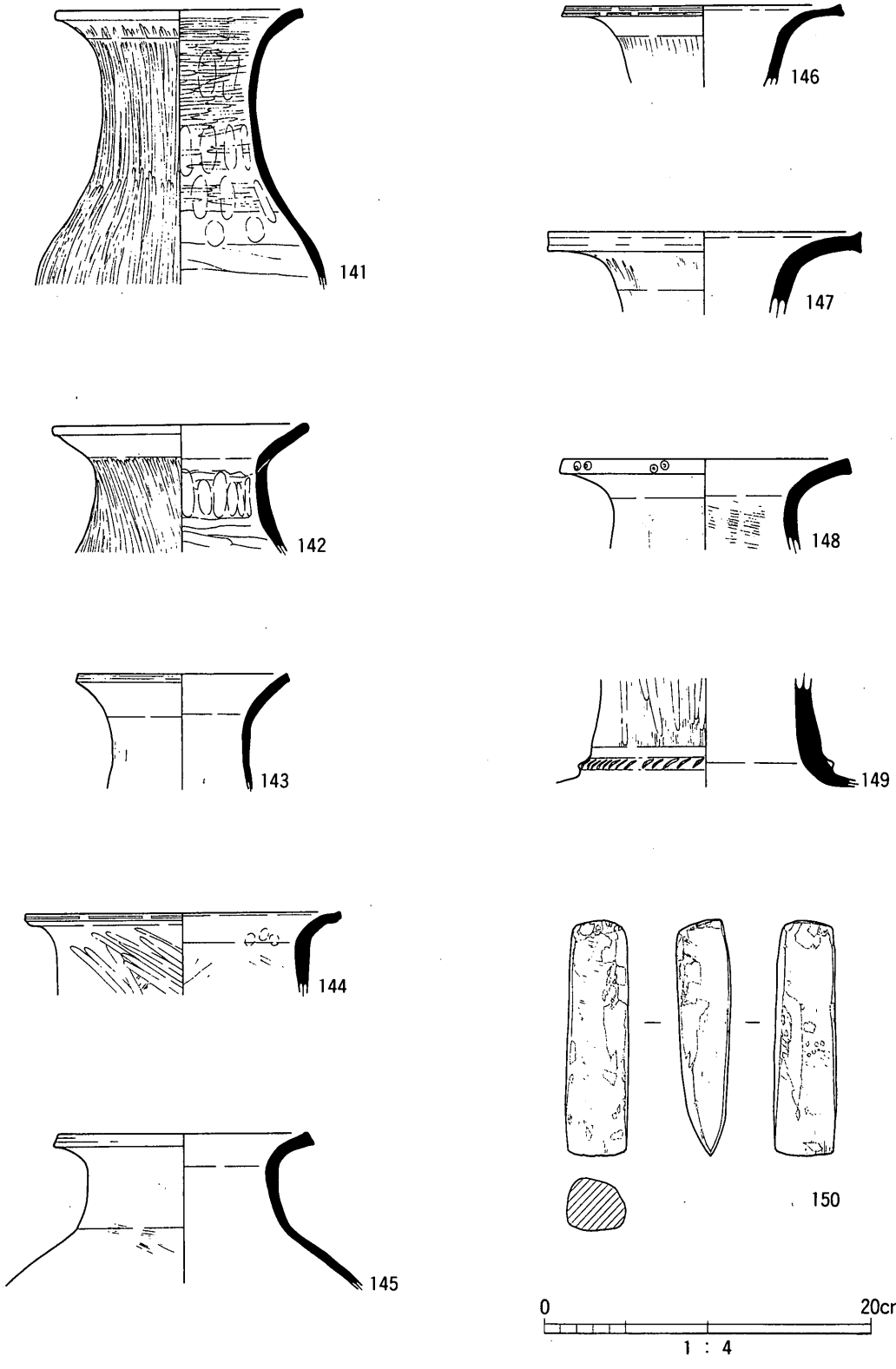
第17図　竪穴住居SA01出土遺物（鉢）



第18図　竪穴住居SA01出土遺物（鉢，底部穿孔土器）



第19図　竪穴住居SA01出土遺物（高坏）



第20図　竪穴住居SA01出土遺物（壺，柱状片刃石斧）

5 小 結

以下今回の調査の主要な成果についてごく簡単にまとめておく。

A地点で検出された溝SD01は，昭和59年(1984)に市教委が実施した調査(E地点)で検出された溝SD01と一連のものと考えられる。この溝は出土土器の様相から，吉野川下流域における弥生時代終末期頃の土器編年でいう黒谷川I式新相からII式古相への移行段階の年代が与えられよう。

不明遺構としたSZ01，02はいずれも弥生時代中期前半（畿内第II様式）の遺構であり，住居跡の可能性も有する。現在までのところ矢野遺跡におけるII様式以前の住居跡の検出事例は報告されていないが，紀伊型甕を供伴するII様式の土壙一括資料の存在[2]や，頸部に段を有するI様式古相の壺の存在[3]などが報告されており，近い将来明確な住居跡の検出を以て，該期の集落の様相の究明が進展することが期待される。

B地点で検出された4基の竪穴住居跡については，若干の年代幅を有する可能性もあるが，いずれもA地点溝SD01とほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。

蛇紋岩製勾玉の出土は矢野遺跡では初見である[4]。勾玉製作遺跡である三好郡稲持遺跡に見られる石材（タイプI）を用いており[5]，弥生終末期の矢野遺跡が，水銀朱の生産・精製遺跡であり，蛇紋岩製勾玉を出土している阿南市若杉山遺跡や板野郡黒谷川郡頭遺跡とともに，吉野川上流域に至る広範囲な流通関係の中にあったことが窺える。

註

(1) いわゆる「東阿波型土器」群の構成器種としての小型丸底鉢ではない。

(2) 昭和55年(1980)の市教委の調査（C地区）で紀伊型甕が出土している。一山　典ほか『弥生時代の徳島市－埋蔵文化財資料展－』1983年，徳島市教育委員会。

(3) 小林勝美「矢野国府変電所緊急発掘調査概要　第三次調査」『徳島県文化財調査概報　1976年度』1978年，徳島県教育委員会。

(4) 徳島県埋蔵文化財センターの本年度の調査において勾玉製作工房跡，勾玉未製品（蛇紋岩），砥石などが出土している。またこのほかに石杵，朱の付着した土器の出土も報告されている。『一般国道192号徳島南環状線建設に伴う矢野遺跡発掘調査現地説明会資料』1994年，財団法人徳島県埋蔵文化財センターほか。

(5) 徳島県埋蔵文化財センターの菅原康夫氏，湯浅利彦氏の御好意により実見，両氏より御教示をいただいた。菅原康夫「吉野川上流の勾玉製作－徳島県稲持遺跡の攻玉形態について－」『同志社大学考古学シリーズIV』1988年。

II　名東遺跡発掘調査概要

－住宅開発工事に伴う発掘調査－

II　名東遺跡発掘調査概要

－住宅開発工事に伴う発掘調査－

調査場所　徳島市名東町２丁目112番地

調査期間　平成４年９月12日～12月28日

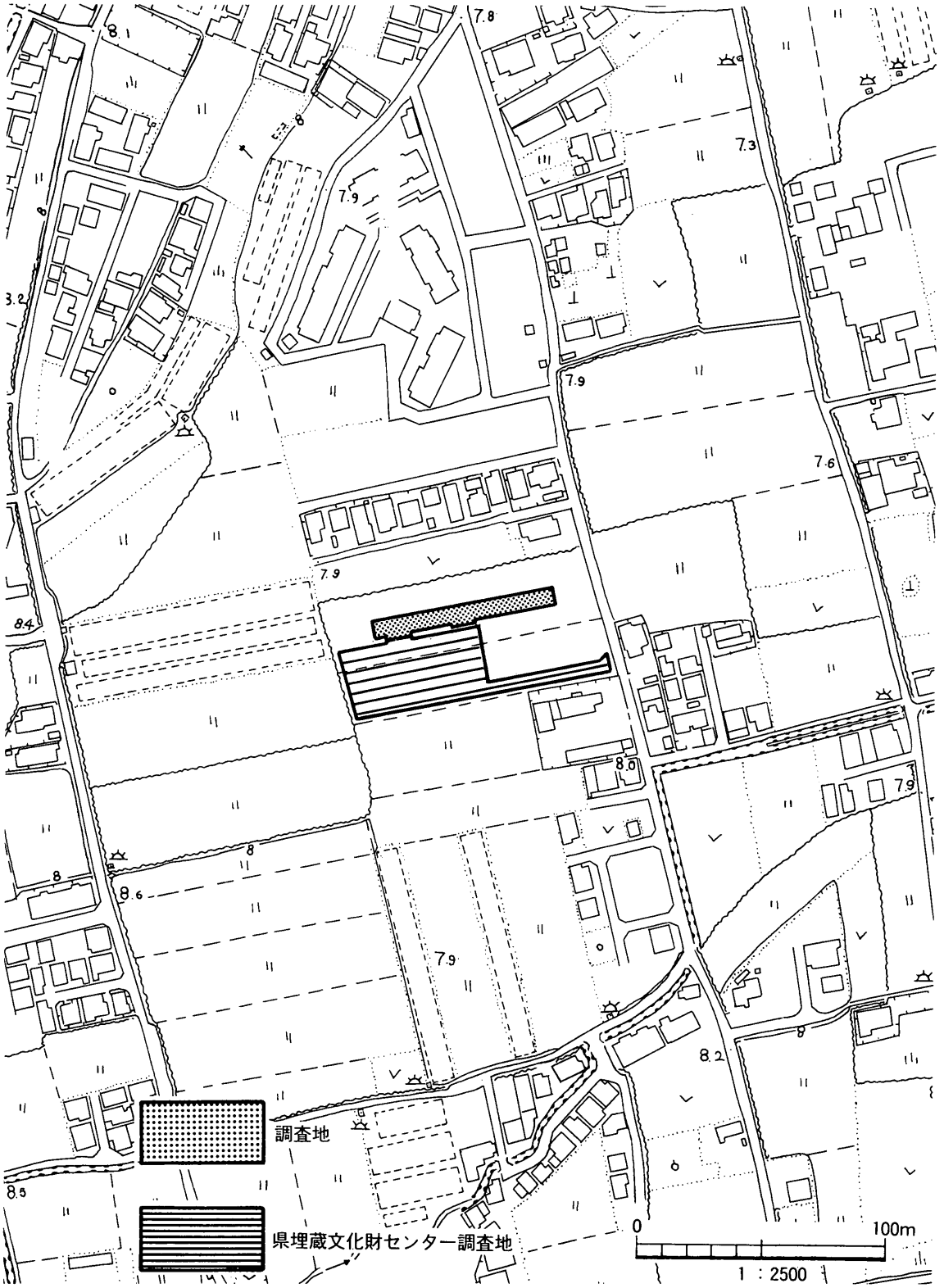
調査面積　525㎡

１　調査に至る経緯と経過（第１図）

名東遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した沖積微高地上に位置する縄文時代晩期から江戸時代に至る集落遺跡である。名東遺跡での発掘調査は散在的に実施されており，遺跡の解明にはまだ十分な資料は蓄積されていない。ただ名東遺跡では昭和62年に原位置で銅鐸が発見され，この事実が遺跡解明に向けての大きな契機となっていることは確実である。特に弥生時代の文化復原には，銅鐸出土地に視点を置くことにより，周辺地域で実施される調査は必然的に大きな意味を持つものと理解されよう。近年の調査では，方形周溝墓の新たな検出例や銅鐸出土地に近接した位置での住居跡群の発見があり[(1)]，墓域の再考や住居空間の領域など集落構造の復原上貴重な資料が蓄積されつつある。

調査地は弥生時代の住居跡が確認されている市営名東１丁目団地[(2)]に近隣し，西方には旧鮎喰川の河川部が位置することから遺跡の縁辺部での遺構の存在が当初より想定された。開発申請者との立会において事前の試掘調査を実施した結果，遺跡の存在が明確化し，本調査の必要性について申請者の合意を得るに至った。

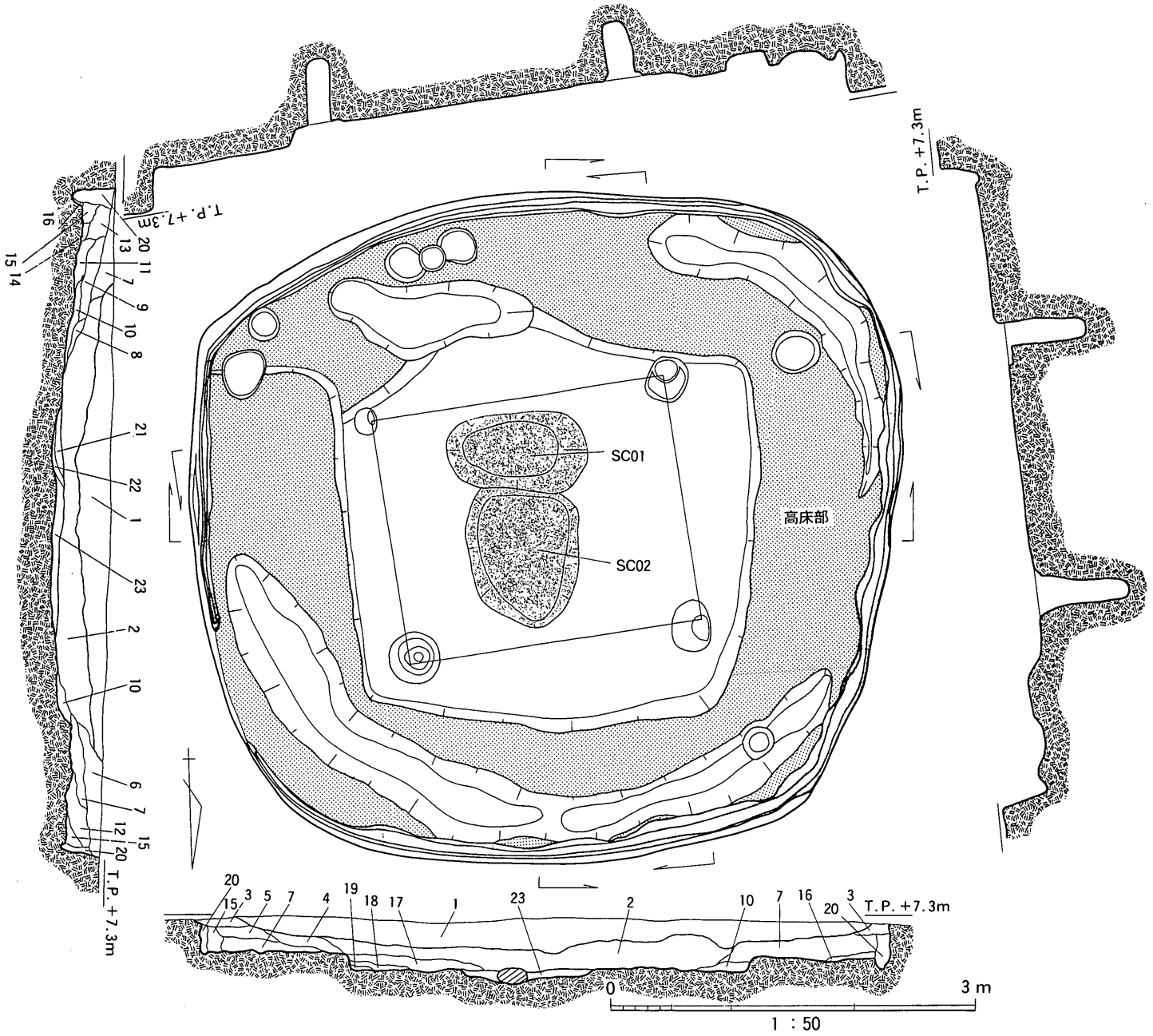
調査は開発計画に従い，開発申請面積の内，幅７ｍ，延長75ｍの進入道路部を対象とした。事前の試掘調査による堆積土層の検討により，今回の調査では遺構調査面を一面に絞り込むことで実施した。そのため，現代水田耕土層から弥生包含層の間の堆積層を重機掘削により除去し，以下弥生包含層を人力掘削し下層上面での遺構調査を実施した。遺構検出段階で住居跡２棟を確認し，住居跡が調査地外へ広がることから部分拡張し遺構の全面検出による全容解明に努めた。折しも調査地に南接して，県埋蔵文化財センターが建設省施設建設工事に伴いすでに調査を実施しており，住居跡１棟については遺構調査を二分し並行調査する結果となった。なお調査成果の一部は，第14回埋蔵文化財資料展[(3)]において出土遺物の公開展示を行うとともに，第９回文化財調査報告会において調査概要についての報告を実施している。



第1図　調査地概略図

T.P.＋8.3m
SA01
SA02
SD01
0 現代水田耕土層
1 明黄褐色シルト層（Ｆｅ酸化沈殿層）
2 灰白色シルト層（旧耕作土）
明黄褐色シルト層（Ｆｅ酸化沈殿層）
3 灰黄色シルト層（旧耕作土）
にぶい黄橙色シルト層（Ｆｅ酸化沈殿層）
4 黒色～緑黒色シルト層
5 黄色シルト層（遺構検出ベース面）
6 7 住居跡SA02埋土
8 溝SD01埋土
0
10m
1：150

第２図　遺構配置図



1　黄灰色シルト（住居跡SA01上層理土）
2　灰色シルトに黄色シルトが混在
3　灰黄色シルトと黄色シルトの混在
4　黄色シルトに黄灰色シルトが混在
5　淡黄色シルトに灰白色シルトが混在
6　淡黄色シルトに灰色シルトが混在
7　褐灰色シルトに黄色シルトが混在
8　黄色シルトに灰色シルトが混在
9　黒褐色シルトに黄色シルトが混在
10　灰色シルトに黄色シルトが混在
11　黄色シルトに灰白色シルトが混在
12　黄灰色シルトに黄色シルトが混在
13　褐灰色シルト
14　黄色シルトに黄灰色シルトが混在
15　黄灰色シルト
16　黄灰色シルト
17　黄色シルトに黄灰色シルトが混在
18　黄色シルト
19　黄灰色シルト
20　黄灰色シルト（周溝埋土）
21　褐灰色粘土質シルトに黄色シルトが混在（炉SC01埋土）
22　炭化層（炉SC01埋土）
23　灰色粘土質シルト（焼土層・炭化物混入）（炉SC02埋土）

第３図　竪穴住居跡SA01

2　基本層序（第２図）

調査地の標高はT.P.＋８ｍを測り，現代水田耕土層下に第１～５層が堆積する。なお第２，３層については細分されるが，旧水田耕作時における土壌の酸化還元現象により分層されるものであり，ここでは単層として扱った。以下，上位より概略する。

第０層　現代水田耕土で層厚10cmを測る。

第１層　Ｆｅ酸化沈殿の明黄褐色シルトで層厚５cmを測る。

第２層　旧耕作土の灰白色シルトとＦｅ酸化沈殿の明黄褐色シルトで層厚20cmを測る。

第３層　旧耕作土の灰黄色シルトとＦｅ酸化沈殿のにぶい黄橙色シルトで層厚10cmを測る。第２，３層では灌漑水田経営に伴う土壌の酸化還元の互層堆積が顕著に見られ，磁器片が出土していることから近世以降の水田耕作土と考えられる。

第４層　黒色～緑黒色シルトの弥生時代の遺物包含層であり層厚10cmを測る。なお第４層上面での遺構が存在する。

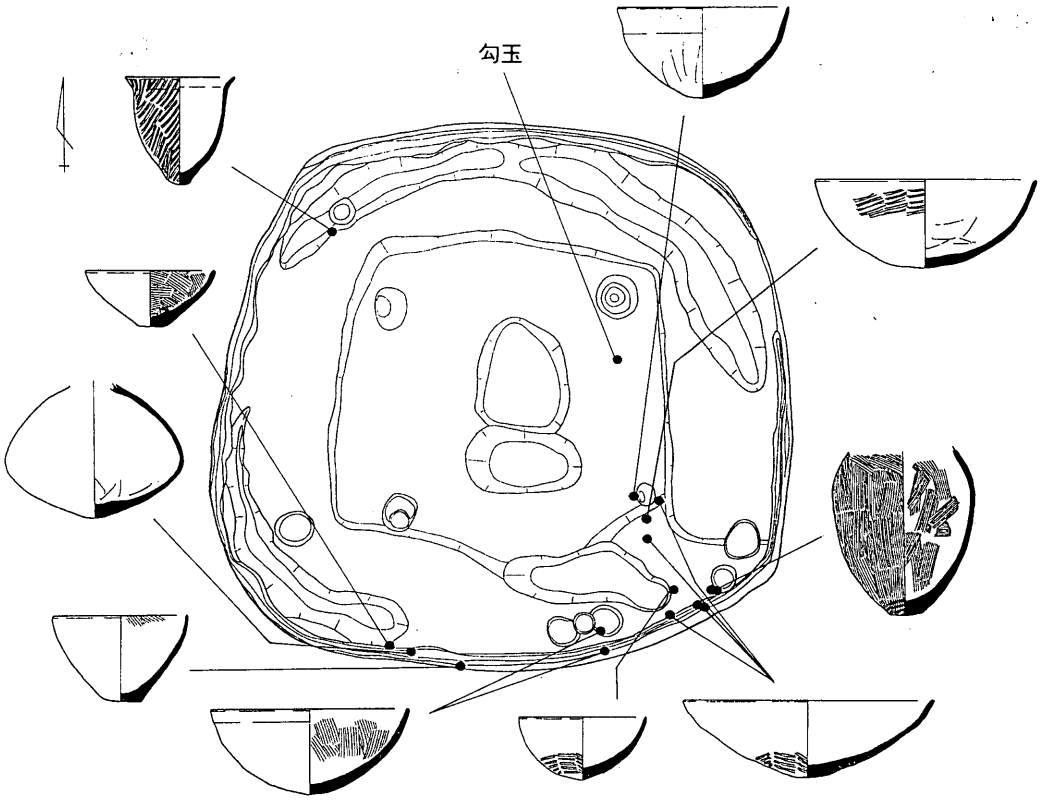
第５層　黄色シルトであり遺構検出ベースである。

3　調査概要（第２図，図版１）

調査では竪穴住居跡２棟，溝１条のほか多数の土壙，ピットを検出している。土壙，ピットに関しては出土遺物が少量であり，それらの性格ならびに時期判定を考える上での情報を得るまでには至らなかった。ここでは竪穴住居跡および溝についての概略を述べておくことにする。

(1)　竪穴住居跡SA01（第２～７図，図版２，３，７～10，12，13）

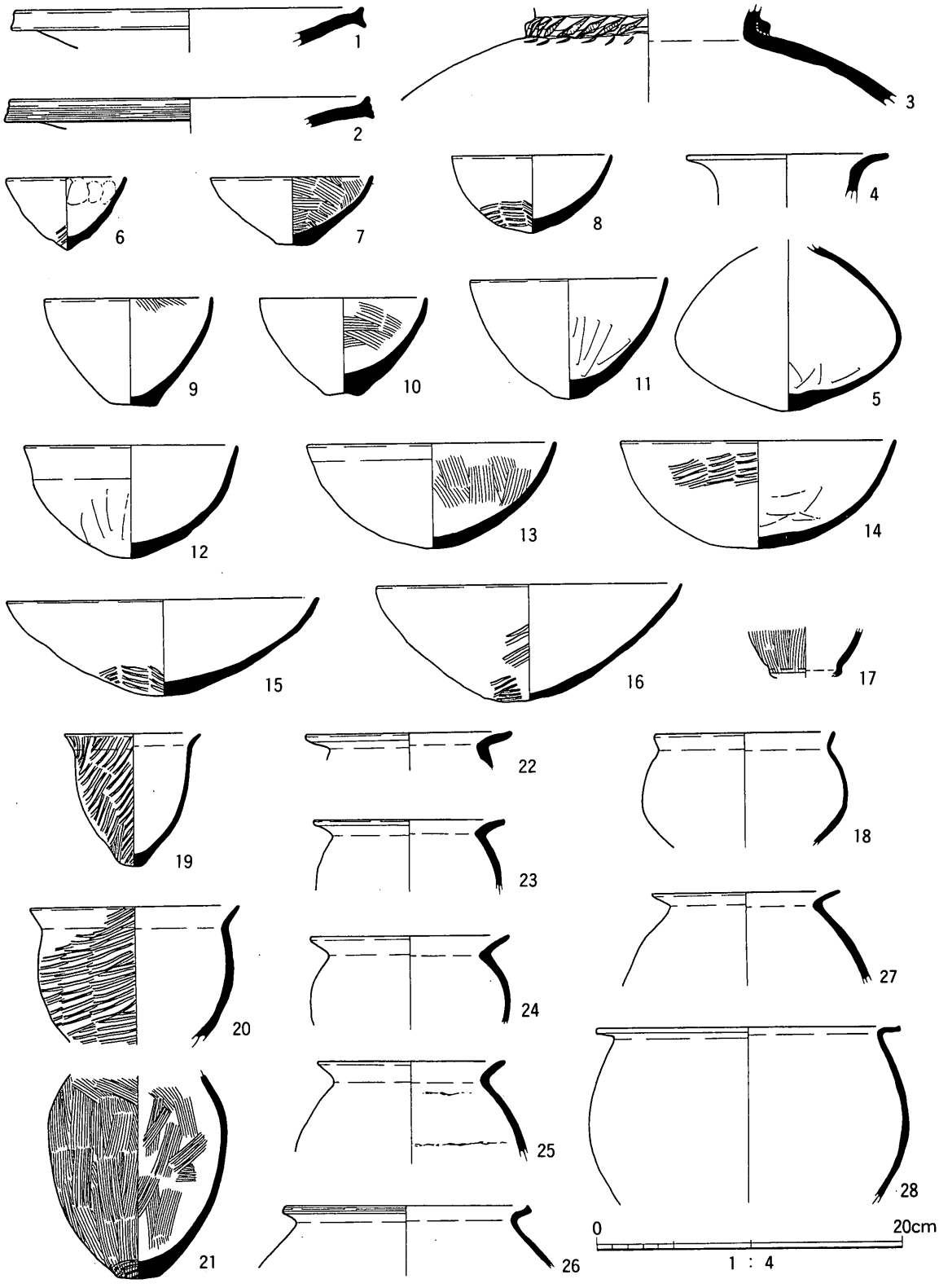
平面形が径５ｍの方円形を呈する。壁高は30cmを測り，一部で途切れる箇所が存在するが幅10～20cmの壁溝が巡る。壁面に沿って幅１ｍの高床部が作出され方形の床面と15cmの段差が生じる。高床部のレベルは均一ではなく南東隅部において何に起因するのかは明確ではないが明瞭な段差が生じる。ただし住居内での遺物出土はこの付近に集中する傾向が認められる。また高床部には溝状の浅い窪みが認められ，高床部の機能痕跡を示す可能性が考えられる。床面中央には長径1.2m短径0.9mと長径1.2m短径0.6m深さ10cmを測る楕円形を呈する土壙があり，埋土に炭化物ならびに焼土が含まれることから炉跡（SC01，SC02）と考えられる。炉跡SC01より凹石が出土しており，凹石の一部には被火による破損が見られる。主柱穴は４箇所に見られ径20～40cmの円形もしくは長円形を呈し深さ50～70cmを測る。



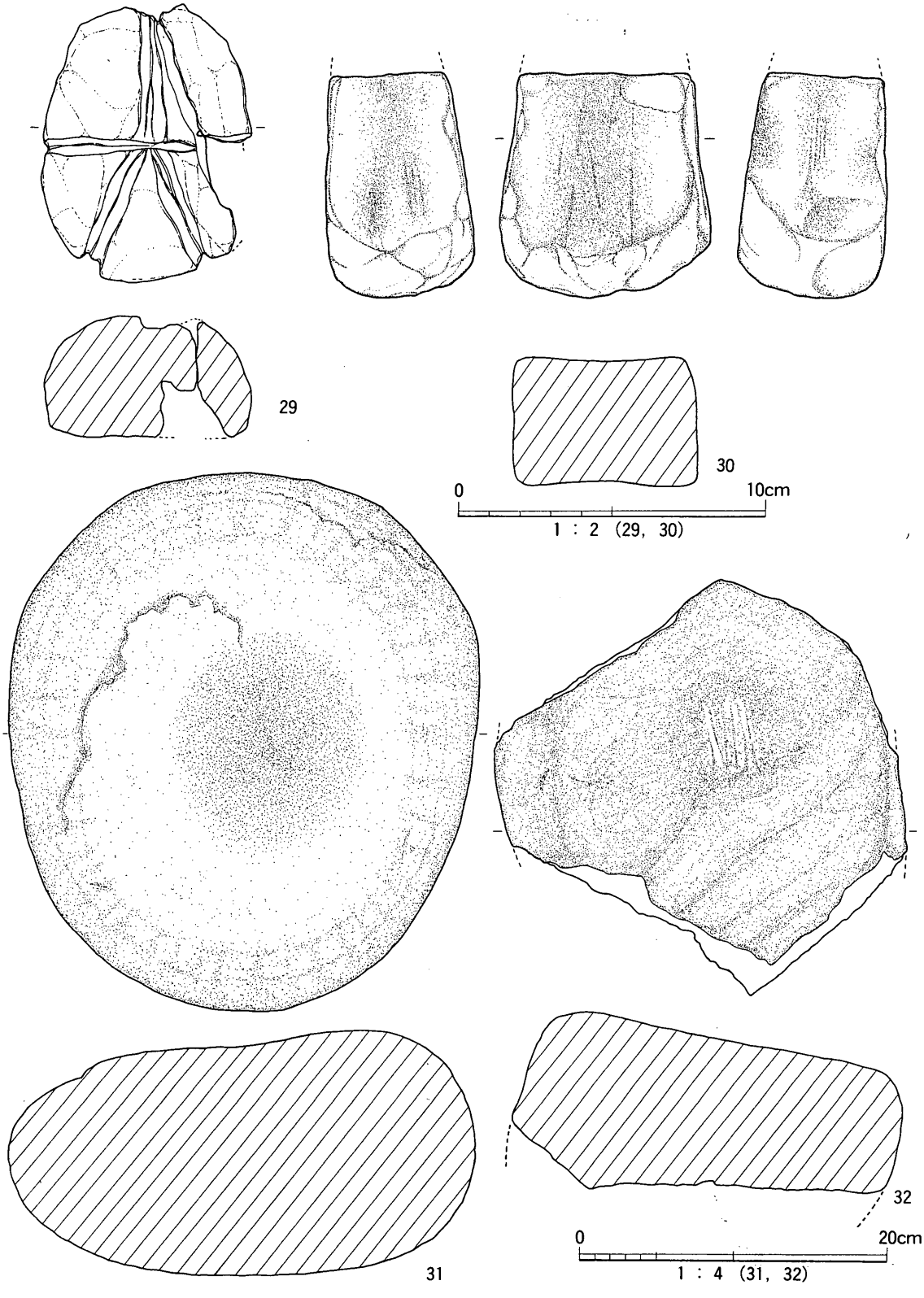
第４図　竪穴住居跡SA01遺物出土位置図

出土遺物には壺（１～５），鉢（９～19），甕（20～28），底部片（33～43），有溝土製品（29），砂岩製砥石（30），砂岩製凹石（31，32），サヌカイト製石鏃（図版10－79），蛇紋岩製勾玉（図版10－80）がある。

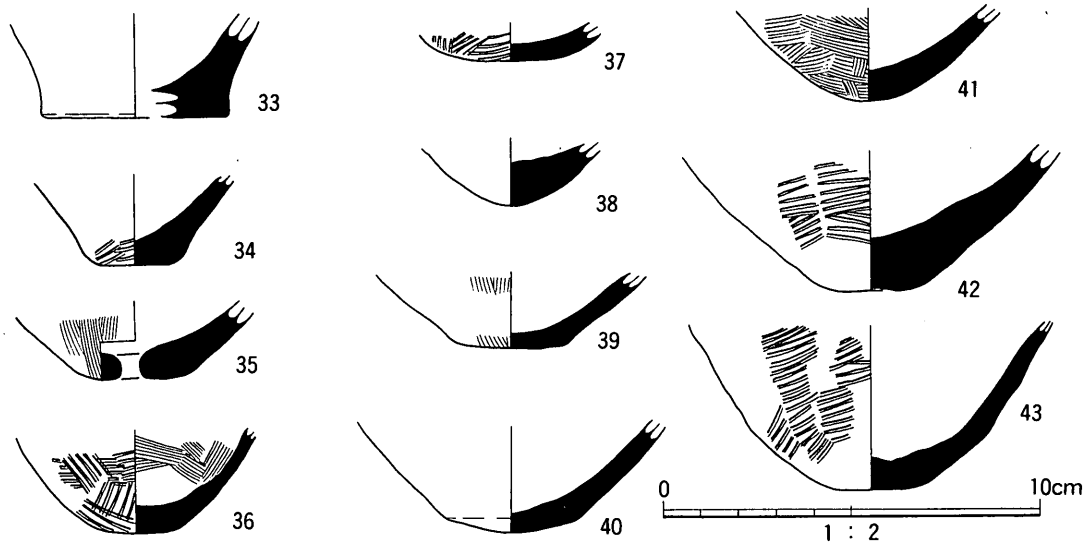
広口壺１，２は口縁端部を上下にわずかに拡張し，２の口縁端面には擬凹線が見られる。３は広口壺片であり体部と頸部の屈曲部に突帯を貼付け，突帯および突帯直下に刺突文が施される。４は広口壺の口縁部片であり，口縁部が短く外反し口縁端部に形状変化は見られない。５は細頸壺の体部であり体部屈曲は下位にある。鉢には底部が小さな平底のもの（７，９，10），尖底のもの（６，８，11，12），丸味を持つもの（13～16）がある。17は小型丸底鉢片である。甕は口縁端部が丸味を持つもの（20，22～25，27）と端部をナデにより上方にわずかに摘み上げるもの（26，28）があり，26の口縁端部には擬凹線が見られる。20は体部から口縁部にかけて分割による叩きが施され，口縁部は叩き出し手法による。21は底部に叩き痕を残すが外面はハケ調整である。底部片には明瞭な平底を呈するもの（33）が１点見られるだけであり，小さな平底もしくは丸味を持つものが主体であり，底部の丸底化への移行状況を示していると考えられる。



第５図　竪穴住居跡SA01出土遺物



第6図　竪穴住居跡SA01出土遺物



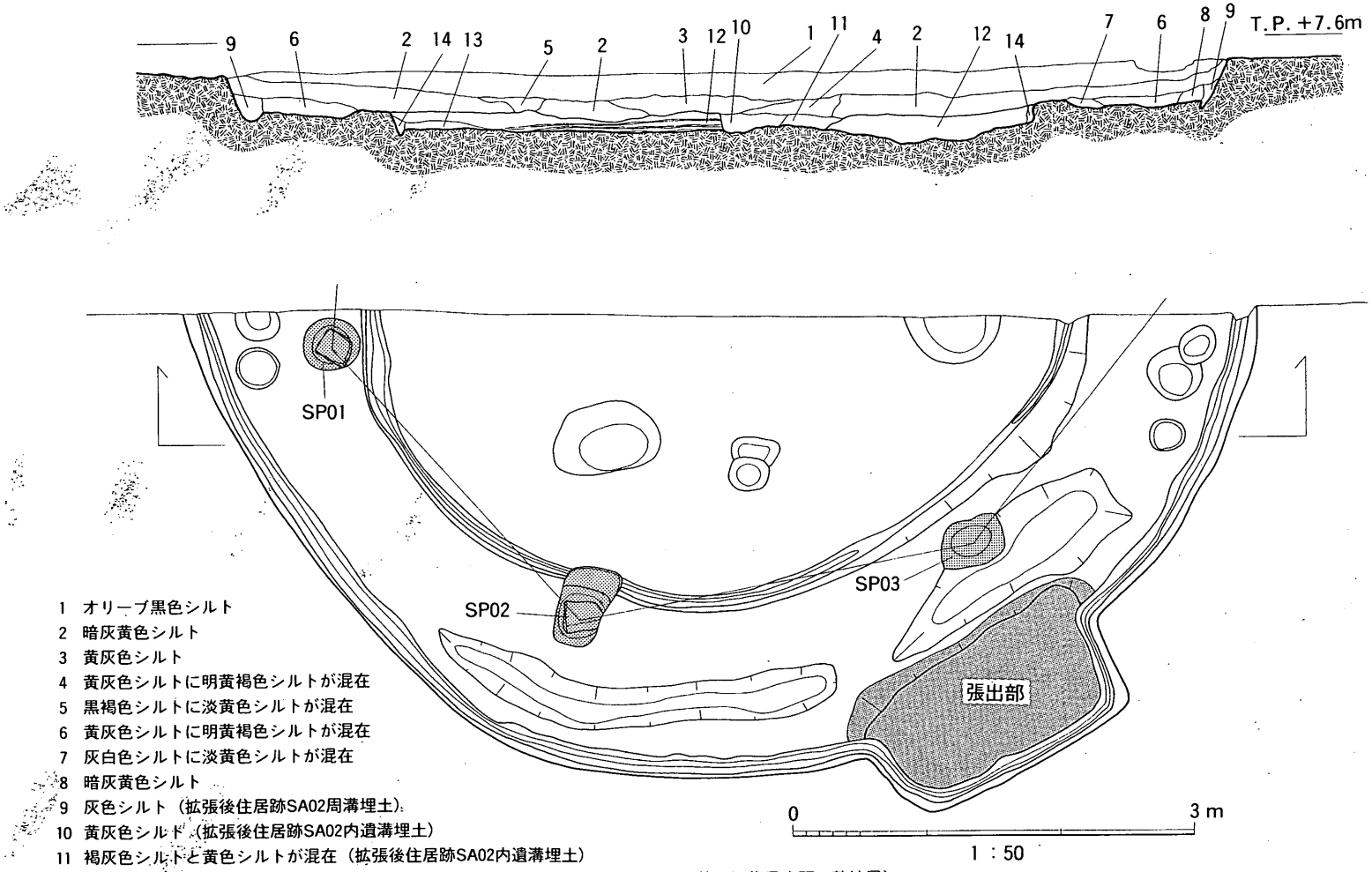
第７図　竪穴住居跡SA01出土遺物

(2)　竪穴住居跡SA02[4]（第２，８，９図，図版４～６，９，11，12）

県埋蔵文化財センターと調査を二分した竪穴住居跡である。

調査地内での平面形が径８ｍの半円形とその内部に径５ｍの半円形の住居跡とが重複存在することから何らかの理由に伴う拡張住居であると考えられる。拡張前の住居跡は残存壁高が20cmを測り幅10cmの壁溝が巡る。主柱穴は住居外で３箇所確認しており，径40cmの円形もしくは長径40cm短径30cmの長円形を呈し，深さは50～70cmを測る。SP01と02の底部には板状に加工した結晶片岩を備えており根石として使用している。また堆積土層の観察において，床面直上では黄色シルトに灰オリーブ色シルトが複数層にわたり挟在することが見られることより，床面の貼直しが数次にわたり実施された可能性が考えられる。埋土の主体が黄色シルトであることから，拡張に伴う新旧住居との床面の段差は結果的に旧住居の床面が全面整地されることにより解消されたものと考えられる。

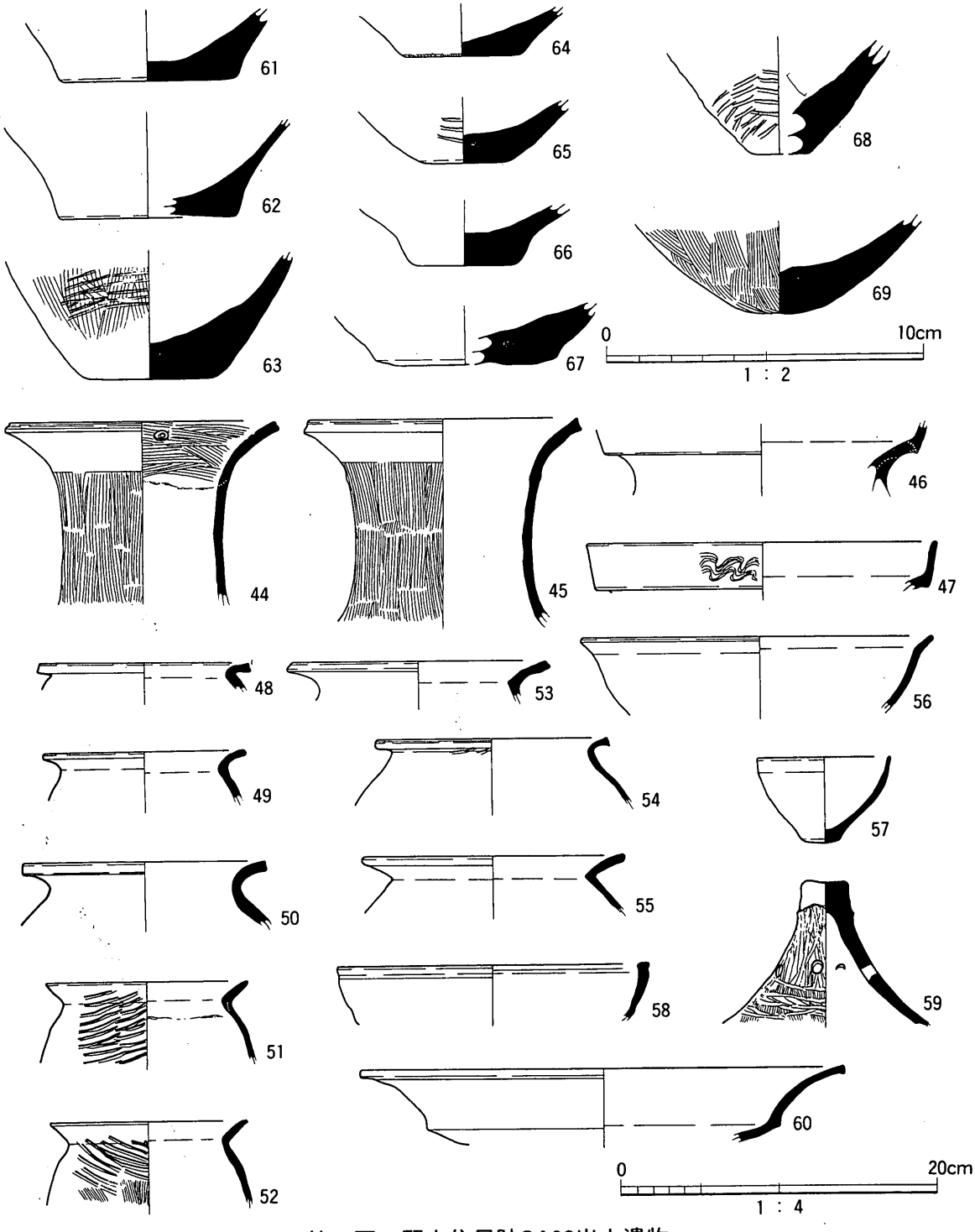
拡張後の住居跡は旧住居を1.2m程外部に拡張したものであり，壁高が30cmを測り幅10cmの壁溝が巡る。拡張に伴い延床面積で約27㎡の増加が推定される。また拡張前には存在しなかったが，長辺２ｍ短辺１ｍの方形状の張出部を作出し，この箇所には15cmの盛土による壇が設置される。ただしその機能については明確ではない。また1.2mの拡張部には住居跡SA01の高床部に見られるような溝状の浅い窪みが見られることから，ここに高床部の機能空間を求めていたとも考えられる。拡張当初，旧住居跡との床面の段差を利用し拡張部が高床部として存在した可能性も想定できるが，前述したように旧住居跡床面の整地に伴う段差の解消が，高床部の機能を無視した状況であると考えなければならない。主柱穴は拡張前の住居跡の柱を移動せずに再利用している。さらに周溝



1 オリーブ黒色シルト
2 暗灰黄色シルト
3 黄灰色シルト
4 黄灰色シルトに明黄褐色シルトが混在
5 黒褐色シルトに淡黄色シルトが混在
6 黄灰色シルトに明黄褐色シルトが混在
7 灰白色シルトに淡黄色シルトが混在
8 暗灰黄色シルト
9 灰色シルト（拡張後住居跡SA02周溝埋土）
10 黄灰色シルト（拡張後住居跡SA02内遺溝埋土）
11 褐灰色シルトと黄色シルトが混在（拡張後住居跡SA02内遺溝埋土）
12 黄色シルトに灰オリーブ色シルトが混在もしくは狭在する（住居跡SA02の拡張に伴う旧住居床面の整地層）
13 灰色シルトに黄色シルトが混在
14 黄灰色シルトに黄色シルトが混在（拡張前住居跡SA02周溝埋土）

第８図　竪穴住居跡SA02

埋土には焼土が含まれることから住居崩壊時での被災の可能性も考えられる。炉跡に関する情報は得られていない。



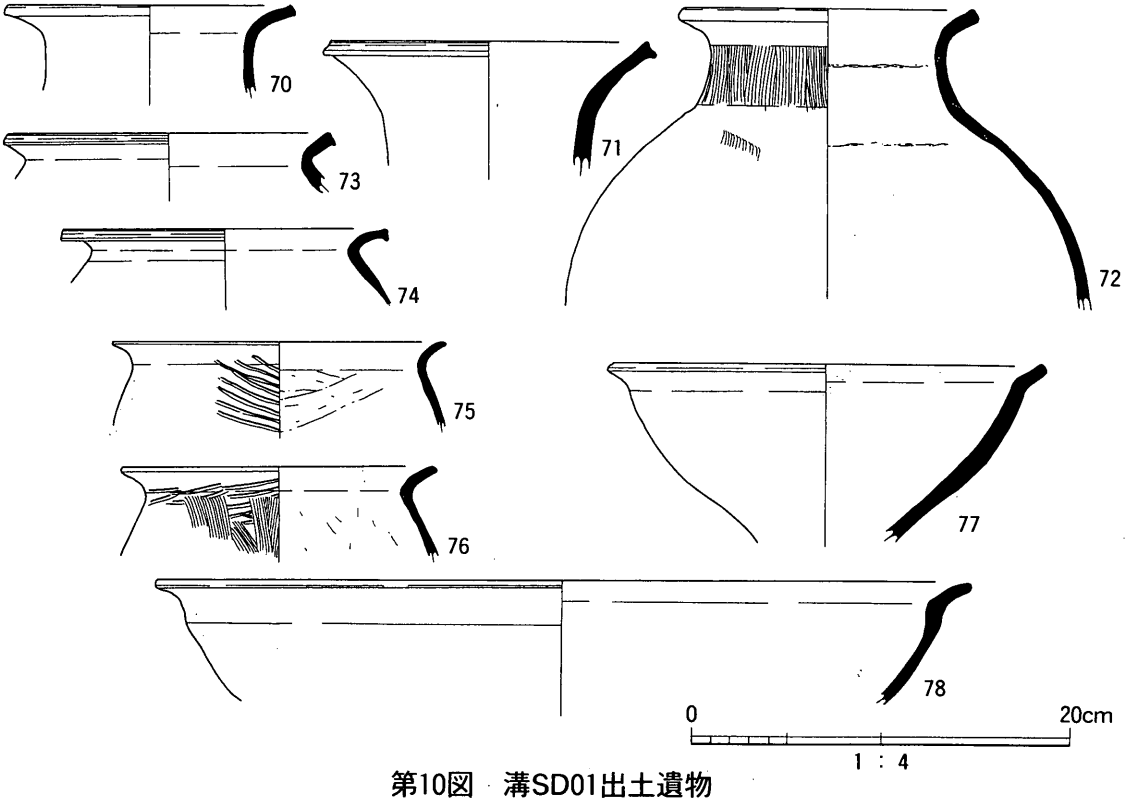
第９図　竪穴住居跡SA02出土遺物

出土遺物には壺（44～47），甕（48～55），鉢（56，57），高坏（58～60），底部片（61～69）がある。

広口壺44，45は頸部が直立し口縁部が短く外反し口縁端部には擬凹線が見られる。46，47は二重口縁壺片であり47の口縁部外面には櫛描波状文が施される。甕は口縁端部を丸くおさめるもの（49，51，52，55），面取気味のもの（50，53），上方に摘み上げるもの（48），上下にわずかに拡張するもの（54）がある。51，52と54とでは口縁端部の形状を異にするが口縁部の成形は叩き出し手法による。56は体部が内彎気味に立ち上がり口縁部が短く外反する。57は小さい平底を呈する。58は口縁端部を面取り口縁端部直下および底部との境界部に退化した１条の凹線が施される。59は差込式の高坏脚部である。60は口縁部が大きく外反し，屈曲部に明瞭な稜線が生じる。底部片は明瞭な平底を呈するもの（61～67），小さい平底のもの（68），丸味を持つもの（69）があり，住居跡SA01出土の底部片との比較において明瞭な平底の存在が目立つ。

(3) **溝SD01**（第２，10図，図版６，13）

調査地の東端部で検出した幅１～1.5mを測る北東－南西方向の溝である。



第10図　溝SD01出土遺物

出土遺物には壺（70～72），甕（73～76），鉢（76，77）がある。

広口壺70～72は口縁部が短く外反し70，71の口縁部には擬凹線が見られる。70，72は口縁端部をナデにより上方にわずかに摘み上げ，71は下方にわずかに拡張する。甕は口縁端部をナデにより下方に拡張するもの（73，74），丸くおさめるもの（75，76）がある。

4　小　結

従来名東遺跡における住居跡の検出事例は希薄であり，集落構造を考える上での基本資料の蓄積が何よりも待たれているのが現状である。今回発見された住居跡は名東遺跡における集落の時間，空間的広がりを考える上でも貴重な資料といえる。

竪穴住居跡SA01と02の住居の平面形態が示す微妙な差異は，出土遺物における微妙な変化を読み取ることでも理解できる。現在の研究成果に従えば，住居跡SA01には「黒谷川II式」，住居跡SA02には「黒谷川Ⅰ－II式間」の時期設定が可能であり[5]，矢野遺跡竪穴住居跡SA01および02出土遺物が同時期の資料[6]とされ，住居跡の平面形態の変化と土器型式の変化は時間的流れにおいて一致する。ただ最近黒谷川諸型式の再考を迫られている現状を考慮すれば，暫定的な時期設定であり近い将来修正されるべきであろう[7]。

では名東遺跡において弥生時代終末期の比較資料を求めるなら，今回の調査地から南へ100mの地点で実施された調査における溝SD101および方形周溝墓SL18第３，５層出土資料がほぼ同時期（黒谷川Ⅰ）に比定される[8]。ただ方形周溝墓SL18には周溝底部出土の一括資料があり，第３，５層出土資料とは明らかに様相が異なるとの指摘[9]があることからその造営時期については別問題とされる。名東遺跡における当該期の住居跡はすでに名東１丁目団地[10]において確認されていることから，弥生時代終末期における集落領域が，今回の調査地を含めた地域に求めることが可能である。

弥生時代終末期の住居跡さらにある程度の領域を示す集落の存在が想定されることが，一方では別の大きな問題を提起することにもなる。それは名東遺跡においては，銅鐸出土地に近接した位置での調査において検出された住居跡群[11]（竪穴住居跡SA01～03）あるいはこれらの住居跡群から北西へ200mの地点で調査された住居跡群出土資料[12]さらに前述した方形周溝墓SL18の周溝底部での一括資料が示すように，弥生時代中期末および後期初頭の可能性を持たせた集落が存在確認されている。だがこれらの資料を持つ集落と今回の調査により検出された資料を持つ集落はほぼ隣接していながら，両集落における土器型式には間隙があり両者を繋ぐ資料を見出すことができないことである[13]。

十分な資料が蓄積整理されていない現在，問題解決は決して急がないが，このことは名東遺跡における土器型式の詳細な再考さらには名東遺跡における一時的な集落解体の想像にまでおよんでくる。また隣接する矢野，南庄遺跡における弥生時代集落の動向も重要な要素であり，これらの遺跡に関する充分な考察を加え遺跡相互の比較検討を行うことが必要とされるであろう。

註

(1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要３』1993年，徳島。

(2) 徳島市教育委員会『弥生時代の徳島市－埋蔵文化財資料展－』1983年，徳島。

(3) 徳島市教育委員会『阿波を掘る－第14回埋蔵文化財資料展－』1994年，徳島。

(4) 竪穴住居跡SA02は県埋蔵文化財センターと調査を二分した。埋文センターの正式報告書は刊行されていないが，センター調査部分の写真図版への掲載については便宜を図っていただいた。

(5) 菅原康夫氏の御教示による。

(6) 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会『矢野遺跡発掘調査概要－四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う発掘調査－』1991年，徳島。

(7) 県埋蔵文化財センターが実施している徳島南環状線建設工事に伴う矢野遺跡発掘調査の出土資料の検討により黒谷川諸型式の細分が可能であると菅原康夫氏の指摘がある。

(8) (1)に同

(9) (1)に同

(10) (2)に同

(11) (1)に同

(12) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要２』1992年，徳島。

(13) このことについては以前，徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要３』「III　名東遺跡発掘調査概要－マンション建設工事に伴う発掘調査－」において触れているが，今回は土器型式の観点からではなく集落領域の面からも問題提起するものである。

III　中島田遺跡発掘調査概要

－店舗建設工事に伴う発掘調査－

III　中島田遺跡発掘調査概要

－店舗建設工事に伴う発掘調査－

調査場所　徳島市南島田町２丁目98番１

調査期間　平成５年５月10日～５月31日

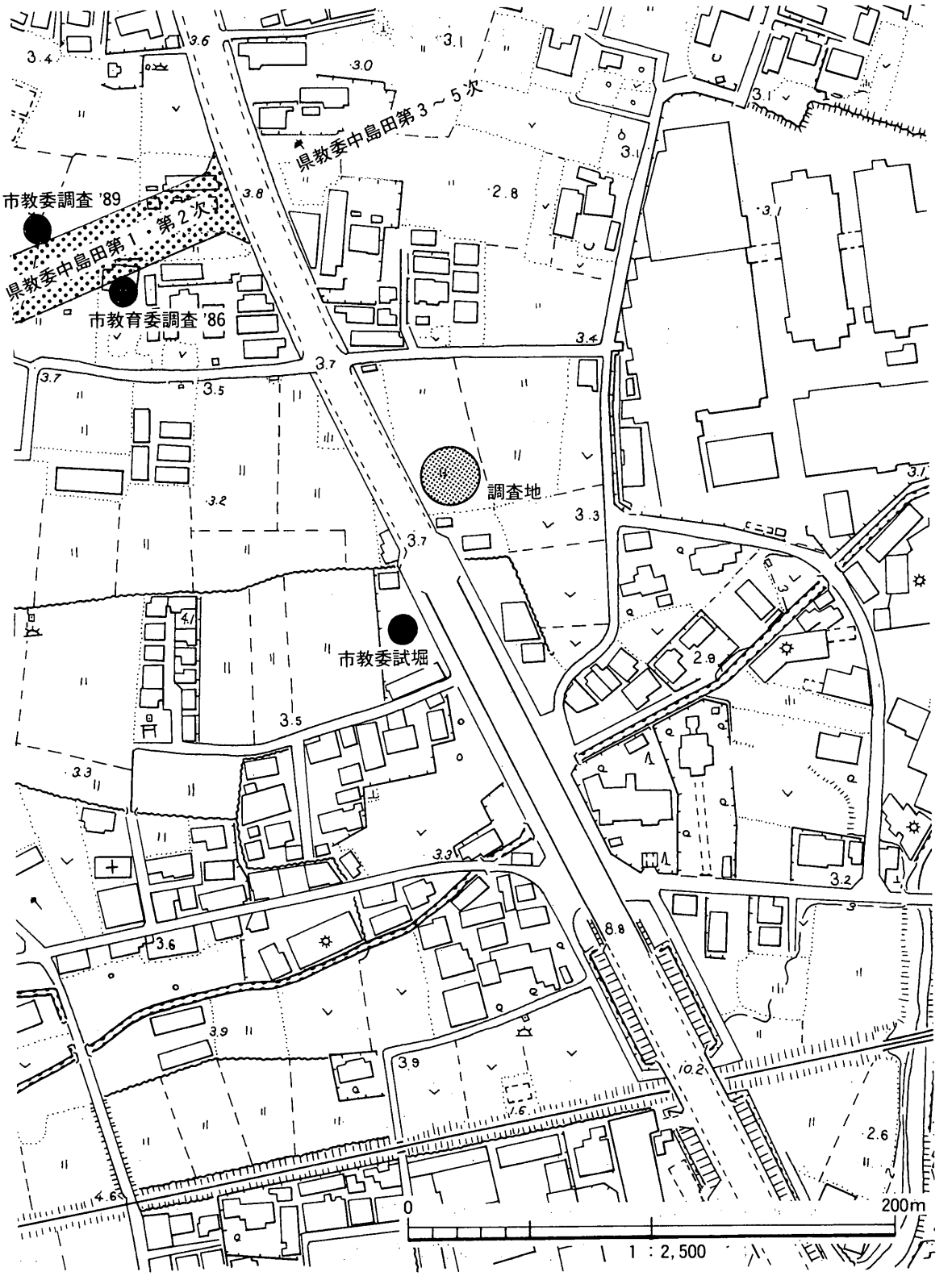
調査面積　110㎡

１　調査に至る経緯と経過（第１，２図）

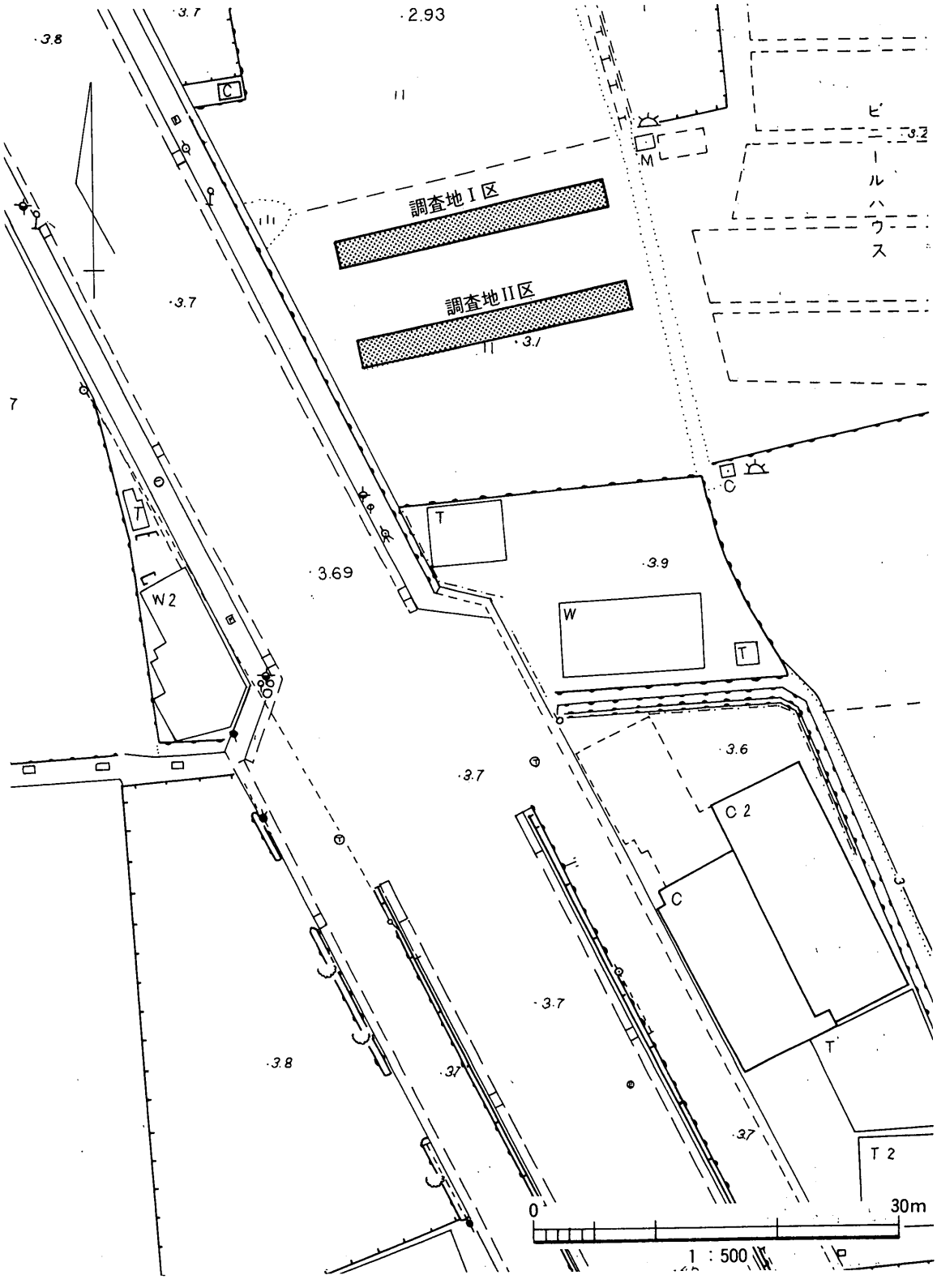
中島田遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した低位沖積微高地上に位置する中世から近世に至る集落遺跡である。中島田遺跡の調査は1986年に始まる県道徳島鴨島線建設工事に伴う調査（第１次）が最初であり，以来周辺地域では市教委による調査も見られるが，道路改良工事に伴い県教委が精力的に調査を実施しており（第２～５次），中島田遺跡の様相はすべて県教委の調査成果に見出すことができると言っても過言ではない。

さて遺跡の範囲についてであるが，1986年から始まる調査（第１，２次）では遺跡の西端部がほぼ把握され[1]，1992年の調査（第３，４次）では東方への広がりを確認[2][3]，さらに1993年の調査（第５次）では遺跡の東端を確認[4]し東西約300ｍにおよぶ広がりを持つ集落であると理解されている。一方，県道部に隣接した地点では市教委の調査成果[5][6]があり建物跡が確認されていることから南北方向への遺跡の広がりも予測されているが，現在その範囲については明確ではない。

調査地は1992年都市計画道路常三島中島田線改良工事に伴い県教委が発掘調査を実施した地点（第３，４次）より南方へ100ｍに位置し，行政区画名では南島田町に該当する。しかし遺跡の存在が確実ならば，立地的には従来中島田遺跡として認識されている集落の領域に含まれるものと考えられた。また市教委では今回の調査地から県道１号線を挟んで南西50ｍの地点での試掘調査の経験があり，その地点では遺構面が存在せず遺跡の範囲外との判断を下した経緯があり，本調査地が非常に近接していることから，遺跡の存否が全く予測できない地域であった。このような状況下，開発申請者との立会において事前の試掘調査を実施した結果，遺跡の存在が明確化し本調査を実施するに至った。調査は開発計画に基づき店舗建設部の内，基礎掘削が行われる約110㎡（調査地Ⅰ，Ⅱ区）を対象に実施した。現代水田耕土層から中世包含層間の堆積層を重機掘削により除去し，以下人力掘削により遺構，遺物の検出に努め，従来の調査成果に新たな資料を追加するに至っている。



第1図　中島田遺跡調査地位置図


調査地Ⅰ区
調査地Ⅱ区
ビールハウス
2.93
3.69
3.9
3.7
3.6
3.8
3.1
W
W2
C2
T
T2
C
M
0
30m
1 : 500

第2図　調査地概略図

2　基本層序（第３図）

調査地の標高はT.P.＋３ｍを測り，現代水田耕土層下に第１層～11層が堆積する。以下，上位より概略する。

第０層　現代水田耕土で層厚15cmを測る。

第１層　淡黄色シルトで層厚25cmを測る旧水田耕作土。

第２層　黄灰色シルトで層厚20～40cmを測る旧水田耕作土。

第３層　灰色粘土質シルトで層厚15～20cmを測る旧水田耕作土で調査地II区に見られる。

第４層　黄褐色シルトで層厚10cmを測る第３層に伴うＦe酸化沈殿層。

第５層　暗灰色粘土質シルトで層厚20cmを測る旧水田耕作土。上位にＭｎの集積汚染が見られる。

第６層　黄褐色シルトで層厚５cmを測る第５層に伴うＦe酸化沈殿層。

第１～６層は近世以降の水田耕作土であると考えられる。

第７層　灰色粘土質シルト（含炭化物）で層厚20cmを測る。中島田遺跡特有の遺物包含層である。

第８層　黄色シルトで層厚50～60cmを測る遺構検出ベースである。

第９層　緑灰色粘土質シルトで層厚50～60cmを測る。基本的に第８層と同層であるが，調査区の東部において色調，土質が漸移的に変化する。

第10層　暗灰色粘土で層厚40cmを測り低湿地帯における水成堆積層と考えられる。

第11層　黄褐色砂礫で中島田遺跡における最下位層である。

3　調査概要（第３～４図，図版１～５）

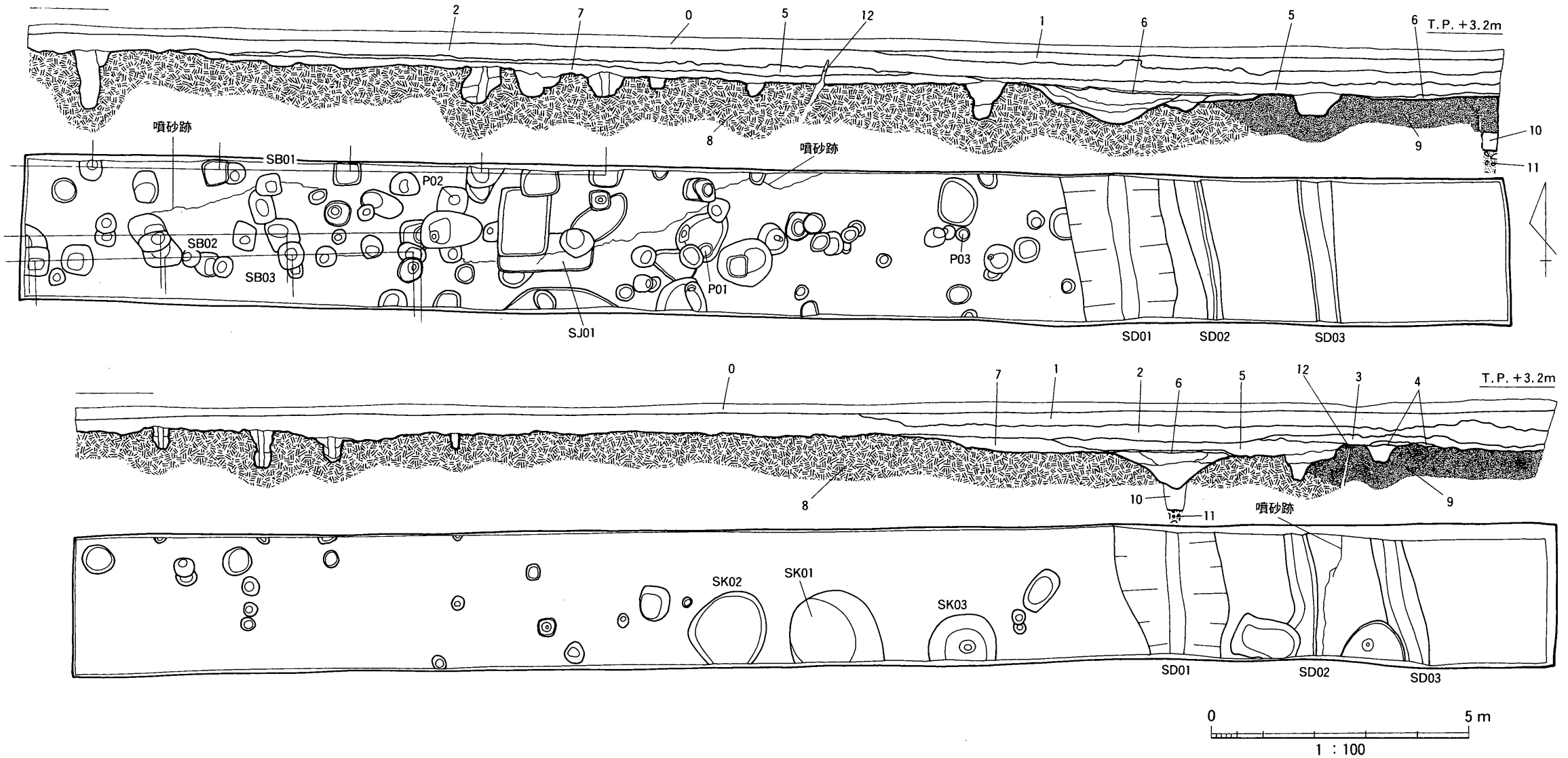
調査では掘立柱建物，溝，土壙のほか多数のピットを検出している。調査地が狭少でしかも出土遺物が微量であるため，遺構の時期設定ならびにそれらの性格を考え得るには困難なものがあり，ここでは主な遺構，遺物について概略する。

(1)　掘立柱建物SB01

調査地Ｉ区において南側桁行４間分を検出し，調査地北側に広がる東西棟の建物跡であると考えられる。柱穴の平面形は方形を呈し一辺50cm，深さ50cm～１ｍを測る。柱間寸法は東側より2.4－2.5－2.5－2.4mを測る。柱穴より遺物は出土していない。

(2)　掘立柱建物SB02

調査地Ｉ区において北側桁行３間分を検出し，調査地南側に広がる東西棟の建物跡であると考えられる。柱穴の平面形は方形を呈し一辺60cm，深さ50～60cmを測る。柱間寸



0　現代水田耕土層（第０層）
1　淡黄色シルト層（第１層）
2　黄灰色シルト層（第２層）
3　灰色粘土質シルト層（旧水田耕作土）（第３層）
4　黄褐色シルト層（３層水田経営時のＦｅ酸化沈殿層）（第４層）
5　暗灰色粘土質シルト層（旧水田耕作土・上位にＭｎ汚染の集積）（第５層）
6　黄褐色シルト層（５層水田経営時のＦｅ酸化沈殿層）（第６層）
7　灰色粘土質シルト層（中世遺物包含層・中島田遺跡に見られる遺物包含層）（第７層）
8　黄色シルト層（上面＝遺構面）（第８層）
9　緑灰色粘土質シルト層（基本的に８層と同層であるが、色調・土質が漸移的に変化）（第９層）
10　青灰色粘土質層（第10層）
11　黄褐色砂礫層（第11層）
12　黄灰色細砂～粗砂層（噴砂層）

第３図　遺構配置図

法は東側より2.5－2.4－2.5mを測る。柱穴より遺物は出土していない。

(3) 掘立柱建物SB03

調査地Ⅰ区において北側桁行３間分を検出し，調査地南側に広がる東西棟の建物跡であると考えられる。柱穴の平面形は方形を呈し一辺60cm，深さ50～60cmを測る。柱間寸法は東側より2.3－2.4－2.4mを測り，建物跡SB02の柱穴と切り合い関係をもつ。柱穴より遺物は出土していない。

(4) 溝SD01

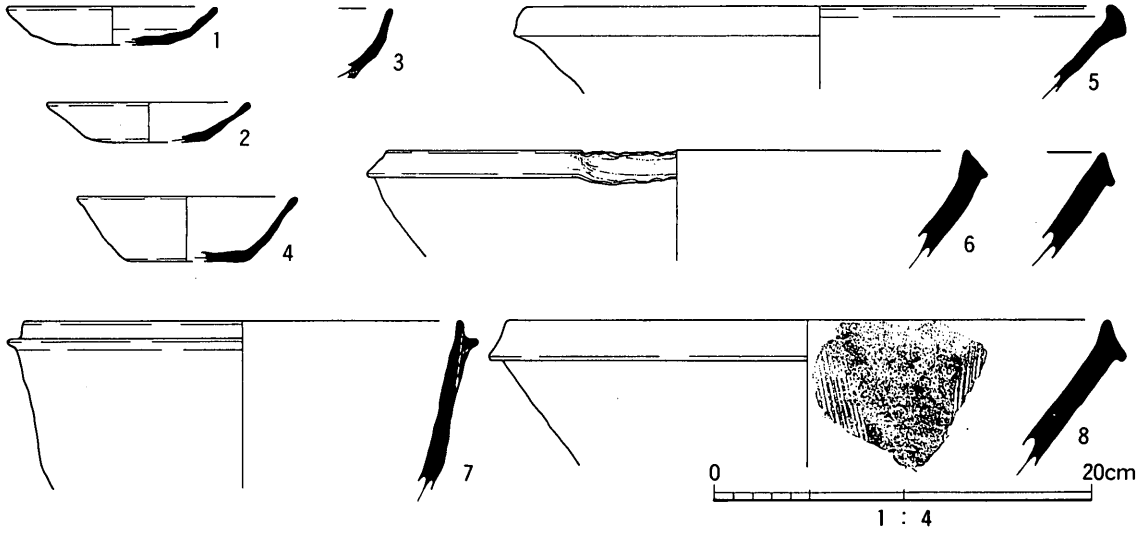
調査地Ⅰ・Ⅱ区において対応し，幅２m，深さ60～70cm，断面形が皿状もしくはV字状を呈する南北方向の溝である。埋土の土質は粘土質シルトであり著しい水流痕跡は認められない。遺物は出土していない。

(5) 溝SD02

調査地Ⅰ・Ⅱ区において対応し，幅50cm，深さ40～50cm，断面形が逆台形を呈する南北方向の溝である。埋土の土質は粘土質シルトであり著しい水流痕跡は認められない。遺物は出土していない。

(6) 溝SD03

調査地Ⅰ・Ⅱ区において対応し，幅50～60cm，深さ30～40cm，断面形が逆台形を呈する南北方向の溝である。埋土の土質は粘土質シルトであり著しい水流痕跡は認められない。遺物は出土していない。



第４図　P01(1)，P02(2)，P03(3)，SK01(4)，包含層出土遺物

(7) 土壙SK01

調査地II区において検出した平面形が径1.7mの不整円形を呈し，深さ50cmを測る土壙である。隣接して同形態の土壙SK01と02が存在することから，これらの土壙と何らかの関連性を持つものと考えられる。出土遺物には土師器坏(4)がある。

(8) 土壙墓SJ01

調査地I区で検出した平面形が長辺1.8m，短辺0.7mの長方形を呈し，深さ20cmを測る。壁面が垂直であり底部が平坦であることから土壙墓と考えられる。

これらの遺構以外に，Pit01から土師器皿(1)，Pit02から土師器皿(2)，Pit03から土師器椀(3)，包含層から東播系練鉢(5)，須恵質摺鉢(6)，須恵質鍋(7)，備前摺鉢(8)，土錘（図版5－9～16）がある。

椀3は細片のため明確な形態復原を図化し得ていない。おそらく歪んだ形状の底部中央から外れた位置に退化した高台を持つことが想定される。胎土が白色系であり吉備系土師器椀の可能性もあるが細片のため明確ではない。

須恵質摺鉢6は色調が橙色を呈するが，焼成が硬質に仕上げられている備前摺鉢の模倣形態である。同様に須恵質鍋7は口縁部直下に退化した鍔を持つ土師器鍋の模倣形態であると考えられる。包含層出土遺物はおおむね14～15世紀代のものである。

4 小 結

前述したように調査地が狭少なため十分な遺構復原にはおよばないが，数棟の掘立柱建物の存在の可能性をはじめ，多数の遺構の存在は調査地が確実に中島田遺跡の集落領域に含まれることを示唆している。ただ注目すべきは調査地I区とII区また調査地の東部と西部における遺構密度の極度の差，さらに遺構検出ベース層の東部と西部での変容すなわち東域での低湿地化を考慮すれば，本調査地が中島田遺跡の南東隅部付近に位置する可能性が極めて高い。このような視点に立てば，溝SD01～03は一部切り合い関係をもつが，集落の東端を界する機能を果していたかもしれない。また建物跡に近接した土壙墓は中世集落における墓制としての屋敷墓の形態を示すものと考えられ，従来確認されている中島田遺跡における遺構構成に合致するものである。

掘立柱建物跡と考えられるSB01～03の柱間寸法はわずかな誤差を見せるがほぼ2.4m等間の意識が窺われ，1尺を30cmとした場合の完数倍の数値で得られ比較的規格性の高い建物が想定される。遺構出土遺物の内，確実に時期設定の可能な資料は見当らないが遺構面上位の包含層出土遺物におおむね14～15世紀代の時期設定を与えれば，検出遺構の年代観

が比較的妥当性を帯びて浮かび上がり，13世紀後半から14世紀初頭に始まる中島田遺跡の集落開発段階での遺構の広がりが当該地にまでおよんでいたことが理解できる。また東播系練鉢，備前摺鉢のような搬入品主体の土器様相は吉野川下流域での普遍的な現象を示しており，多量に見られる土錘は低湿地帯での集落開発という中島田遺跡の立地的特質上，漁業村落的な様相を表現しているものと考えられ，今回の調査成果も従来の中島田遺跡に対する評価に異なるものではない。

ただ出土遺物には明瞭な軟質系の土師器製作とは異なる焼成による備前摺鉢あるいは在地産土師器鍋の形態を模倣した硬質系の土器が見られる。このような土器の存在はすでに名東遺跡溝SD07[7]，矢野遺跡溝SD01，03出土資料[8]にも認められている。硬質系に仕上げる焼成法を使用した土器形態は東播系練鉢，備前摺鉢，瓦質三足羽釜の形態を模倣した製品に多く見られ，今後の資料整理により徳島の在地産土器群の中での特殊な様相として位置付けられる可能性を持つものと考えられる[9]。

中島田遺跡の集落開発は比較的狭い領域を示すことが明確化しつつあるが，低位沖積地での集落開発は散村形態として周辺地域でも実施されていた可能性は十分に考えられ，今後周辺地域での厳密な調査が必要とされるであろう。

註

(1) 徳島県教育委員会『中島田・南島田遺跡』1989年，徳島。

(2) 徳島県教育委員会「中島田遺跡（第３次）現地説明会資料」1991年。

(3) 徳島県教育委員会「中島田遺跡（第４次）現地説明会資料」1992年。

(4) 徳島県教育委員会『埋蔵文化財資料展－掘ったでよ阿波－』1994年，徳島。

(5) 徳島市教育委員会『第７回埋蔵文化財資料展－阿波を掘る－』1986年，徳島。

(6) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要２』1992年，徳島。

(7) 名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査概要』1990年，徳島。

(8) 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会『矢野遺跡発掘調査概要』1992年，徳島。

(9) このことについては（「徳島県における古代末～中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』1992年，京都）において少し触れているが，古代須恵器以来の焼成法の系譜を引き継ぐものなのかもしくは中世における新たな焼成法として捉えるのかさらに搬入品に対する模倣形態の生産に主体が置かれていたのかなどの問題点があり，詳細な資料検討が必要とされる。

Ⅳ　南島田遺跡発掘調査概要

－南島田ＳＣ建設工事に伴う発掘調査－

Ⅳ　南島田遺跡発掘調査概要

－南島田ＳＣ建設工事に伴う発掘調査－

調査場所　徳島市南島田３丁目55ほか

調査期間　平成５年６月１日～８月25日

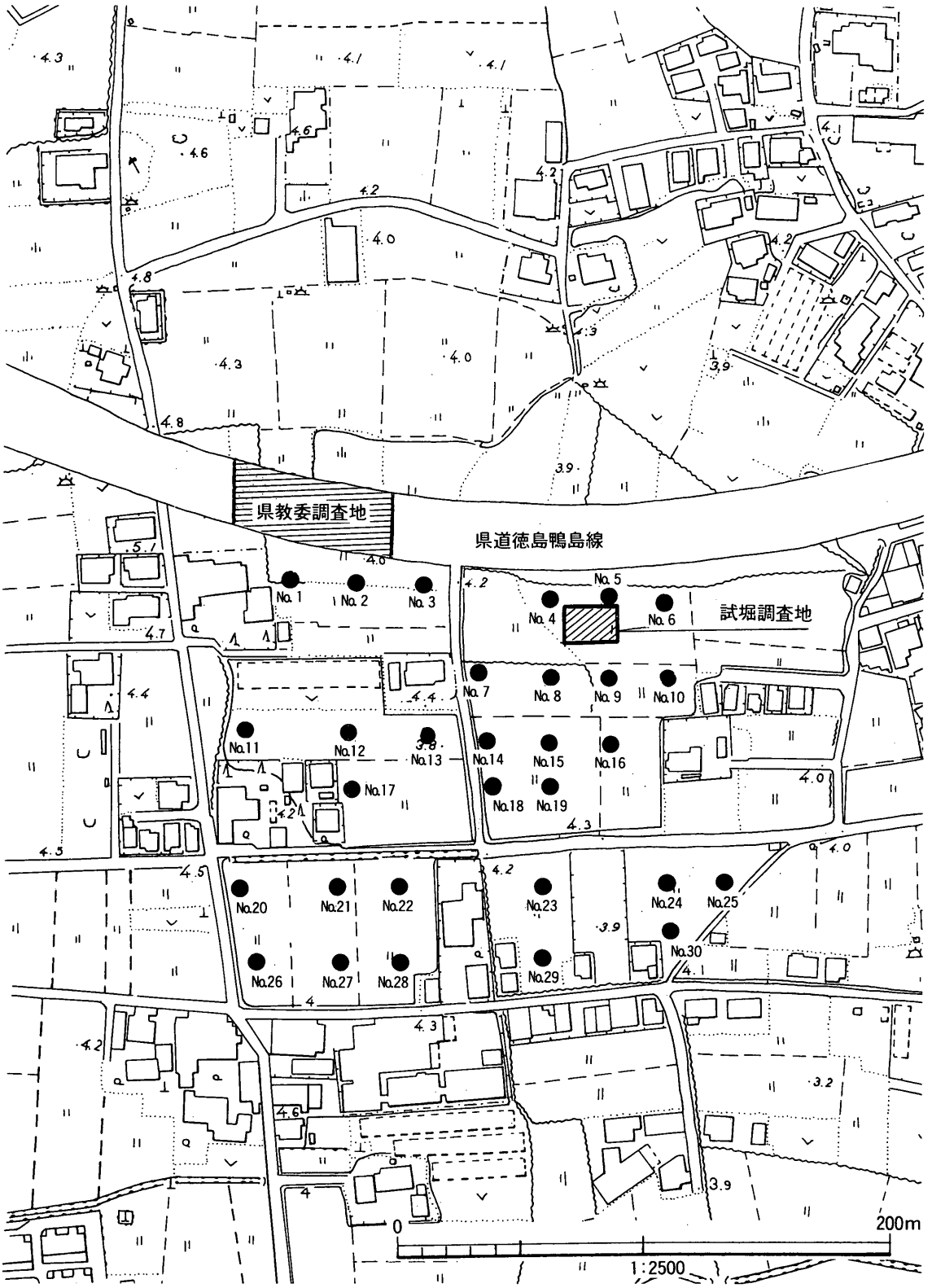
調査面積　500㎡

１　調査に至る経緯と経過（第１図）

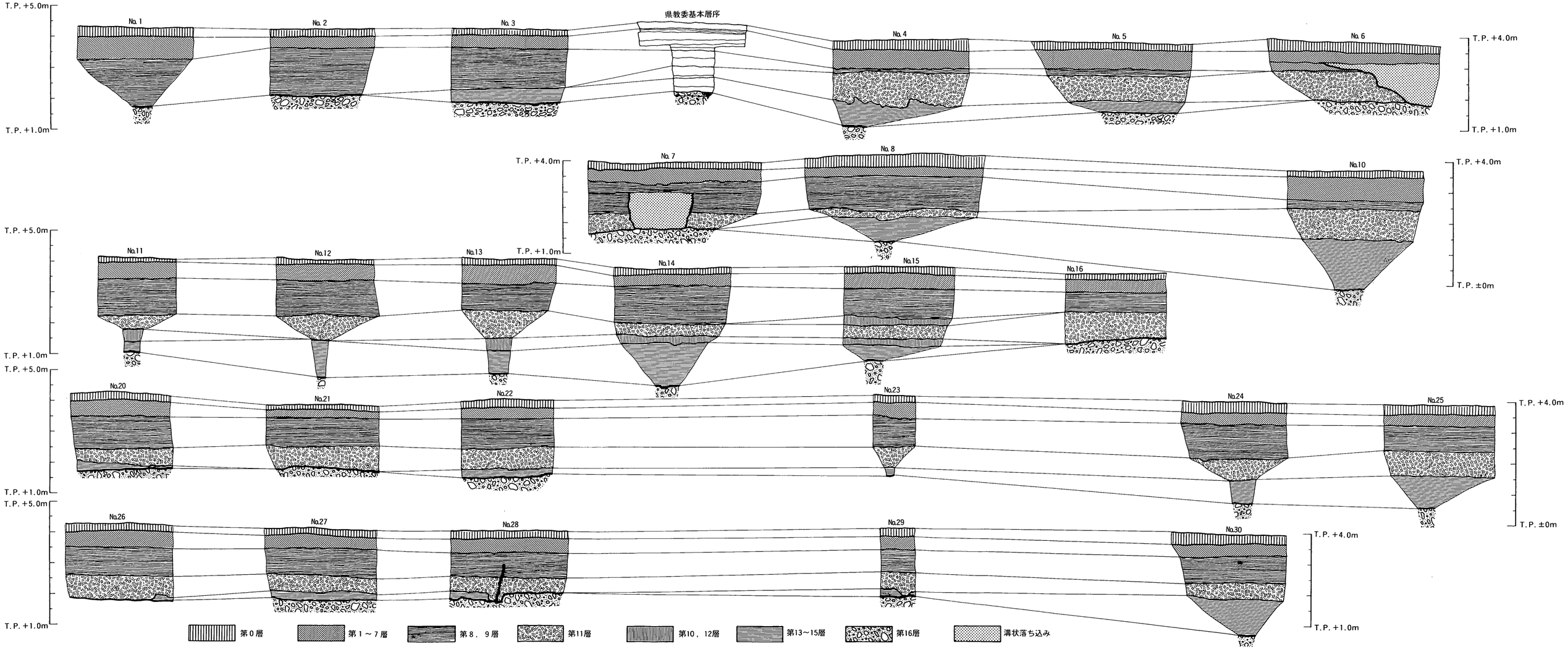
南島田遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した低位沖積微高地上に位置し，1986年に始まる県道徳島鴨島線建設工事に伴う県教委の発掘調査により存在が明確化した中世から近世に至る集落遺跡である。中世集落として著名な中島田遺跡より南西400ｍに位置する。県教委の調査では，自然河道，溝，土壙，建物跡を確認しており南島田遺跡の集落の北限として理解を得ているが，遺構内容および出土遺物に目立ったものはなく，さらに堆積土層の観察より極度の低湿地帯に立地する遺跡としての認識がなされている[(1)]。

今回の調査は県教委が調査した県道徳島鴨島線に南接した約33,000㎡の開発申請地での大型ショッピングセンターの建設計画に伴うものであり，県教委の南島田遺跡の発掘調査の成果に基づき，開発申請者との協議において事前調査を実施することで合意を得た。ただ前述したように県教委の調査では確かに建物跡等の検出に至っているが，それらの検出範囲は極めて狭く周辺部には旧鮎喰川の氾濫原地帯が広がることから集落としての確実な広がりを把握することは困難であった。このため調査は開発申請地を対象に堆積土層を把握するための点的試掘を先行させ，遺跡存在の可能性が求められる地点での面的試掘，さらに最終段階での全面調査という過程を踏んで段階的に調査を進行させる方法を採用した。

30地点における堆積土層の把握を目的とした試掘の結果，一部では層序の欠落が見られるものの，県教委での調査地の基本層序にほぼ対応する堆積土層を確認した。ただ試掘ポイントNo.７において県教委対応第１遺構面での溝状の落ち込みを確認した以外は，断面観察における第１，２遺構面での遺構確認は成し得ず，出土遺物も極めて微量であった。さらに県教委調査地に最も近接する試掘ポイントNo.１～３においては，第２遺構面の検出ベース層の堆積が見られない状況が確認され集落の広がりに疑問が持たれた。試掘調査の結果に基づき約300㎡の調査を実施したが，良好な結果を得ることができず，この時点において全面調査を断念した。ここでは堆積土層に基づく調査成果の概略を述べることにする。



第１図　試掘ポイント（No.１～30）および試掘調査地位置図



第2図　試掘ポイント　堆積土層模式図

2　基本層序（第２～４図，図版１～３）

調査地では県教委基本層序[2]との対応において部分的に欠落する堆積層も見られるが全域において土層の連続性が見られる。試掘調査地の堆積土層を基本に試掘ポイントNo.１～30の層序を付加しながら調査地域における基本層序を提示しておくことにする。以下，上位より概説する。

第０層　現代水田耕土である。

第１層　黄灰色シルトで層厚10cmを測る。

第２層　灰色粘土質シルトで層厚10cmを測る。

第３層　暗灰黄色極細砂～シルトで層厚15cmを測る。

第４層　灰白色粘土質シルトで層厚10cmを測る。

第５層　黄橙色シルトで層厚５cmを測る。

第６層　灰白色粘土質シルトで層厚10cmを測る。

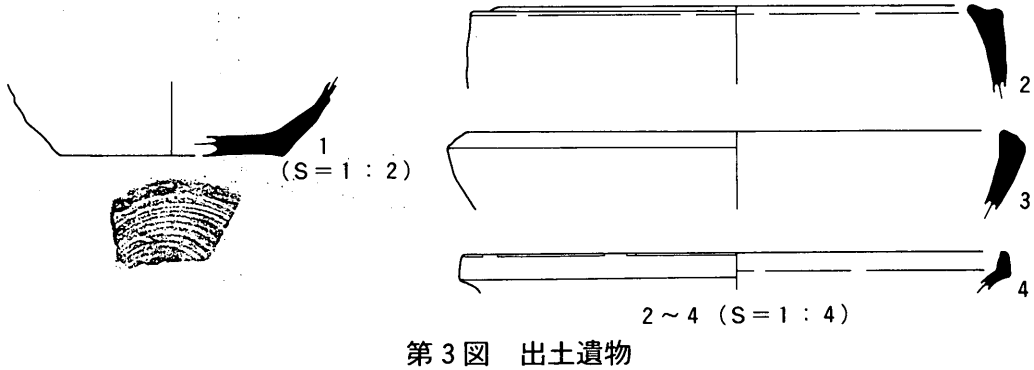
第７層　黄橙色シルトで層厚５cmを測る。

第１～７層は旧水田耕作土であり，特に第４～７層に見られる土壌の酸化還元現象による互相堆積は灌漑用水を伴う水田経営の痕跡を如実に示すものとして理解できる。時期的には近世以降の堆積と考えられ県教委基本層序第２～８層に対応する。

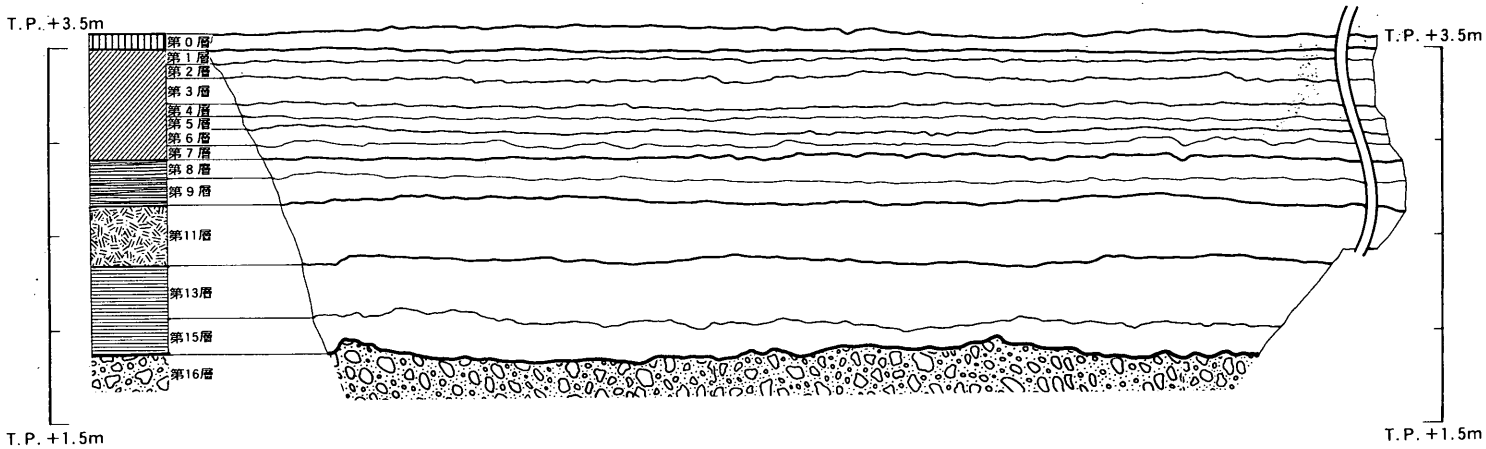
第８層　灰オリーブ色粘土質シルトであり層厚10～60cmを測り，上面でのＭｎ汚染の集積が顕著である。県教委基本層序第９層に対応する。

第９層　オリーブ黄色粘土質シルトで層厚10～60cmを測る。第８層との境界は不明瞭であり，肉眼観察による分層は不可能である。土質において第８層より粘土質の優勢が認められるが，その変化は漸移的である。基本的に第８層と同一層と考えられる。県教委基本層序第10層に対応し，県教委第１遺構面遺構検出ベース層である。本調査においては試掘ポイントNo.７において溝状落ち込みを確認している。

第８，９層からは土師器坏，鍋，東播系練鉢，瓦質三足羽釜脚部，土錘が出土している。おおむね14～15世紀代の遺物包含層と考えられる（第３図）。



第３図　出土遺物



第0層　現代水田耕土
第1層　黄灰色シルト
第2層　灰色粘土質シルト
第3層　暗灰黄色極細砂～シルト
第4層　灰白色粘土質シルト
第5層　黄橙色シルト
第6層　灰白色粘土質シルト
第7層　黄橙色シルト
└ 近世以降の水田耕作土

第8層　灰オリーブ色粘土質シルト（県教委第1包含層）
第9層　オリーブ黄色粘土質シルト（県教委第2包含層・上面＝第1遺構面）
第11層　オリーブ黄色粘土質シルト（上面＝県教委第2遺構面）
第13層　オリーブ灰色細砂～シルト
第14層　灰白色粘土質シルト
第16層　灰色～青灰色砂礫

第4図　堆積土層図

第10層　灰白色粘土質シルトであり層厚30cmを測る。試掘ポイントNo.15において堆積が見られる。他の地点では堆積が見られないことから部分的に窪地での水成堆積と考えられる。県教委での基本層序には該当層はない。

第11層　オリーブ黄色シルト質粘土であり層厚30～50cmを測り，Ｆe酸化汚染が顕著である。県教委基本層序第11層に対応し，県教委第２遺構面遺構検出ベース層である。

第12層　明褐色シルト質粘土であり層厚10cmを測るＦe酸化沈殿層である。試掘ポイントNo.16において見られるが，第11層中に挟在堆積する。県教委基本層序第12層に対応する。

第13層　オリーブ灰色細砂～シルトで層厚40cmを測る。

第14層　灰白色粘土質シルトであり層厚20～40cmを測る。試掘ポイントNo.11，13～15においても堆積が見られる。第11層に類似し，部分的な窪地での水成堆積層と考えられる。第13，14層は県教委での基本層序第13，14層に対応する。

第15層　青灰色粘土で層厚40cm～1.5mを測る還元性の強い水成堆積層である。

第16層　灰色～青灰色砂礫であり，調査地における最下位層である。１m下位にて湧水層に至る。県教委基本層序第15層に対応する。

3　小　結

調査地における堆積層序についての概略を述べてきたが，堆積土層に基づき南島田における景観を復原的に想像してみることにする。

最下位の砂礫（第15層）は当該地が旧鮎喰川水系の河川部もしくは氾濫原地帯にあったことを想定させる。そして砂礫層が低下する地域では，水成堆積によるより還元性の強い土壌としての青灰色粘土が厚く堆積する。しかし標高T.P.＋２m前後の低湿地帯ではいずれにせよ第13，14層に見るような水成堆積が顕著に進行する。しかも第13層での砂層の挟在は低湿地帯への水流痕跡として捉えることが可能である。以後低位氾濫原への堆積は進行するが，第12層のＦe酸化沈澱層は第11層にＦe汚染が顕著に見られる現象を考慮すれば水田耕作に伴う土壌の酸化現象として理解できる。おそらく第11層堆積時の頃から広範囲に広がる低湿地帯での水田開発が始められたものと考えられる。第11層上面において県教委が検出している一連の遺構は，低湿地帯で展開された水田経営に伴うものであり，一般的な集落様相とは異にする可能性を考えなければならないかもしれない。

第10～15層に見る土壌の堆積は中島田遺跡の調査においても確認されているが，集落内

における人的活動が顕著な領域では堆積が見られず，集落の縁辺部もしくは人的活動が日常的ではない領域において見られることから，南島田においても同様に本格的な集落開発を実施する上でこの地域は不適地であったことが想定される[3]。

次に第８，９層であるが，県教委の調査では第１，２包含層として捉えているものであり，おおむね14～15世紀代の遺物包含層として理解でき，本調査においても異論のあるものではない。この土壌の堆積は，現在の鮎喰川両岸に広がる旧鮎喰川水系の低位氾濫原に見られることが現在までの周辺地域での調査で明確化している。ただ問題となるのは土壌の堆積過程であり，「旧鮎喰川水系の低位氾濫原の池部あるいは谷状地形に厚く泥炭地化が中世期以降に進行した結果の堆積」として指摘した経緯[4]があり，試掘ポイントNo.１，２に見られるような砂礫層直上での堆積状況また試掘ポイントNo.４～６のように第８，９層の堆積以前に周辺部より微高地上の高位に位置する地点での堆積が少量である状況はこのことを補強するものと考えられる。この土壌堆積は現在の鮎喰川沿岸地域にとどまらず，県教委中島田遺跡第５次調査地[5]においても部分的に見られることから広範囲にわたる低湿地帯特有の堆積層と考えられる。遺物包含層としての認識は必要であるが，中島田遺跡において見られるような遺物包含層とは性格を異にするものであろう。

また第１～７層は土壌の理化学反応現象に伴う酸化還元互層を示すことから水田耕作土と断定され，近世以降における数時期にわたる水田経営の痕跡を示すものである。

吉野川下流域においては13世紀後半～14世紀初頭，眉山北裾地域の北方に広がる広大な低湿地帯への開発は中島田遺跡の集落開発を典型とするような形態で実施された。それは低湿地帯に存在した比較的狭い範囲での良好な自然微高地が開発条件として求められ，周辺部の低湿地帯は集落開発には不適であったが，低位氾濫原での堆積土は水田土壌としては格好の条件を備えていたものと考えられる。これは南島田における堆積土層に一貫した水田経営の復原が可能であることからも立証できる。低湿地帯の開発に伴い小規模集落が点在する可能性は十分に考えられることであり，古地形の復原とともに中島田集落に次ぐ新たな集落発見を目的とした厳密な調査が必要とされるであろう。

註

(1) 徳島県教育委員会『中島田・南島田遺跡』1989年，徳島。

(2) (1)に同じ

(3) 徳島市教育委員会「中島田遺跡発掘調査概要－店舗建設工事に伴う発掘調査－」『徳島市埋蔵文化

財発掘調査概要』1994年，徳島。

調査では調査地の東端部で遺構検出ベースが黄色シルトから緑灰色粘土質シルトへ変化し，堆積レベルが低下する現象が見られる。中島田遺跡における遺構検出は通常，黄色シルト層上面に求められ，その上位には中島田遺跡特有の炭化物を含んだ遺物包含層が堆積する。検出ベース層の変容すなわち黄色シルトの堆積範囲が集落領域にほぼ合致するという考え方に基づくものである。

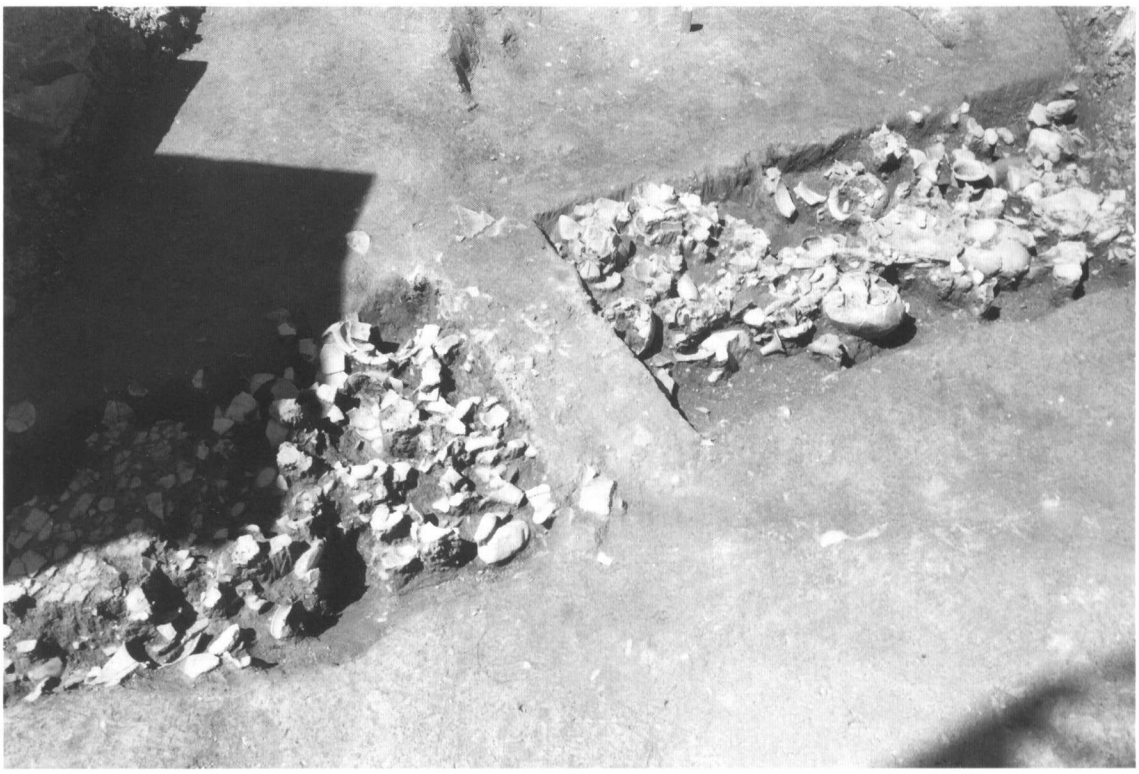
(4) 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会『矢野遺跡発掘調査概要』1991年，徳島。

(5) 県教委中島田遺跡第5次調査現地での見聞による。

写　真　図　版

Ⅰ　矢野遺跡発掘調査概要

－変電設備増設工事に伴う発掘調査－



溝SD01遺物出土状況　　南より

溝SD01遺物出土状況　　南より

溝SD01遺物出土状況　　北より

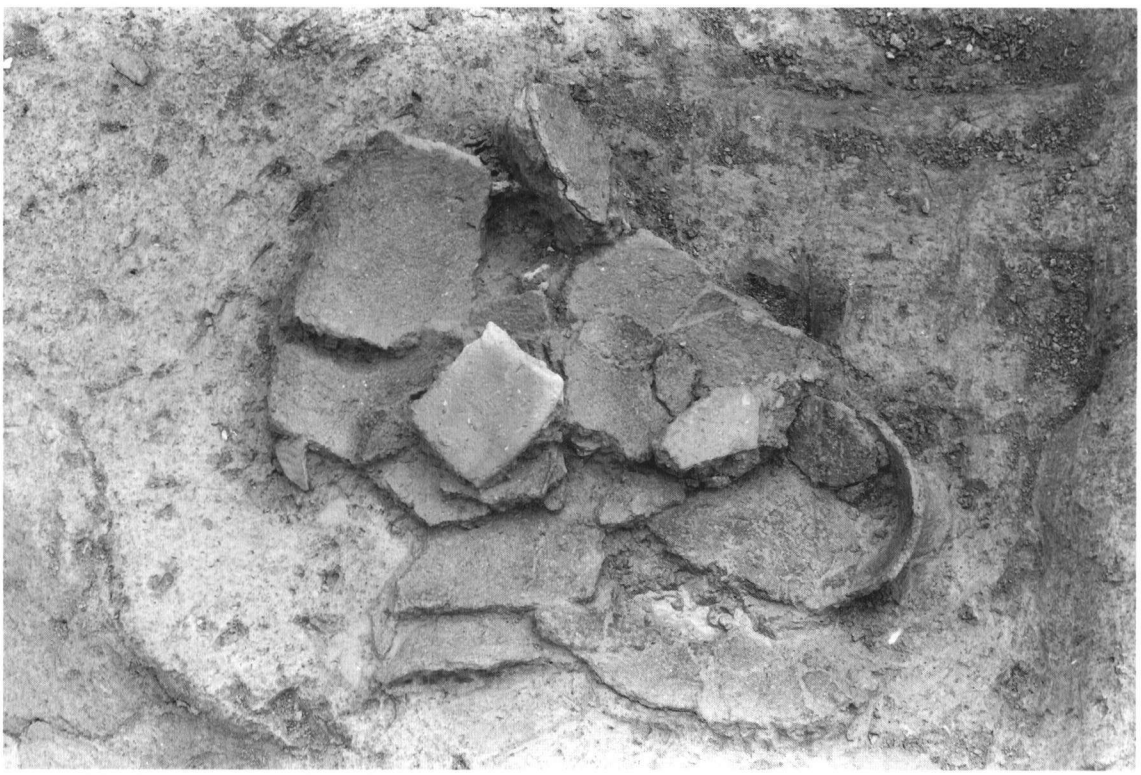
溝SD01壺(54，56)ほか出土状況　　北西より

溝SD01遺物出土状況　　北西より

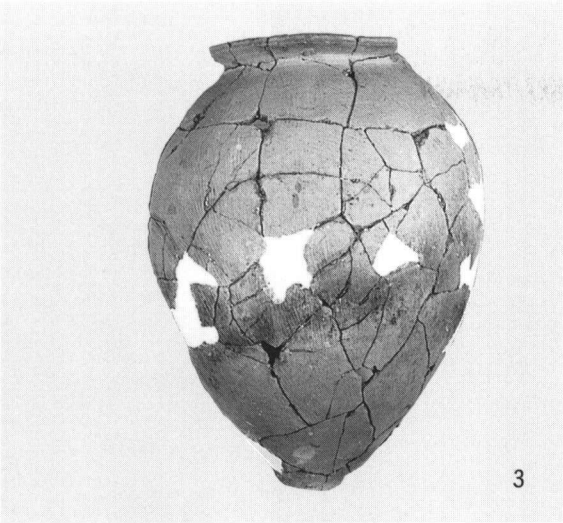
溝SD01甕(５，８)，高坏(35)，鉢(52)ほか出土状況　　南より

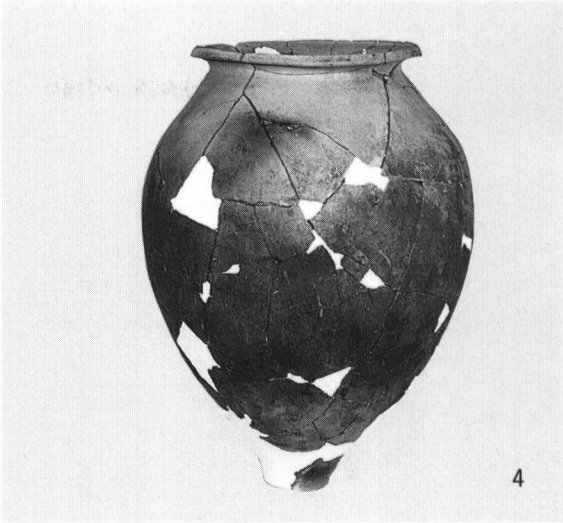
図版4

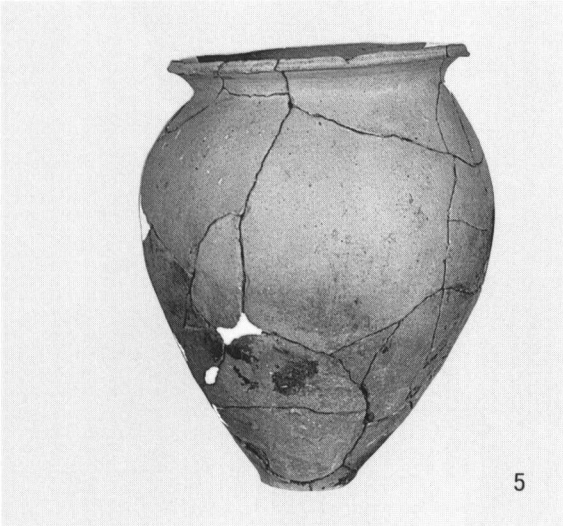
不明遺構SZ01および溝SD01　　南東より



土壙SK01紀伊型甕(2)出土状況　　東より

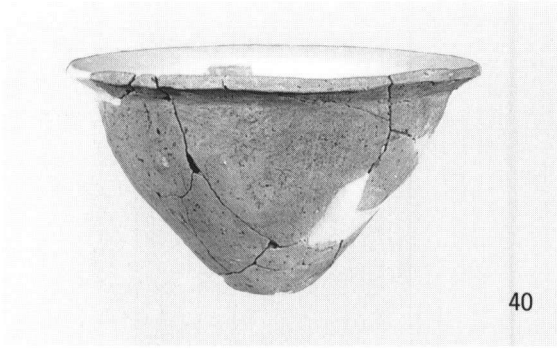


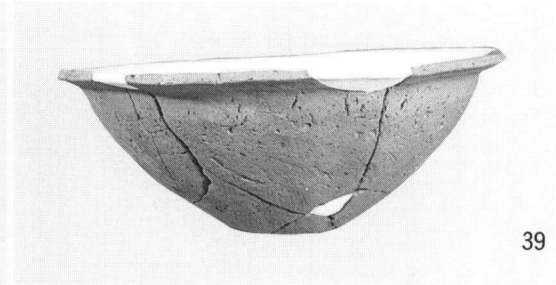


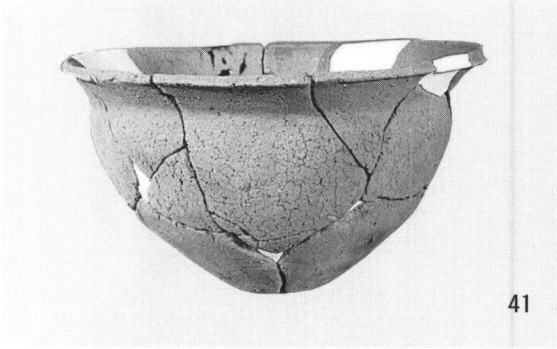


溝SD01出土遺物（甕）

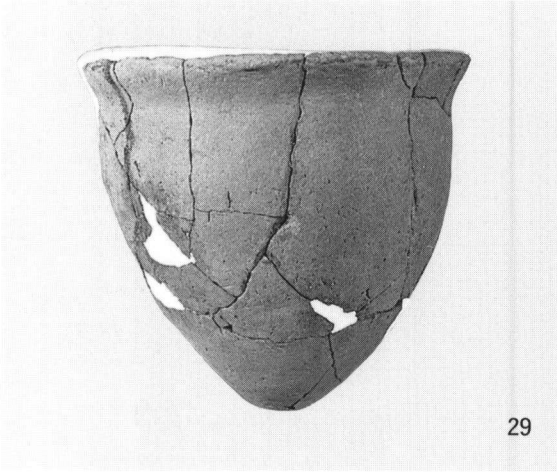
図版6

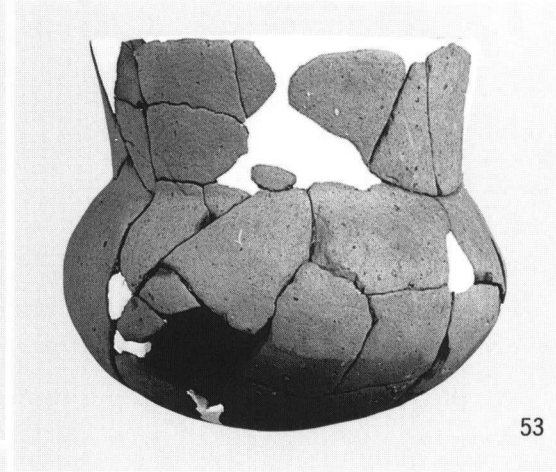

40

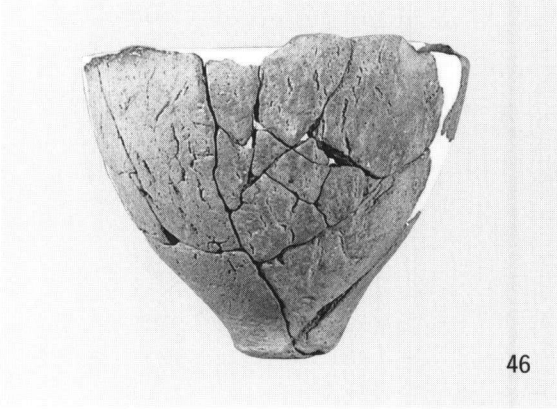

39

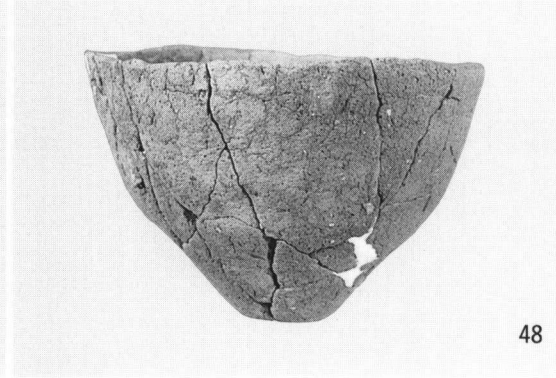

41

52

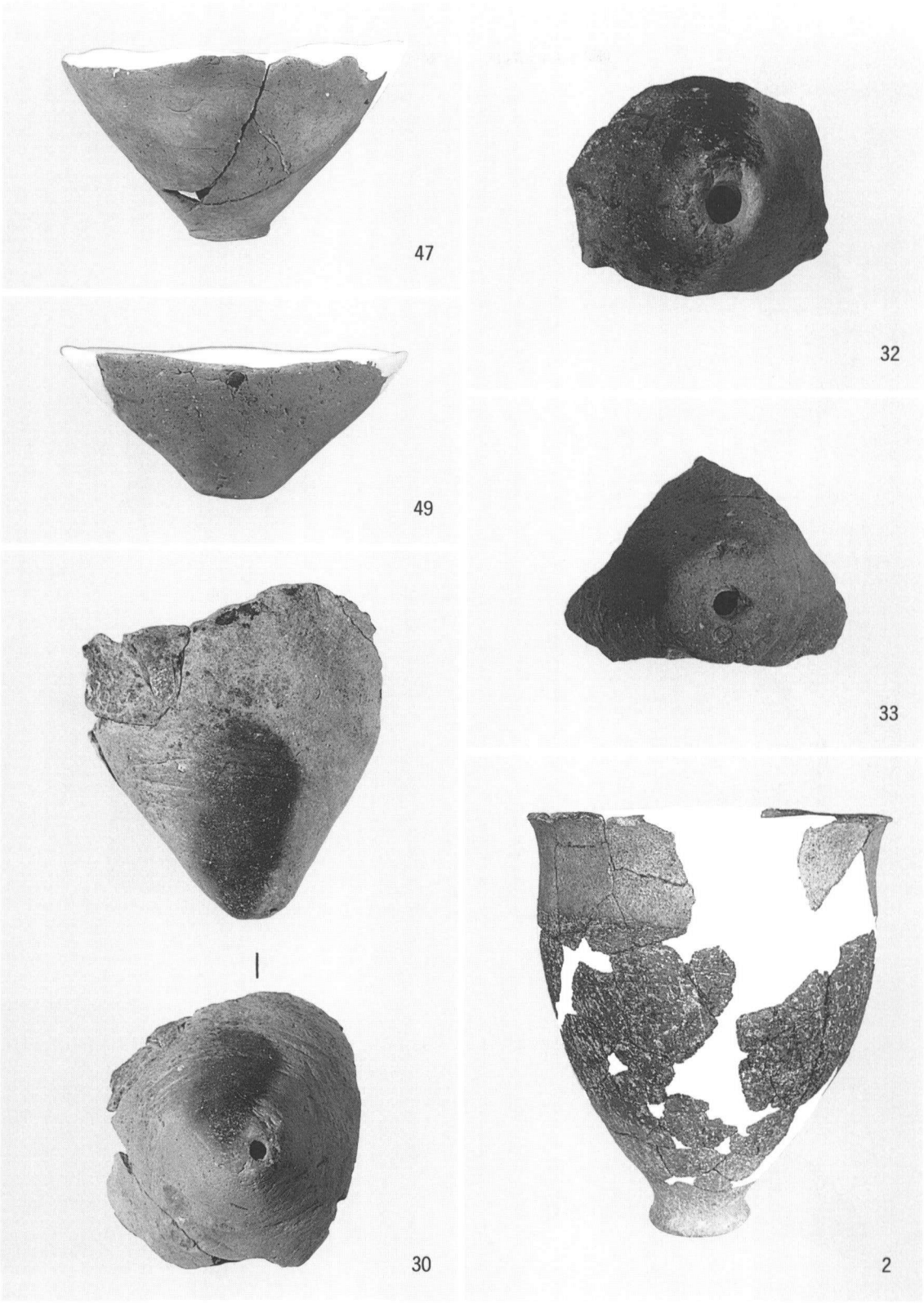

29


53

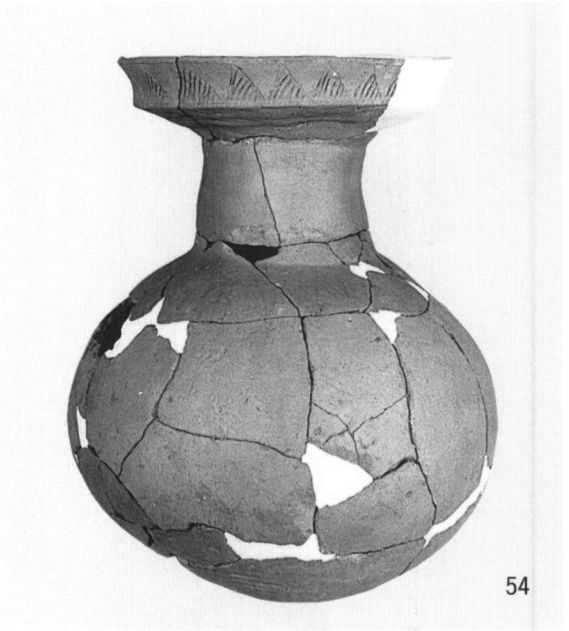

46


48

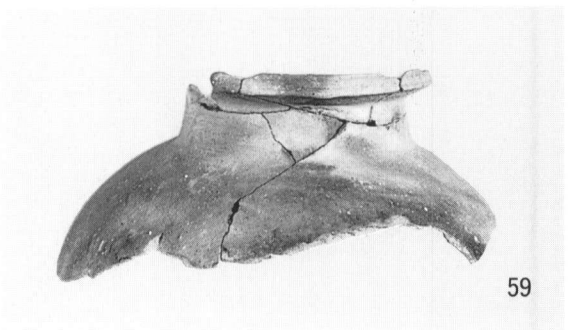
溝SD01出土遺物（鉢）

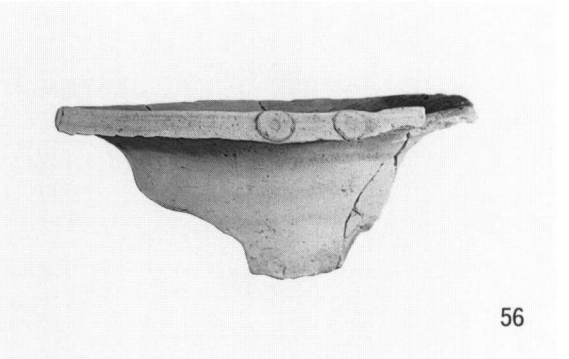


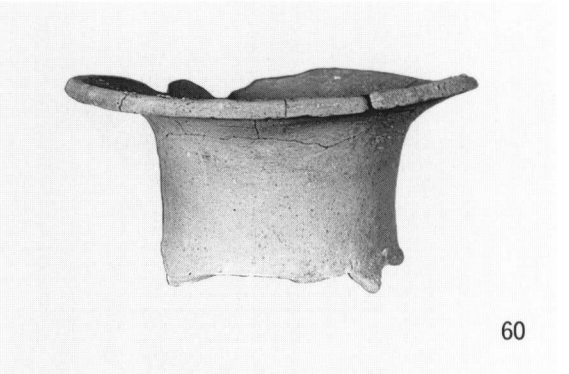
溝SD01出土遺物（鉢，底部穿孔土器，甕）


54

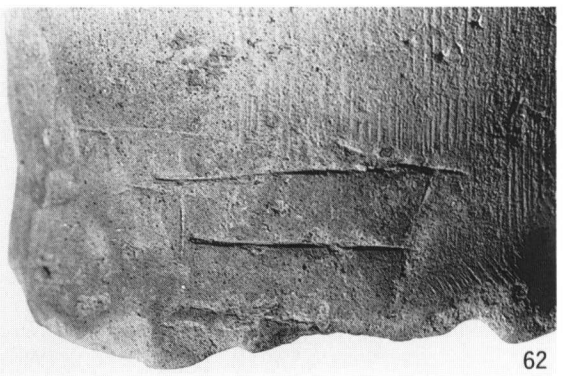
55


59


56


60

62


62

溝SD01出土遺物（壺）

竪穴住居跡SA01　　北西より

竪穴住居跡SA01内炉跡上遺物出土状況　　南より

図版10

竪穴住居跡SA01甕(78，79)，鉢(130)ほか出土状況　　南より

竪穴住居跡SA01鉢(109)，高坏(140)ほか出土状況　　西より

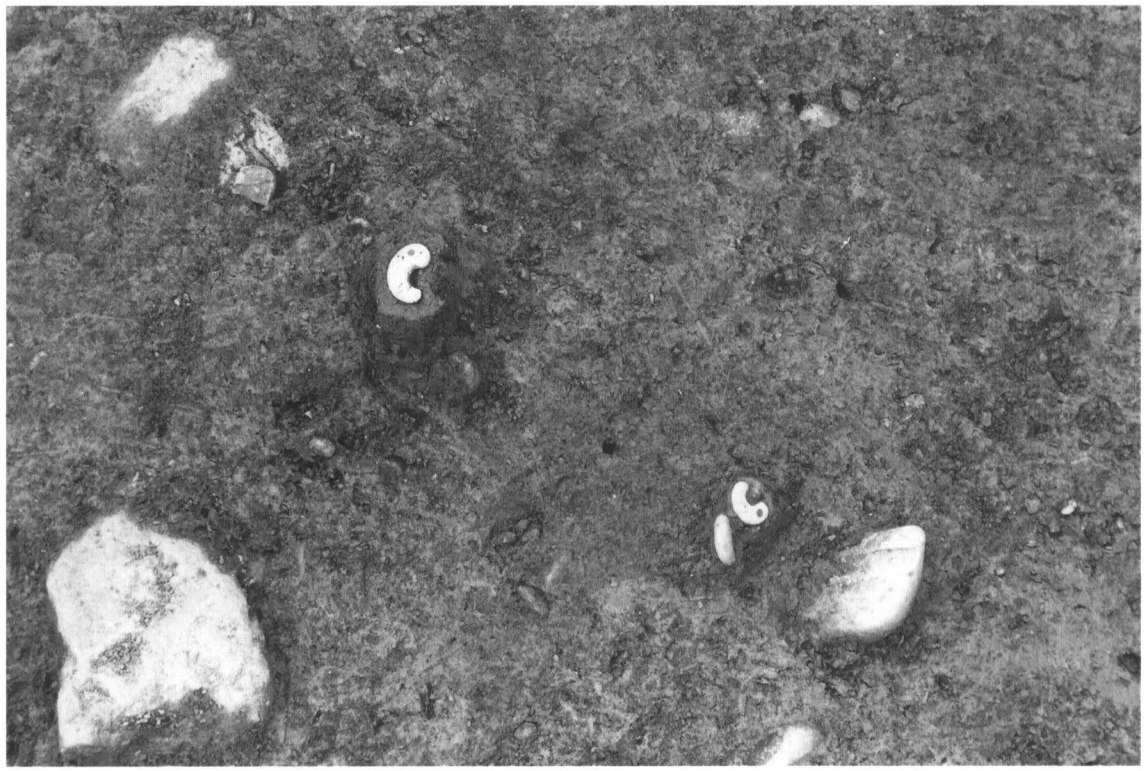
竪穴住居跡SA01鉢(115, 129)出土状況　　南東より

竪穴住居跡SA01打製石庖丁出土状況　　東より

図版12

竪穴住居跡SA02，03　　北西より

竪穴住居跡SA02，03　　南東より



竪穴住居跡SA02蛇紋岩製勾玉出土状況　　東より

竪穴住居跡SA02蛇紋岩製勾玉出土状況　　北より

竪穴住居跡SA02炭化材検出状況　　南より

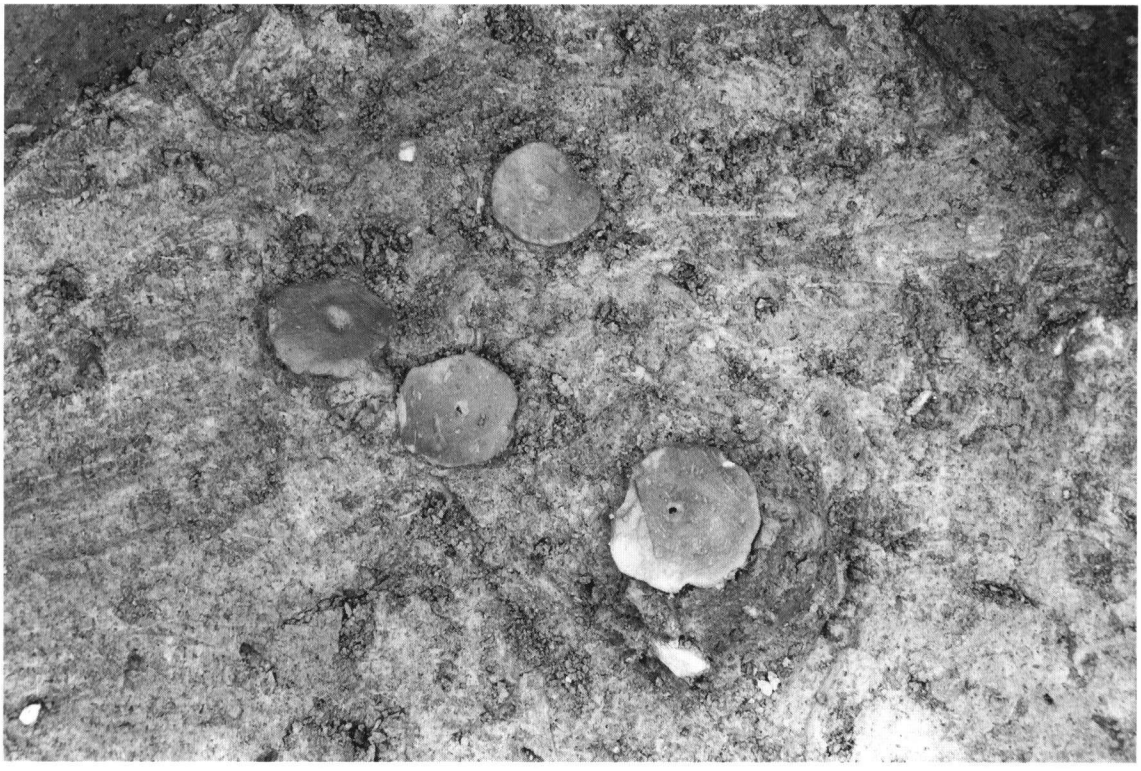
竪穴住居跡SA03鉢出土状況　　南より

竪穴住居跡SA04　　西より

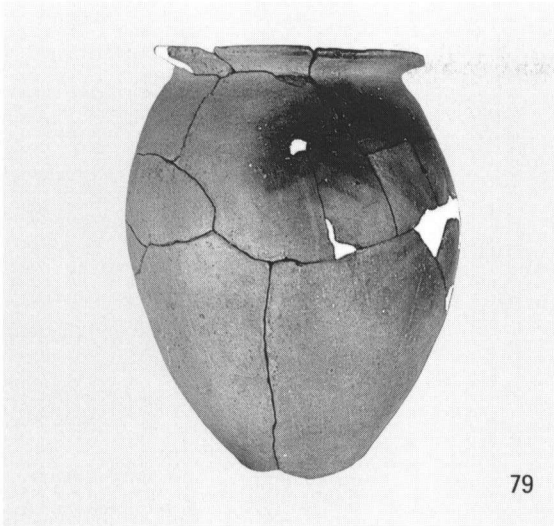
竪穴住居跡SA04　　西より

図版16

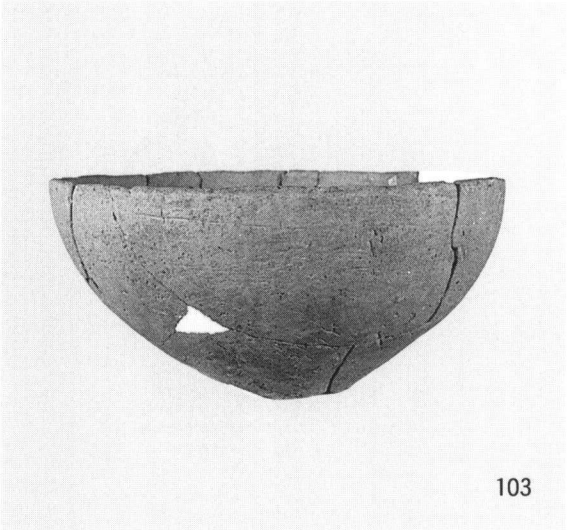
竪穴住居跡SA04甕出土状況　　南東より

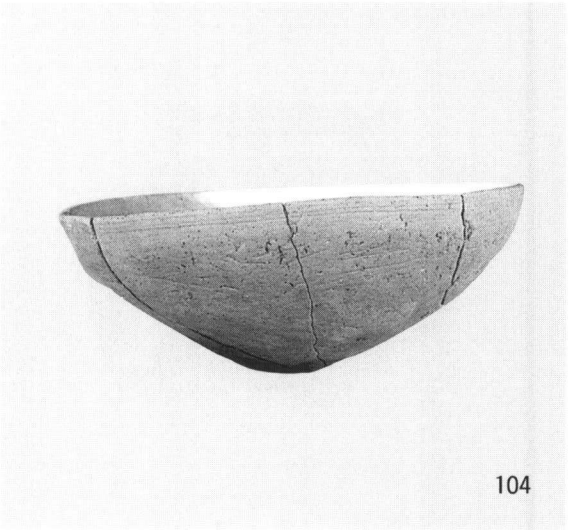


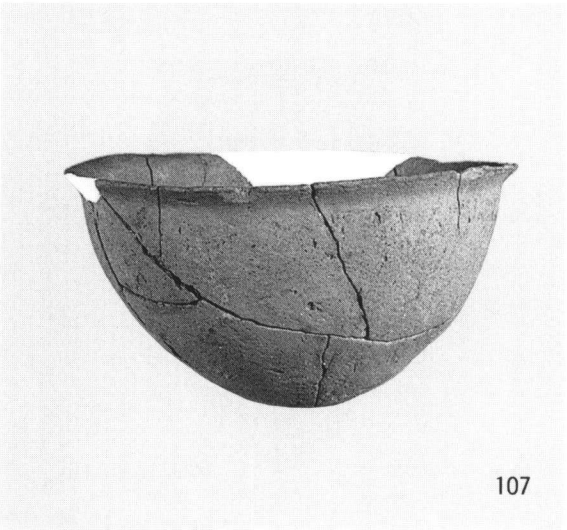
竪穴住居跡SA04土製紡錘車出土状況　　北東より



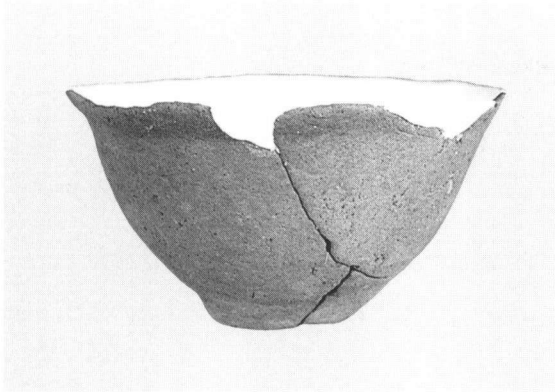
竪穴住居跡SA01出土遺物(甕)

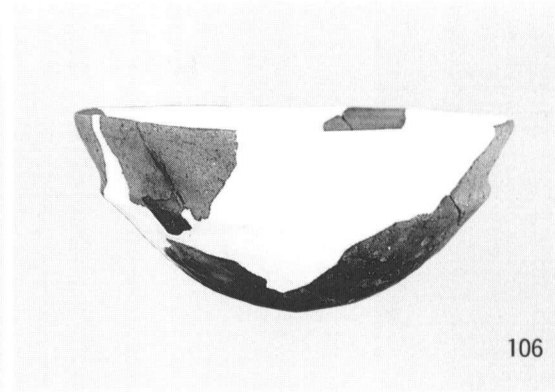


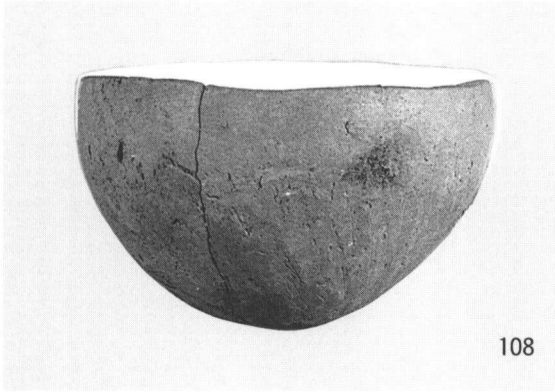


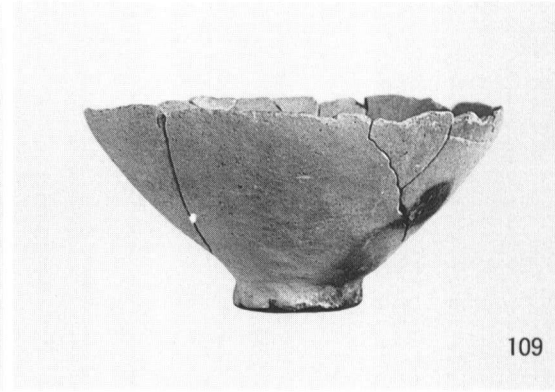


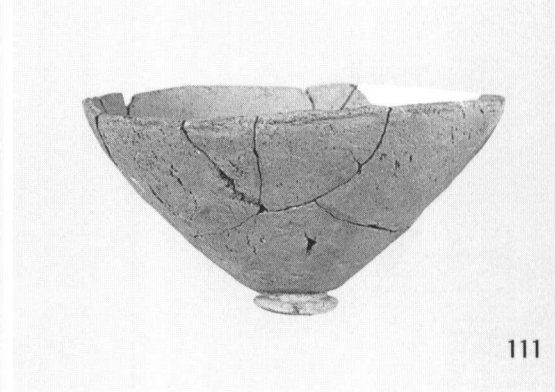
竪穴住居跡SA01出土遺物（甕，鉢）

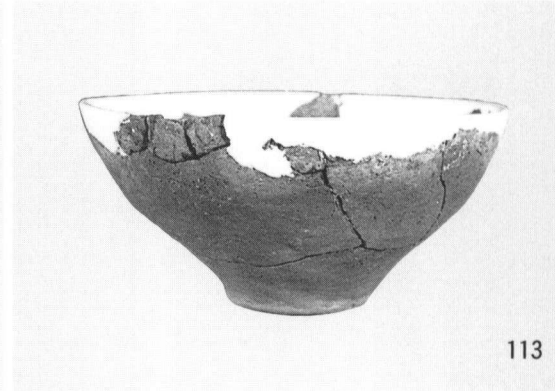




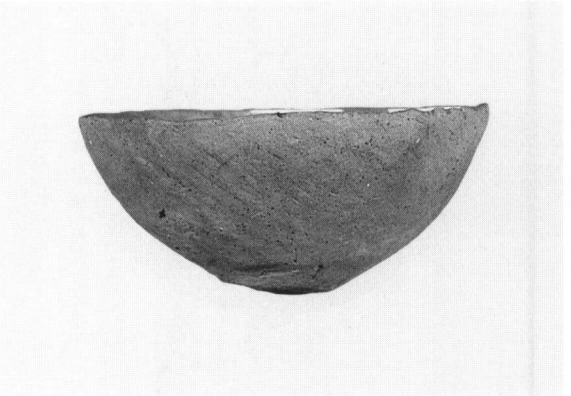


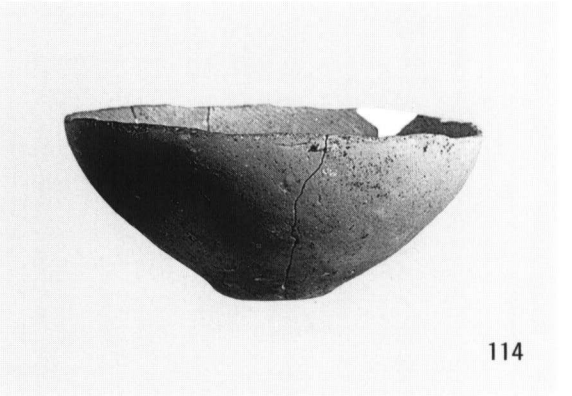




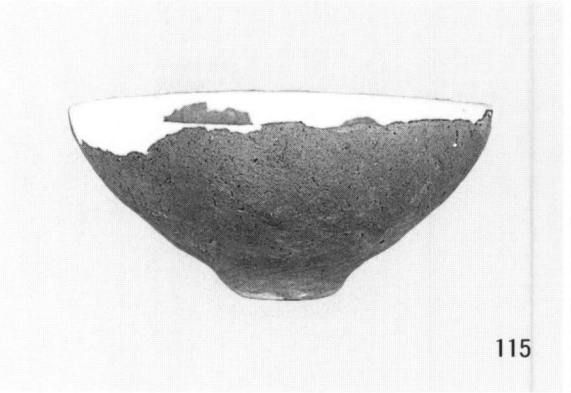


竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）

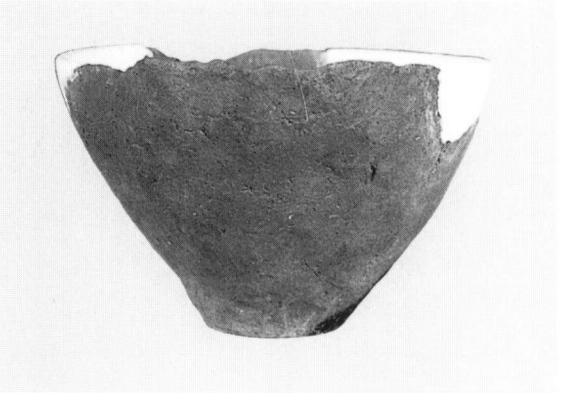


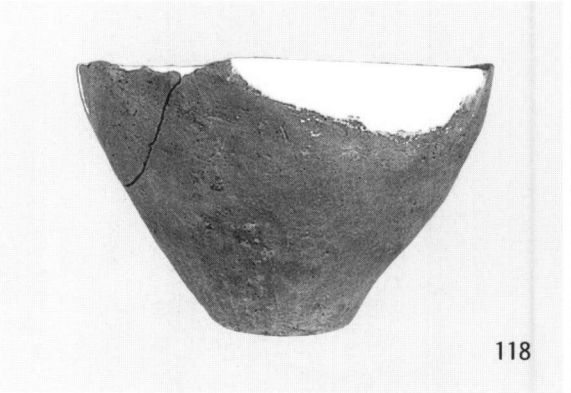


114

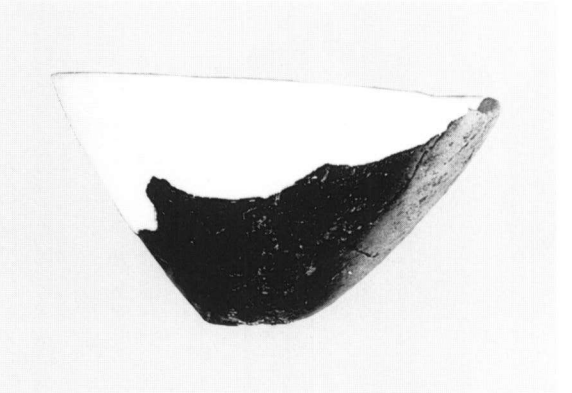


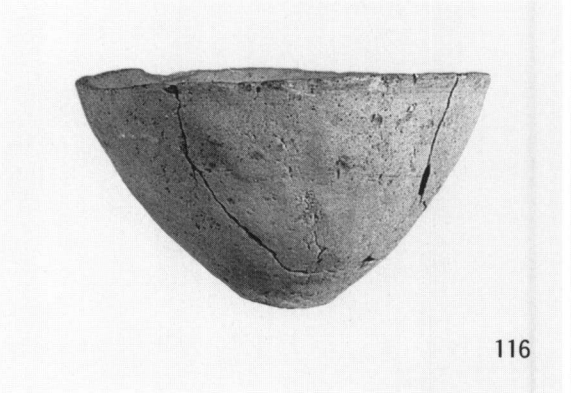
115





118

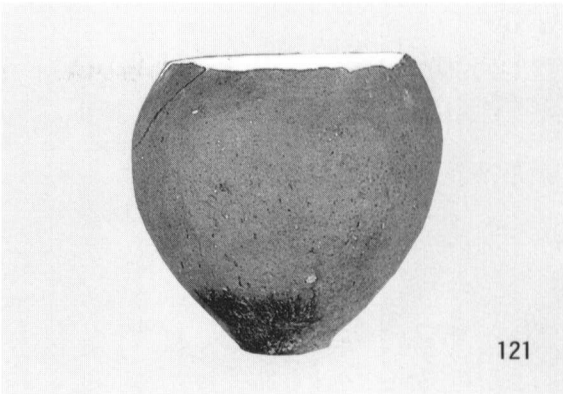


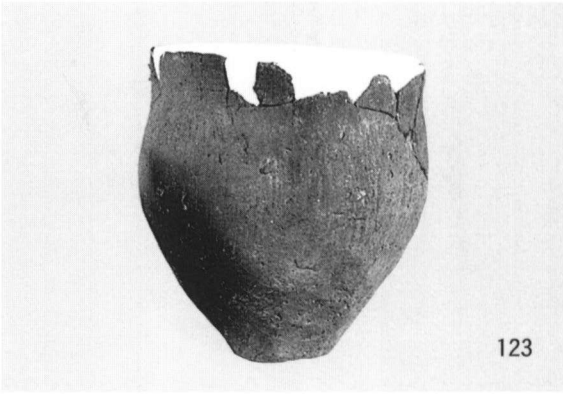


116

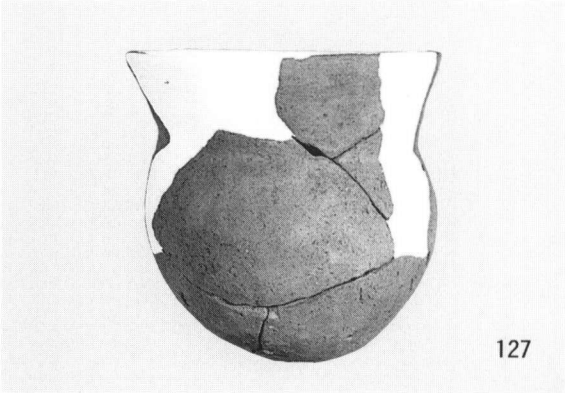
119

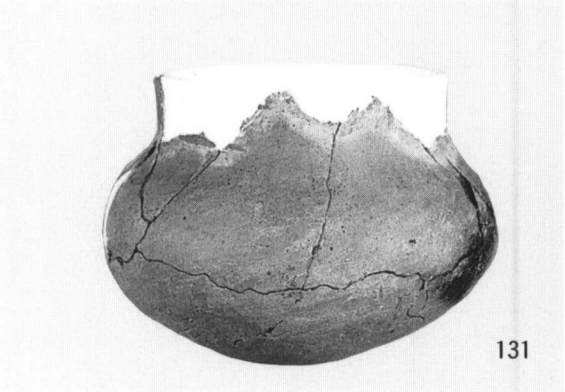
竪穴住居跡SA01出土遺物(鉢)



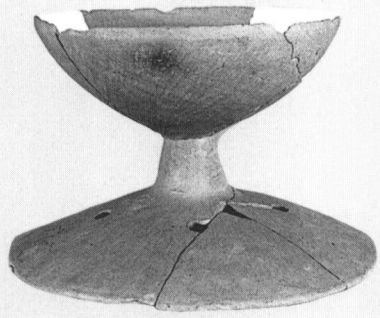


竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）

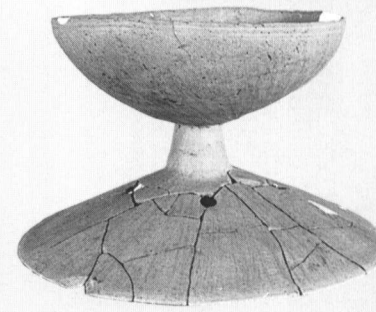




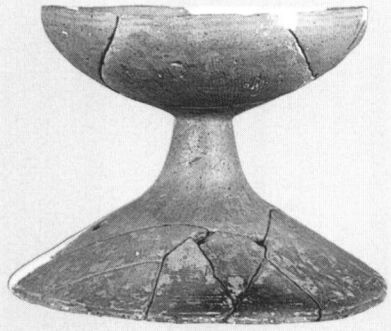
竪穴住居跡SA01出土遺物（鉢）



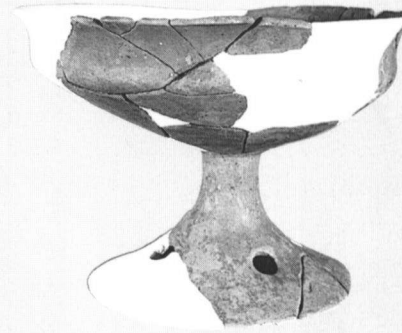
133



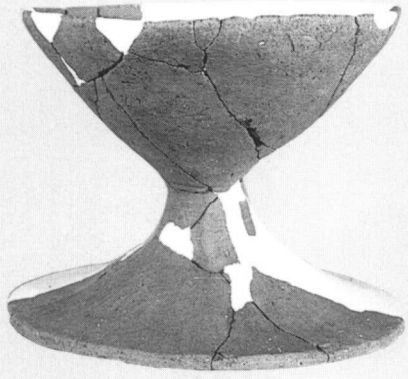
134



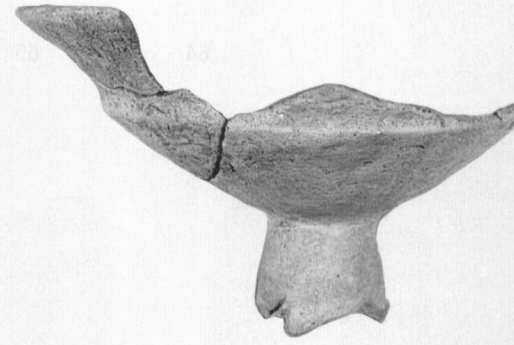
135



139

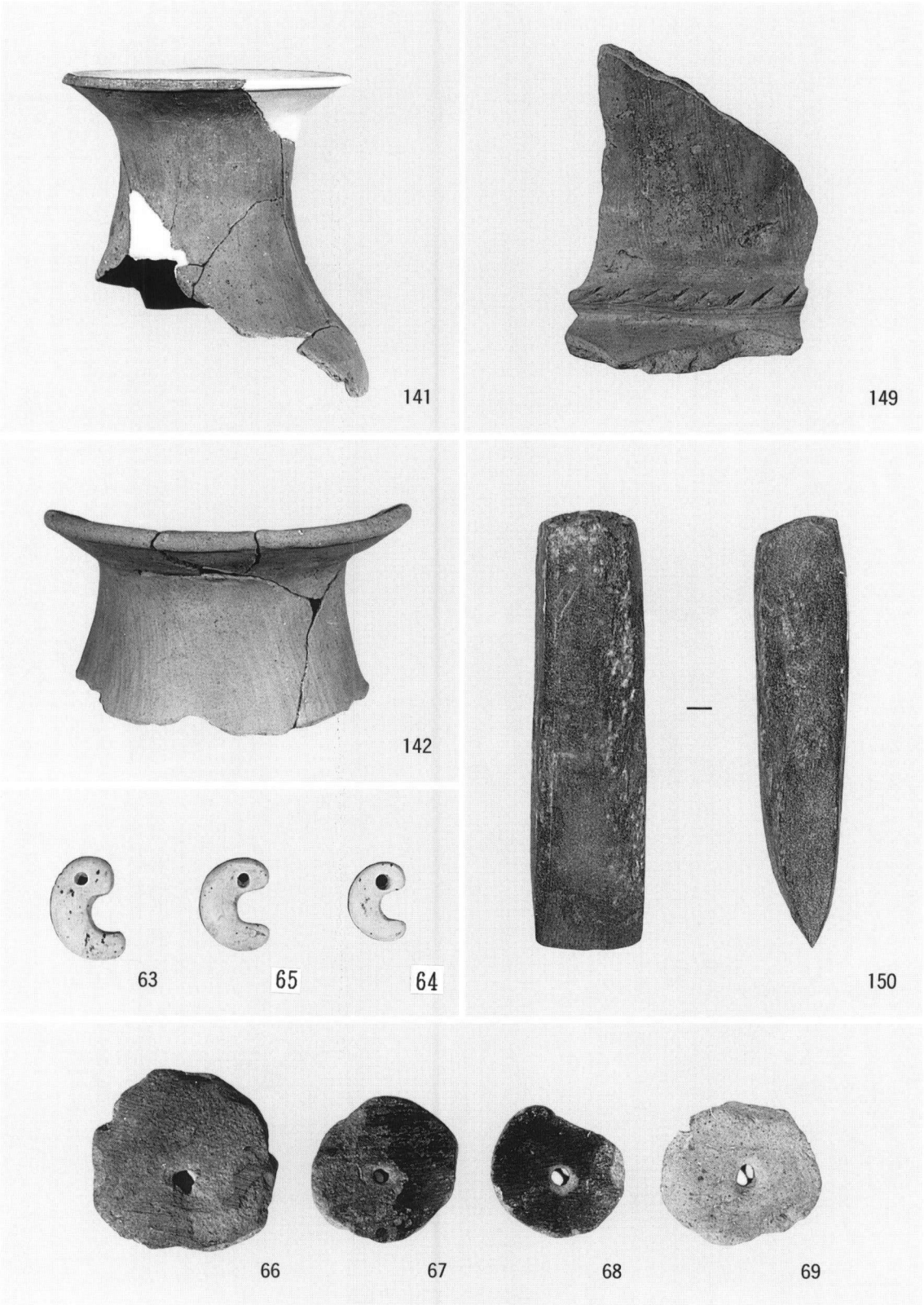


136



138

竪穴住居跡SA01出土遺物(高坏)



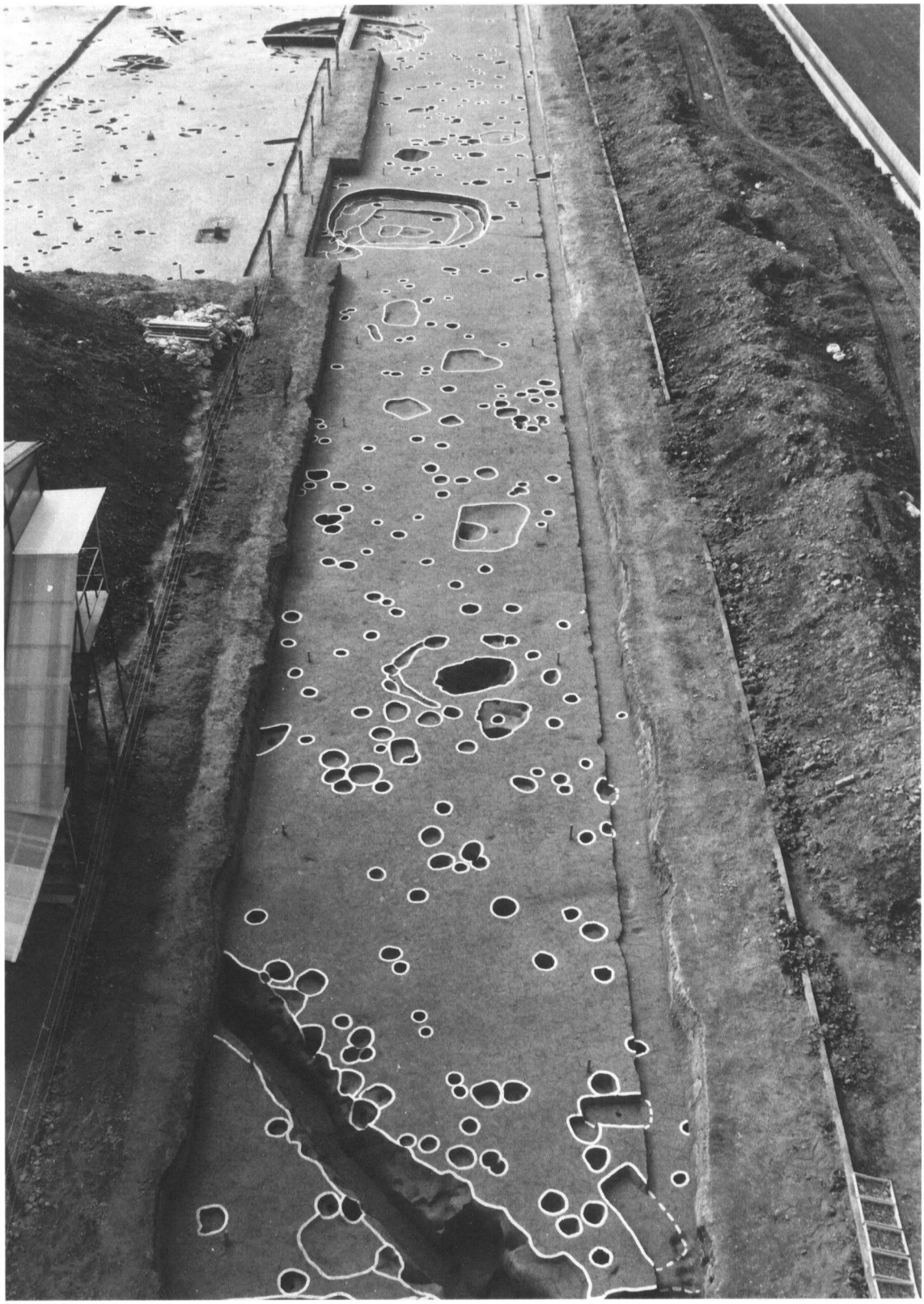
竪穴住居跡SA01，02，04出土遺物
（141，142，149，150：SA01　63～65：SA02　66～69：SA04）

写　真　図　版

II　名東遺跡発掘調査概要

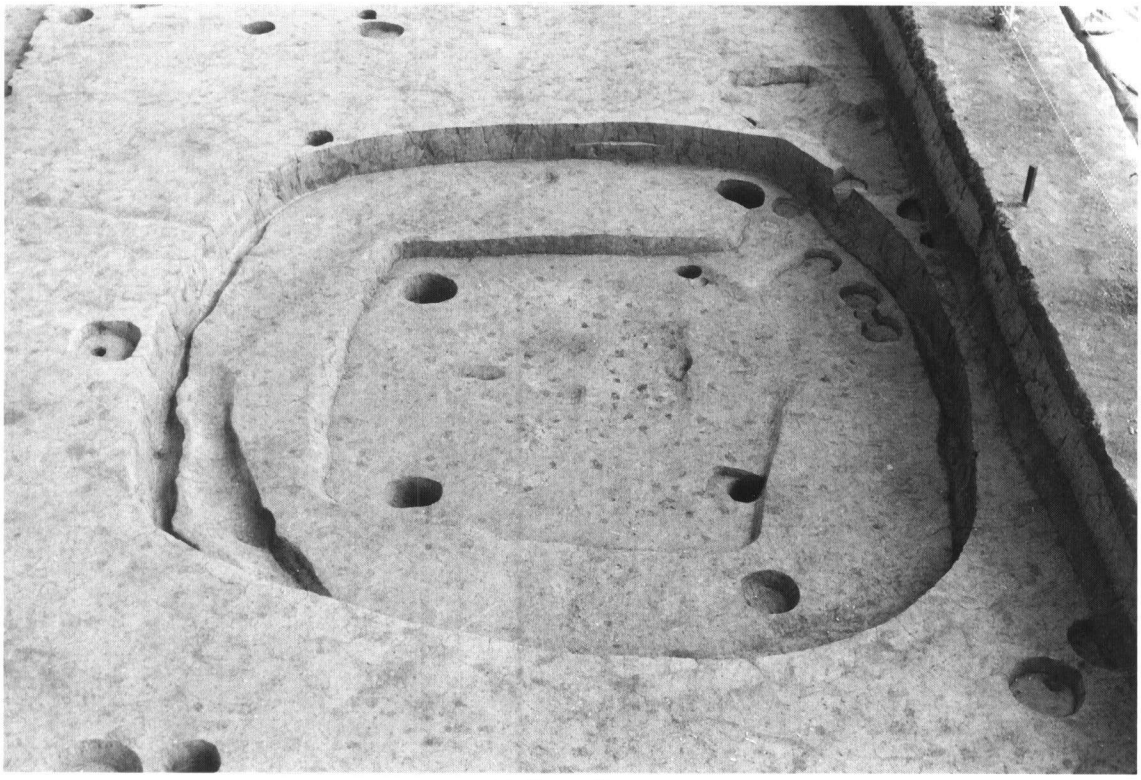
－住宅開発工事に伴う発掘調査－

図版1

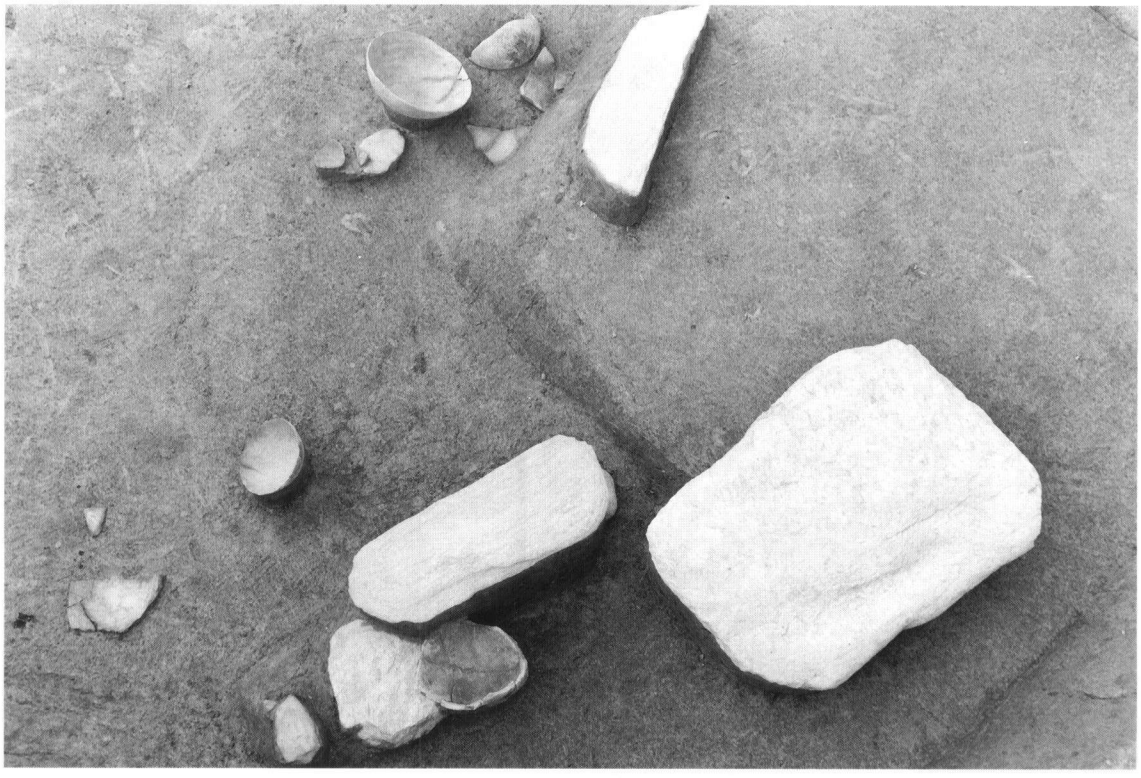


調査地全景　　東より

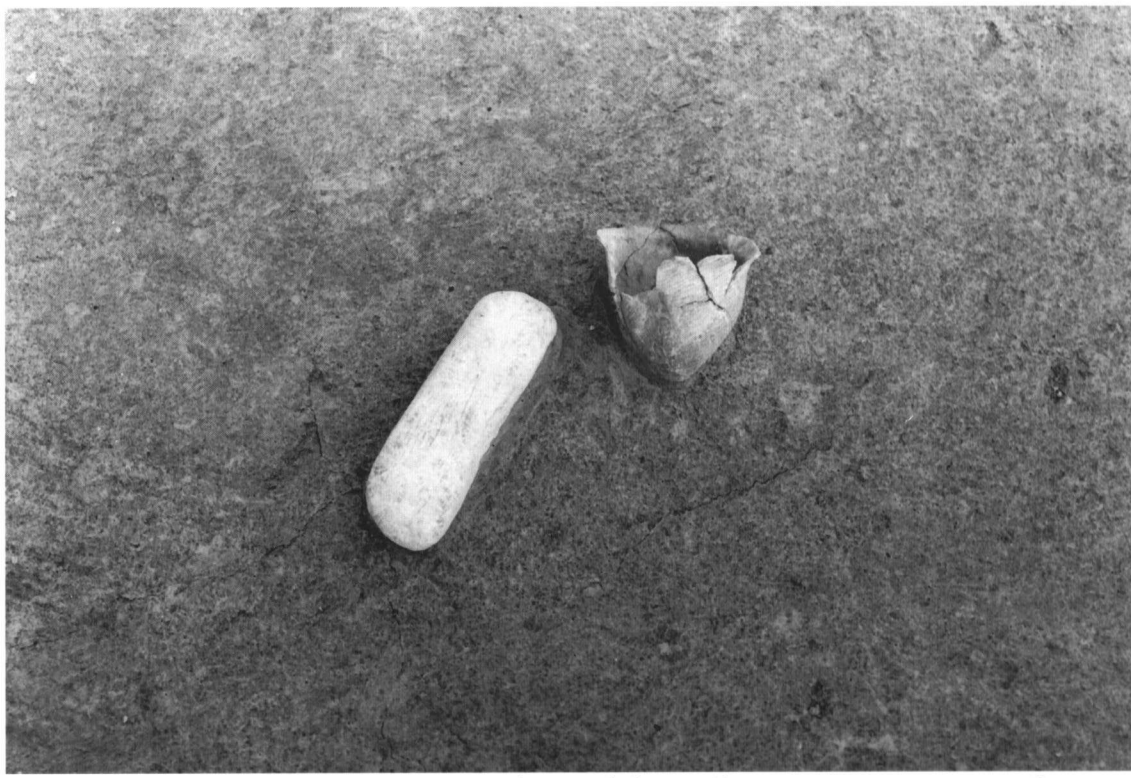
図版2



竪穴住居跡SA01　　西より



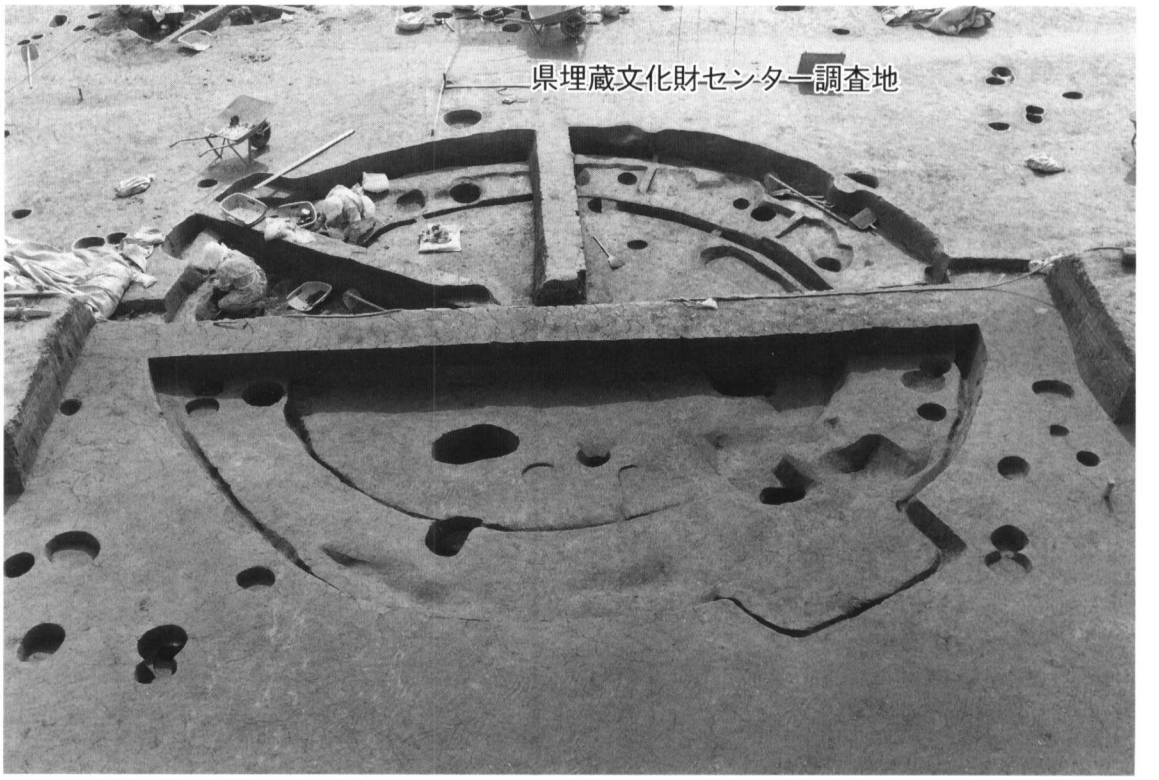
竪穴住居跡SA01遺物出土状況　　南より



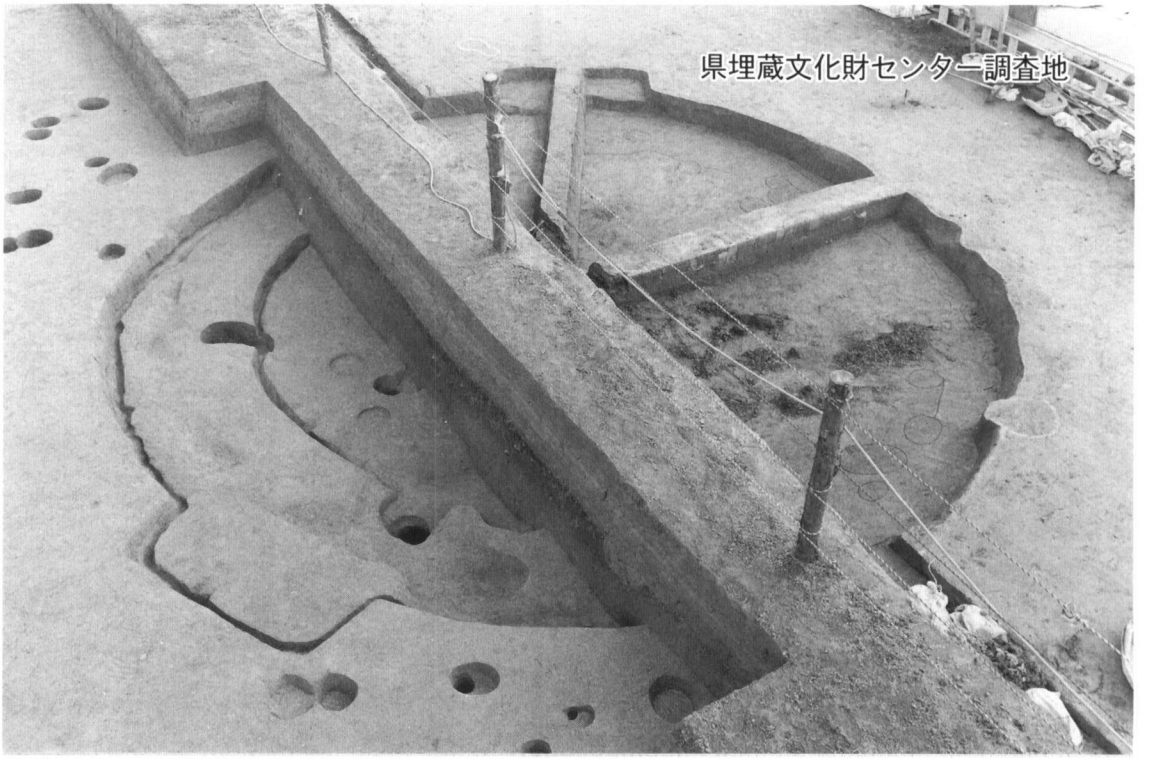
竪穴住居跡SA01遺物出土状況　　南より

竪穴住居跡SA01炉跡検出状況　　東より

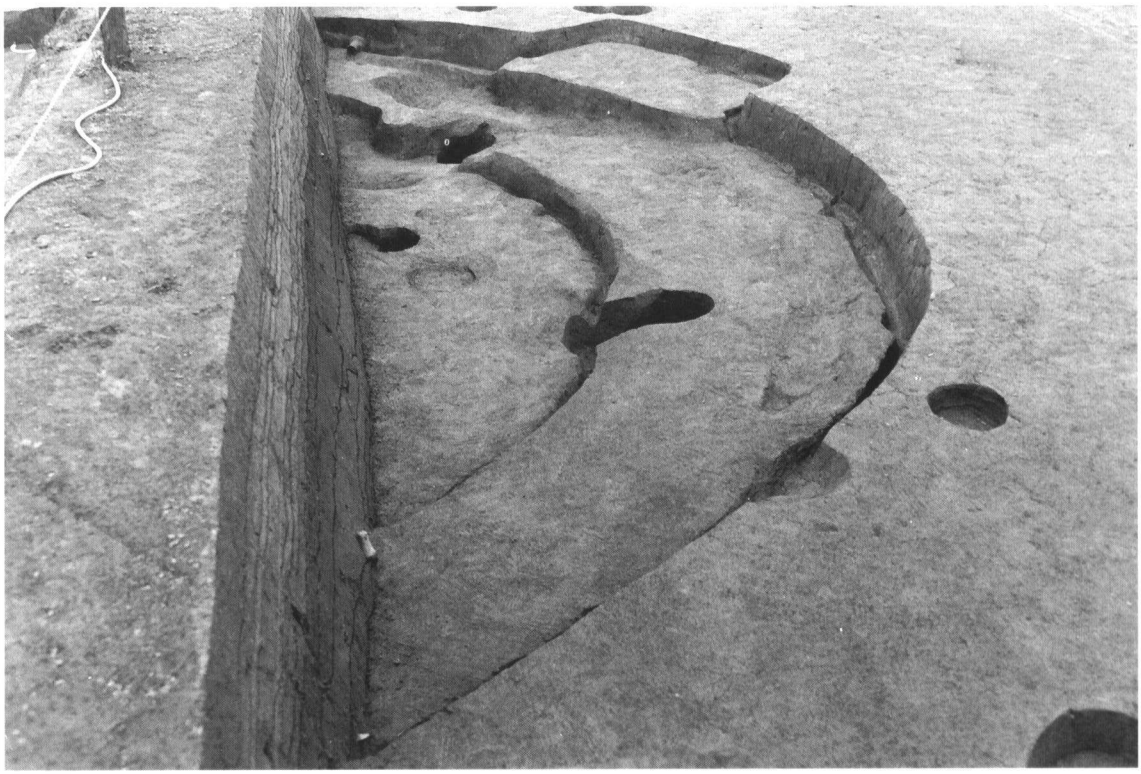
図版4



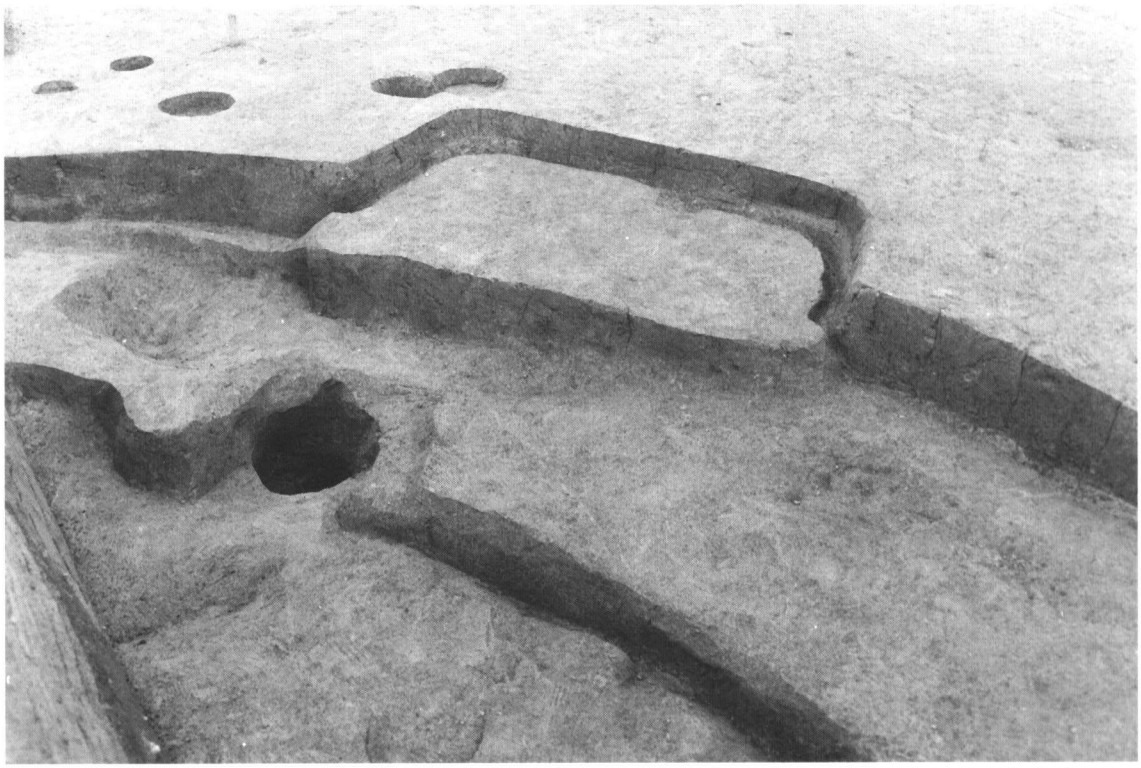
竪穴住居跡SA02　　北より



竪穴住居跡SA02　　北西より

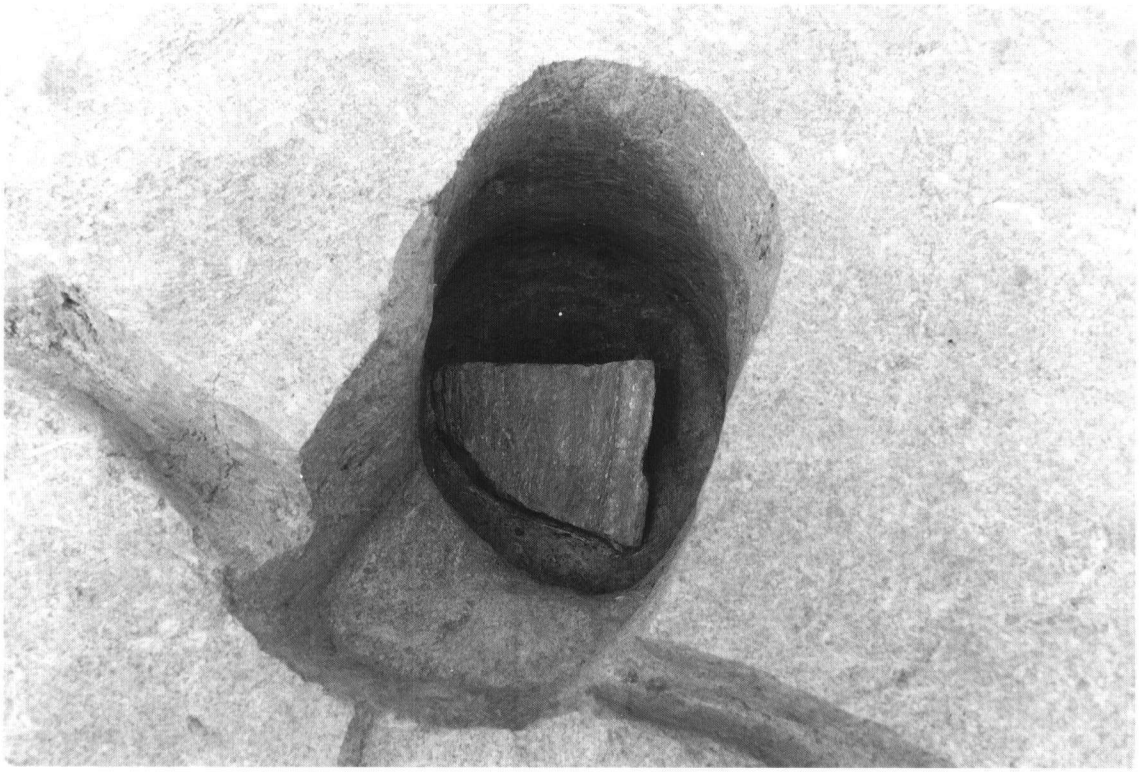


竪穴住居跡SA02　　東より

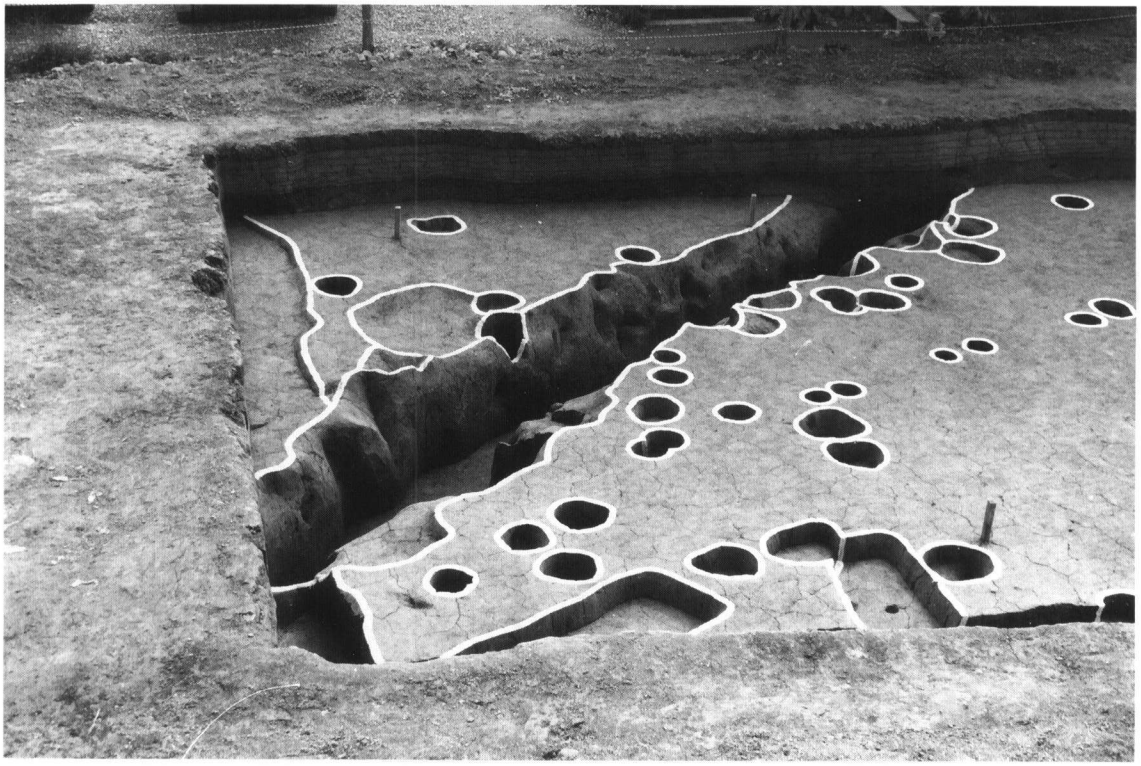


竪穴住居跡SA02張出部　　南東より

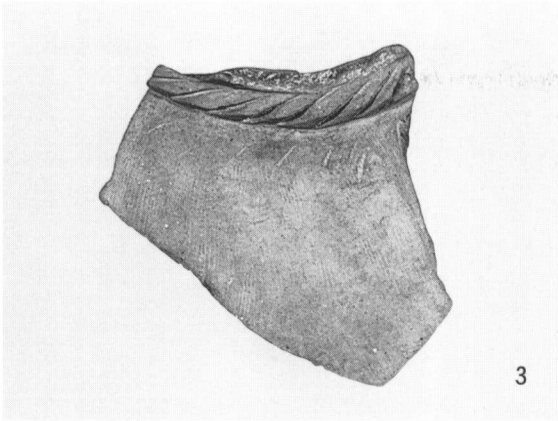
図版6

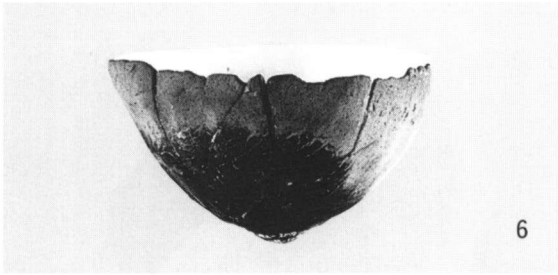


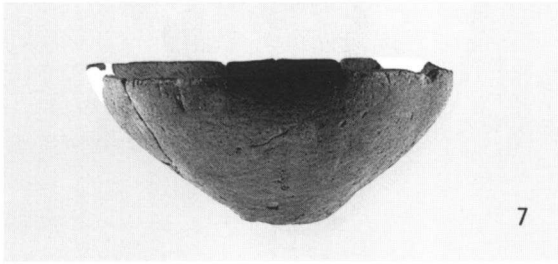
竪穴住居跡SA02内SP01　　南より

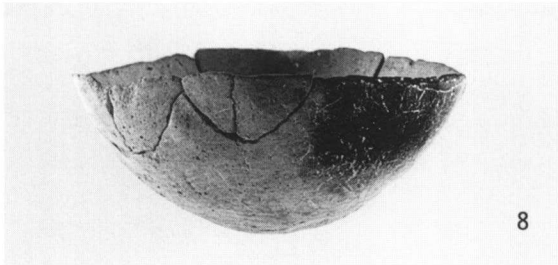


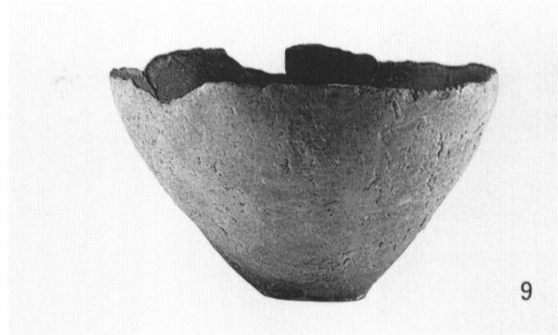
溝SD01　　北より

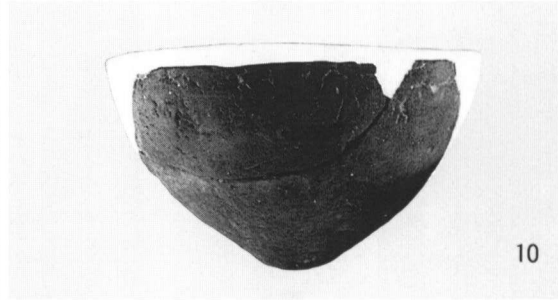


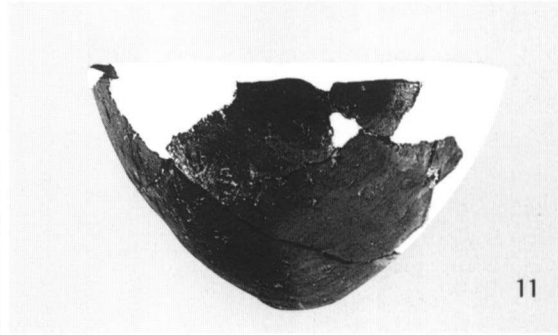


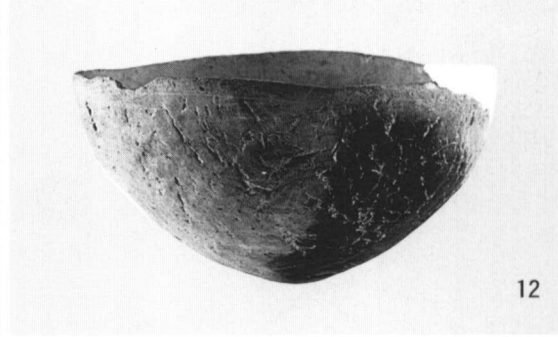






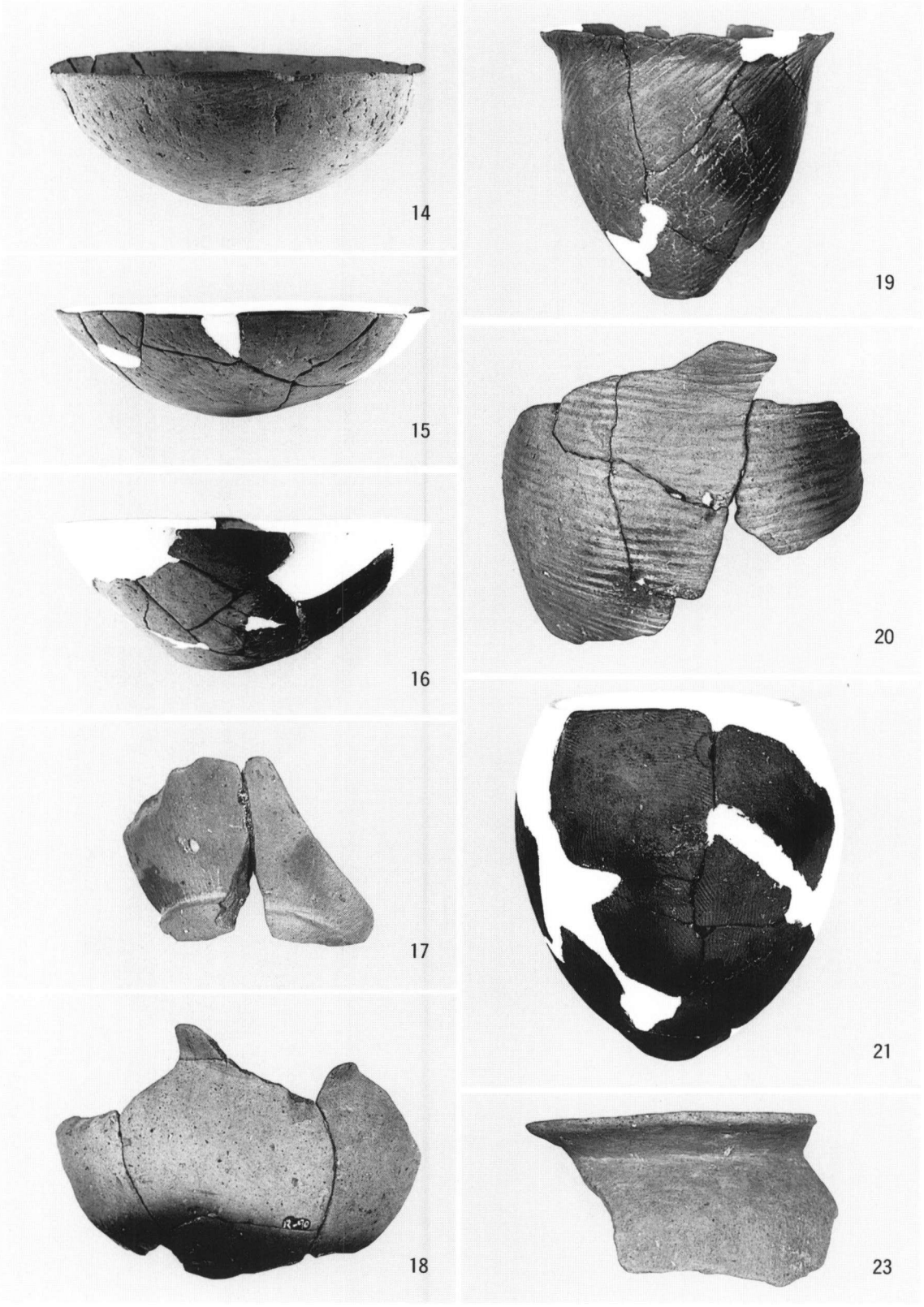




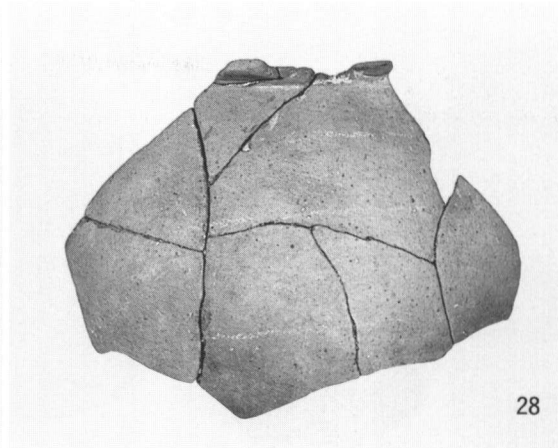


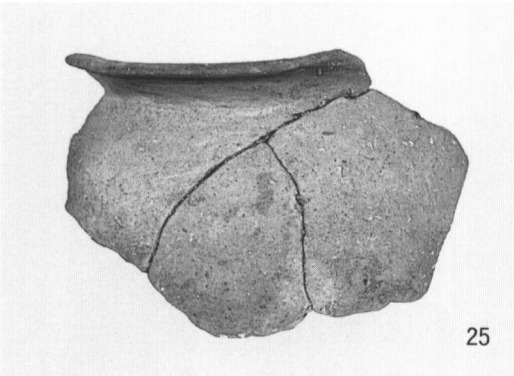
竪穴住居跡SA01出土遺物

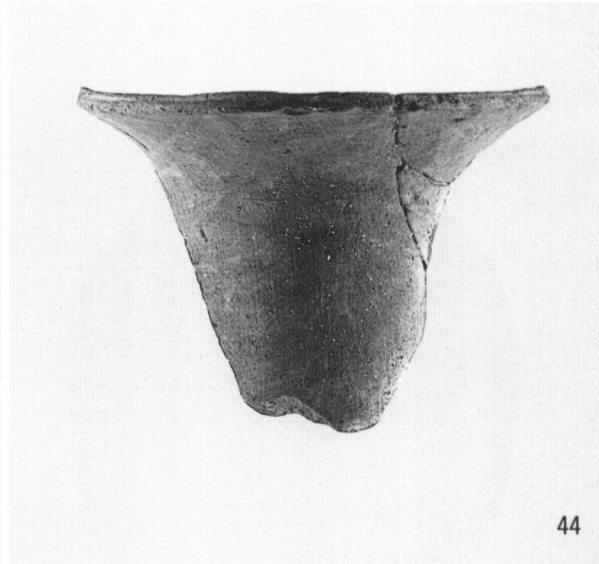
図版8

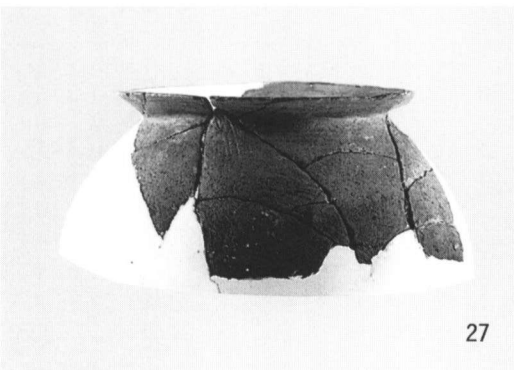


竪穴住居跡SA01出土遺物

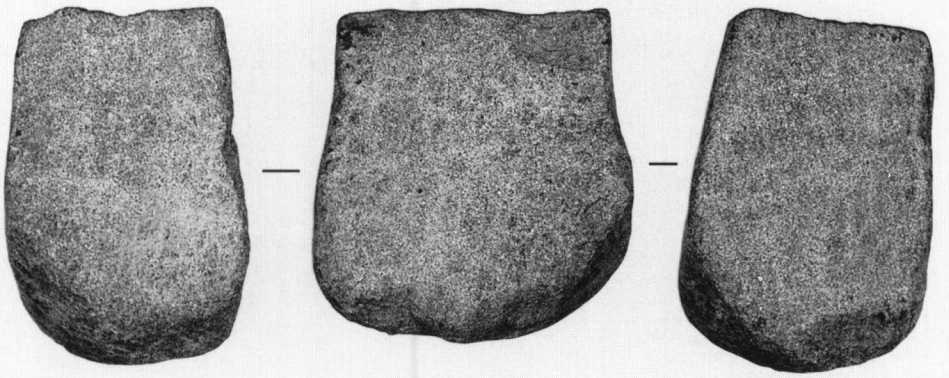






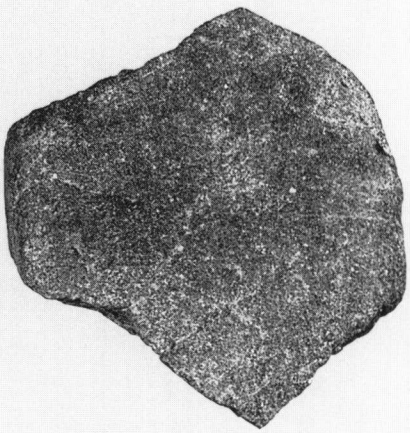


竪穴住居跡SA01(24～28), SA02(44, 45)出土遺物

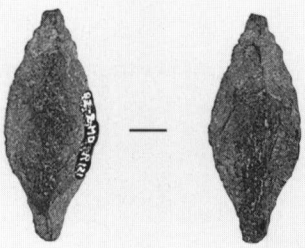


30

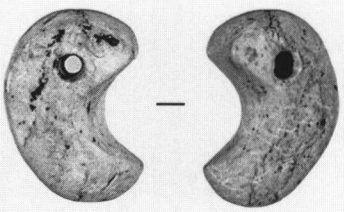
31



32

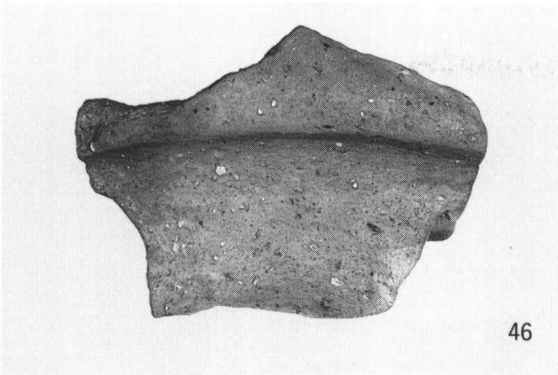


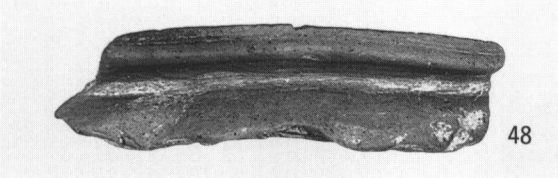
79

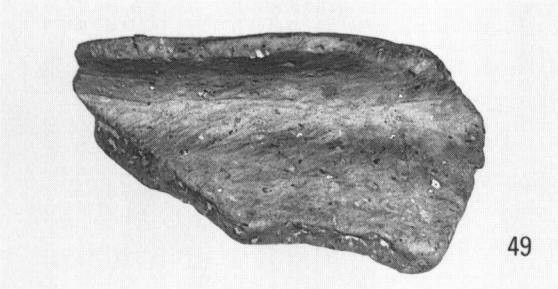


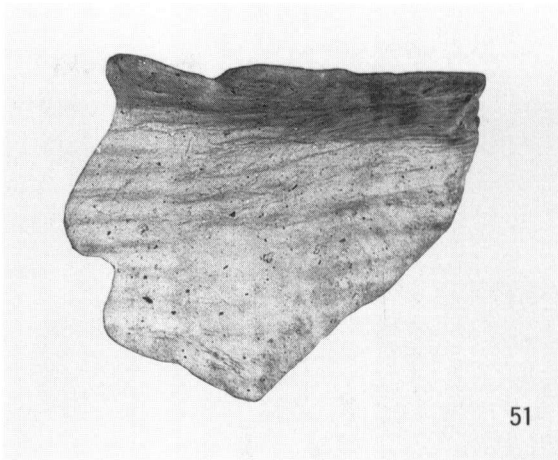
80

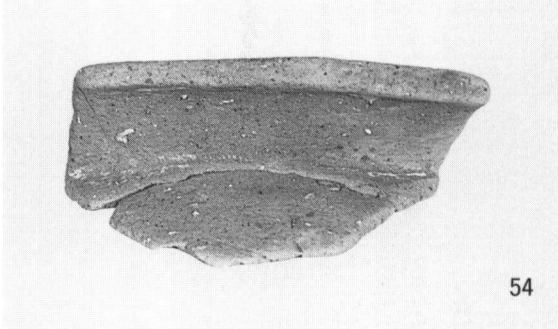
竪穴住居跡SA01出土遺物

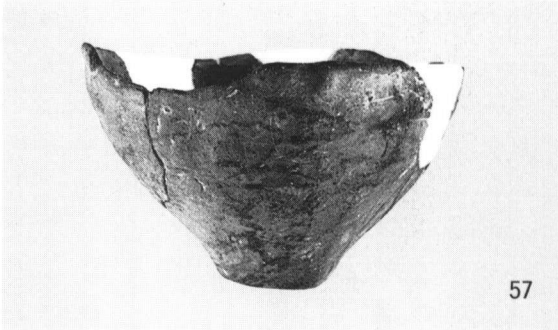


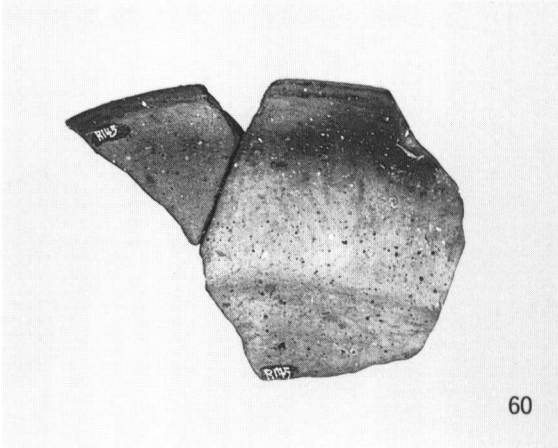






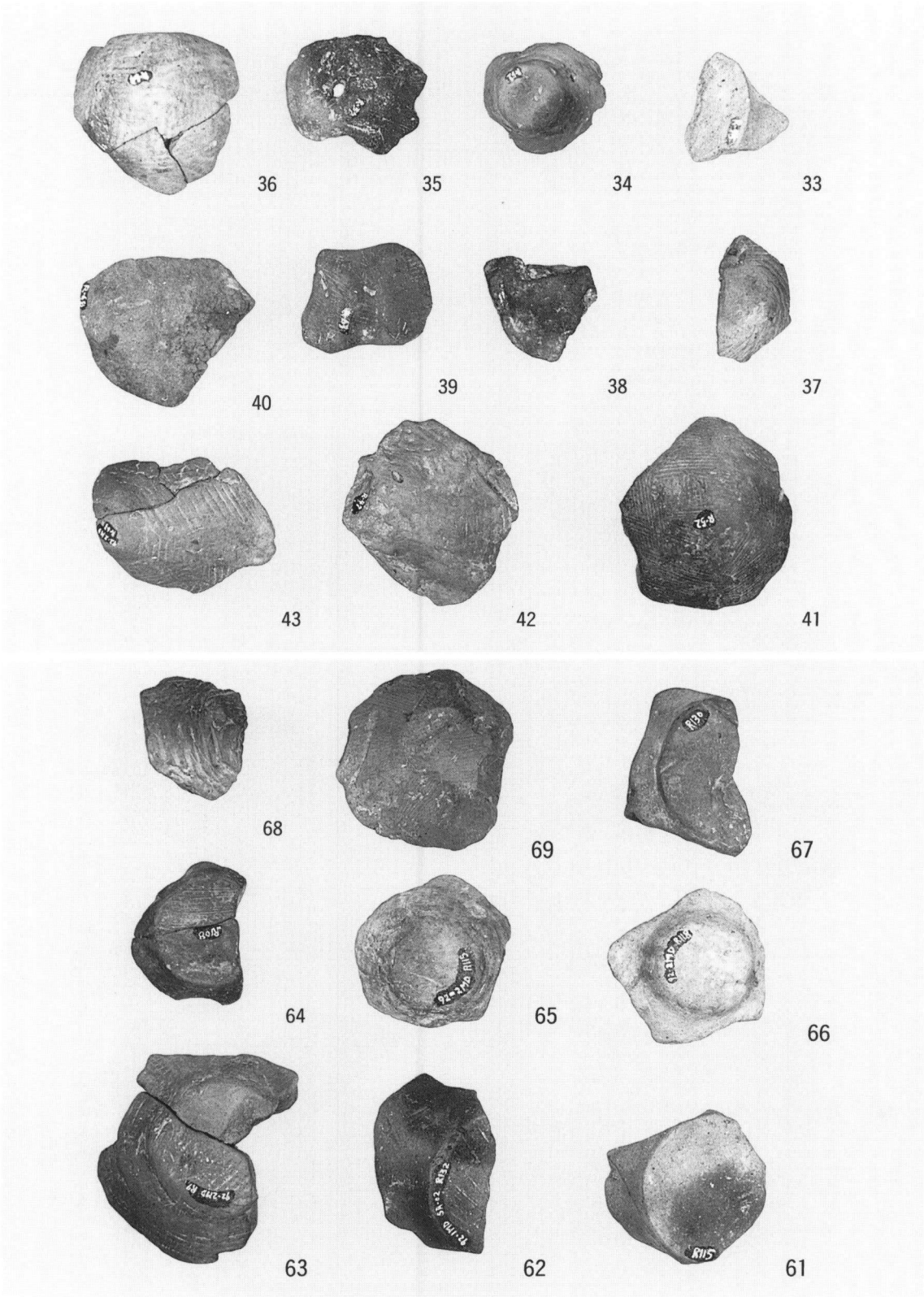






竪穴住居跡SA02出土遺物

図版12



竪穴住居跡SA01(33～43)，SA02(61～68)出土遺物